衝撃のシミュレーション

2050年は江戸時代

石川英輔

講談社文庫

石川英輔（いしかわ・えいすけ）
1933年京都府生まれ。武蔵野美術大学講師。江戸の庶民生活や会社を研究し、〝誤解され〟ていた江戸の知恵と楽しさを正しく伝えるエッセイ『大江戸事情』シリーズのほか、現代人と江戸芸者の時空を超えた恋心を描いた小説『大江戸神仙伝』『いな吉江戸暦』などで大好評。

カバー装画　熊田正男

い10-16

衝撃のシミュレーション

2050年は江戸時代

石川英輔

講談社文庫

石川英輔

い10 16

2050年は江戸時代
衝撃のシミュレーション

講談社文庫
Y552

ISBN4-06-263809-6
C0193 ¥552E (O)

2050年は江戸時代
衝撃のシミュレーション
石川英輔
定価：本体552円 ※消費税が別に加算されます。

い10 16

21世紀、物質文明の行きづまりから、日本は省エネルギー、完全リサイクルの江戸時代へと回帰していた。一日三時間半働けば暮らせる晴耕雨読の生活。必要なモノは簡単につくれる自給自足社会。自然と共存共栄していた江戸の精神と豊かさ、楽しさをわかりやすく伝え、現代文明に警鐘を鳴らす衝撃の問題小説！

講談社文庫
石川英輔 作品

- 大江戸神仙伝
- 大江戸仙境録
- 大江戸遊仙記
- 大江戸仙界紀
- 未来妙法蓮華経
- 大江戸えねるぎー事情
- 大江戸テクノロジー事情
- 大江戸生活事情
- 大江戸リサイクル事情
- 大江戸泉光院旅日記
- 雑学「大江戸庶民事情」
- 2050年は江戸時代 衝撃のシミュレーション
- SF三国志

2050年は江戸時代

衝撃のシミュレーション

石川英輔

講談社文庫

講談社文庫

2050年は江戸時代

衝撃のシミュレーション

石川英輔

講談社

2050年は江戸時代　目次

税金のない村 9
桃園学舎 31
桃園村とユートピア 53
長老の考え 73
先祖返り 89
昔は良かった？ 101
成功は失敗のもと 119
東京が暑かったわけ 147
貴族国家 169
三つの病気 195
なし崩し 225
工と農 245
都落ち 263
終わり疑わしきことは…… 279
自らのために給す 305
あとがき 324
文庫版のためのあとがき 325

2050年は江戸時代

初出誌　『小説歴史街道』　一九九四年七月号・十一月号・十二月号
一九九五年一月号

税金のない村

「よーし、最後の一個だ。いいぞう。上げてくれえ」
晴彦(はるひこ)は、右手に持った手拭(てぬぐ)いを振りながら大声でいった。
尾根の上で下の様子を見ていた太郎が、すぐに大型のウィンチの横へ行ってハンドルを廻し始めた。村の大字(おおあざ)である町田という土地に去年から住んでいるので、通称を町田の太郎、あるいは単にタロちゃんと愛称で呼ばれている力持ちの好青年である。
間もなく、古い自動車のエンジンにしっかりからげたワイヤロープがぴんと張り詰めると、古エンジンはゆっくりと宙に浮いて、谷の底から尾根の上まで斜めに張ったケーブルの方へ、揺れながら上がって行った。
「オーケーだ」
エンジンがケーブル沿いに上がり始めたのを確認してから、晴彦は、もう一度大声を出した。太郎がハンドルを廻すにつれて、保存状態の良い古エンジンは銀色の光を反射しながら、次第に尾根の方へ登って行った。今日の作業予定は五個なので、午前中に終わってしま

ったのだ。

晴彦は、手拭いで額の汗を拭いてから、草鞋の緒をしっかりと締め直し、山のように積み上げた古エンジンの上に慣れた足取りで登った。エンジンの山はごつい防水カバーで丁寧に覆ってあり、その日に積み出す所だけはがしてあるのだが、作業が終わったので、またもとに戻さなくてはならないのである。

防水カバーのそばまで登った晴彦は、カバーの縁にしっかり縫いつけたロープの輪に鉄の鉤を引っかけてから、ちょっと仕事の手を休めてエンジンの上に腰をおろし、もう一度汗を拭いた。まだ三月の末だが、空は晴れ上がって陽射しが強い。力仕事をしたので、拭いても拭いても汗が流れた。

何万台あるのか、正確な数は今となっては誰にもわからないが、古い自動車とエンジンが、この涸谷の大部分を埋め尽くしている。金属、中でもアルミニウムは軽工業のためには非常に貴重な資源なので、最近では、アルミ部分の多い古エンジンを月に十個も売れば村の経費がまかなえるため、五年前から、この桃園村では村税がなくなった。

その代わり、二十歳以上五十歳以下の男は、三ヵ月に一度ずつぐらいの割合で涸谷へ来て、古エンジンを出荷する荷役作業をしなくてはならないのだ。しかし、普段から農作業をやり慣れている花園村の男たちにとっては、骨休めになる程度の軽作業だったから、どこからも苦情は出ない。

一息ついた晴彦は、またエンジンの山から身軽に降りると、ロープを巻く小型のウィンチの所へ行ってハンドルを廻した。廻すにつれて、まくり上げてあった防水カバーがずるずると降りて来てエンジンの山をすっぽりと覆った。あとは、カバーが風にあおられないように固定すれば、今日の作業は終わりだった。

見上げると、尾根の上でも、太郎がトラックの上にエンジンを降ろす作業を終えたらしく、谷間を見下ろしていたが、晴彦の作業が終わったことを見届けてから、

「三田村さーん。休みましょう」

と、大声で呼んだ。

「ああ、今行くよ」

晴彦も大声で答えると、狭い急な登り道を軽快な足取りで尾根の方へ戻って行った。頂上に着くと、太郎が草葺きの作業小屋から顔を出していった。もともと丸顔なのに、髪を短く刈っているから、なお丸く見える。

「三田村さん。お茶入れますよ」

「有難う。ちょっと、顔を洗って来る」

晴彦は、小屋の横を通り抜けて、涸谷の反対側の水沢谷へ降りる道を五十メートルほど下ると、岩を積んで作った水場へ行った。涸谷は岩だらけで、名前の通り水気がほとんどなく、草もあまり生えていないが、こちらは木が鬱蒼と茂り、地面も苔で覆われていた。そし

て、名前の通り、方々から水が湧いている。ここは、村の水源の一つで、谷の下の方には、水車小屋もあった。

顔と手を洗って作業小屋に戻ると、太郎は、土間の中央を掘って作った囲炉裏に薪をくべていたが、すぐにすすけたやかんから土瓶に湯を注いだ。

「これで、午後はまた畑へ出られますね」

農作業の大好きな太郎は、嬉しそうにいった。晴彦が、囲炉裏の縁へ足を入れて座ると、太郎が、すぐに大きな湯飲みに茶を注いでくれた。

「味噌汁もできてますけど」

「有難う。一杯入れてくれないか」

晴彦は、茶を一口飲んでから、弁当を開いて食べ始めた。太郎は、どんぶりを二つ取ると、木の杓子で味噌汁を満たしてから、自分も弁当を開いた。

「ここへ来てからもう十ヵ月になるけれど、今でもご飯を腹一杯食べられるのが、夢みたいだなあ」

太郎は、自分で作ったらしい箸を太い指で器用にあやつりながら、麦飯の大きな塊といっしょに厚切りのタクアンを口に運び、豪快な音を立てて噛み切った。

「まだ、村の人の足手まといになってるけれど、もうすぐ自立できますからね」

「なあに、今の五十代の中年組より、きみの方がずっと役に立ってるさ」

晴彦は、現代青年らしくずんぐりした体つきを頼もしそうに見ながらいった。

「今、村で本当に役に立っているのは、七十以上と、三十代以下だ。四十から六十にかけてのあの世代の人達は、まるで体力がないからなあ。特に、村出身だけれど、子供の頃に親に連れられて都会へ出て、大刷新になってから戻って来た人は、もともと都会のサラリーマンの方が高級で、百姓は下等な仕事だぐらいに思っているから、始末が悪い。

世の中が土台から変わってしまったことが、まるでわかっていないんだ。

おまけに、背ばかりひょろひょろと高くてすぐ病気になる。ここ五年ぐらいの間に村で死んだのは、全部あの世代だもの」

「そんなに亡くなったんですか」

「うん。本当にヤワな人が多いよ。きみみたいに、背が低くてがっしりしたたくましい感じの人なんてほとんどいない」

「そういえばそうですね。みんな、すらっとしていてかっこがいい。でも、三田村さんの叔父さんなんて、強そうな感じだな」

「ああ、あの人は、ずっと村を離れずに専業農家をやってたから、特別だよ。

ぼくの死んだ両親なんて、病気ばっかりしていて本当に弱かった。叔父夫婦がしっかりしていたから何とか生活ができて、ぼくも一人前の百姓に仕込んでもらえたけれど、そうじゃなければ大変だったと思う。

ただ、あの世代の人は、何となく醒めたところがあって、やたらと子供を作りまくらなかったんだな。だから、ぼくの友達も一人っ子が多いだろう。おかげで、今の人口は大刷新前の半分近くしかない。

もし、あの人たちが反動派の口車に乗せられて、もっと古い世代みたいにやたらと子供を生んでいたら、とても国内で食料の自給ができなくて、大刷新の頃には餓死者がずいぶん出ただろうっていう話だ。東京時代には、地球全体の人口が増えるのはよくないけど、日本の人口だけは国力を強化するために増やすべきだと唱える人口帝国主義者が大勢いたそうだからね」

晴彦は、村の特産品になっている稲鴨の煮つけを食べながらいった。

「でも、タロちゃんみたいな人が、村へ来てくれて良かったと思ってるよ」

「おれだって、本気で桃園村の村民になれるなんて思っていなかったもの。東京で車引きをやってたから、体力だけは自信があったけれど、来てみたら強そうな人ばっかりだから、すっかり自信喪失で、あきらめて帰ろうかと思ったものなあ。

体力審査の時も、天秤棒の両側に三十キロずつつけたのをかついで、段々畑の上まで十往復するのをやらされた時は、ただ意地悪して落とすための審査だと思いました。でも、実際に開墾をやる時なんて、あれぐらいできないとだめですね」

「うちの村は、税金を払わなくていいし、土地が肥えていて作物がよくできるから、住みたい人が多いんだ。でも、口先が達者なくせに体力のない人を入れると、あとが大変なんだってさ。だから、村の出身者が全部帰って来てからは、長老会議が必要だと判断した時だけ、ああいう荒っぽい審査をして入村させるきまりなんだよ」

「だから、ここで二反の農地をまかせられるなんて、今でもまだ夢みたいです」

「あの最初の二往復か三往復で、入村希望者はほとんどダウンするそうだ。でも、百姓は口先だけじゃできないからな」

晴彦は、ちょっとばかにしたようにいった。さっさと食事をすませた太郎は、

「御馳走さま」

といって手を合わせてから、空になった弁当箱をそそくさとしまった。

「じゃ、田圃の準備が忙しいから、お先に行きます」

「弁当を食べたら、すぐにトラックで役場まで下るんだから、いっしょに行こう。その方が早いだろう」

「でも、お天気が良くて気分がいいから、歩きますよ。少し風も出てきたから、さわやかでいいです。山菜も摘めるし」

太郎は、脱いでいた草鞋をはき直し、しっかり緒を締めて立ち上がった。

「それもそうだ」

晴彦は、苦笑した。

「このおんぼろトラックでがたがたゆられて行くより、水沢谷の道を下って行く方が気分いいもんな」

「谷の下の方は、さくらが咲き始めてます。じゃ、お先に」

弁当の包みを首に巻きつけた太郎は、足早に小屋を出て行った。

昼食を済ませた晴彦が、火の始末と戸締りをしてからトラックの前へ行ったのは、太郎が出て行ってから十五分以上たってからだった。

「あいつ、足が早いから、もうそろそろ村へ着く頃だろう」

晴彦は、ひとり言をいいながらトラックのドアを開き、鍵を鍵穴に入れてイグニッションの電源をオンにした。そして、運転台の下から引き出したクランク棒を持って車の前に廻り、エンジンカバーの下に開けてある穴にさし込むと、足を踏ん張って腰を入れ、全体重をかけてクランク棒を廻した。大きなエンジンを腕力だけで始動するのはかなりの力仕事だが、晴彦は慣れていた。三回目にエンジンは鈍い音で動き始めた。

このトラックにも、もちろん最初はスターターがついていたが、貴重なガソリンの使用量を少しでも減らすために、今では外してある。かつて、大手の自動車メーカーの系列企業で機械技術者として働いていた村の最長老、鍛冶屋の本山吾一朗が、手で始動するように改造してくれたのだ。大型エンジンのスターター代わりをするにはかなり力がいったが、力仕事に慣れている晴彦は、軽々とエンジンを廻して始動させると、すぐにクランク棒を座席の下

に戻してから運転席に上がり、ゆっくりと車を発進させた。

三十年も前にできたトラックだが、大事に使っているから、きしみながらも何とか力強く動いてくれるが、もう二十年以上も舗装をやり直していない道路は穴だらけだ。そこに砂利や土を入れて突き固めてあるが、重い荷物を積んで走ると大揺れに揺れた。

慎重にカーブを曲がりながら、ゆっくりと山を降りた晴彦は、村の通りをのろのろと走って、役場の横にある広い倉庫にトラックを入れた。ここまで降ろしておくと、古エンジンの買い手が引取りに来てくれるのである。

「あ、お帰りなさーい」

晴彦が、運転席から飛び下りると、車の音を聞きつけた役場の担当者、大峰一郎が書類片手に駆け出して来た。今では、役場の専従職員はたった二人しかいない。村長でさえ、役場にいるより自分の田畑で働いている時間の方が長いのだ。

「五個あるから、確かめて下さい。それから、これが作業小屋の鍵と、トラックの鍵」

二人でいっしょにトラックの荷台を見てエンジンの数を確認し、ハンコを押してから鍵を渡せば、簡単な引き継ぎが終わる。

「それじゃ、さよなら」

「ご苦労さま」

晴彦は、弁当箱を提げて家に向かった。涸谷の作業で半日遅れたじゃがいもの植えつけを

しなくてはならないのだ。商品としての農作物を作るのが主な仕事だった大刷新前の農業と違って、今の農業は、基本的には自分たちの食べるための作物を作るのが目的だ。だから、作れるもの、作りたいものは何でも作る。

桃園村では、どこの家でも米、麦、そばなどの基礎穀物や豆、いもなどを作り、あとはそれぞれ好みの季節の野菜を手がけていた。余った分だけを、売るか物々交換に出すのだが、現金を手に入れたところで、最近では買える品物の種類が減っているから、どこの家も自家用の備蓄分を作るのに熱心である。

五分咲きのさくらの木が並んでいる役場の通りを足早に行くと、二十メートルほど先の建物から、裾の長い藍染めの作業着を着た華奢な感じの若い女性が出て来て、片手に持ったつばの大きい麦藁帽子を振った。織田しおりだった。晴彦も、手を上げた。

「さっき、トラックが役場の方へ行ったから、そろそろ帰る頃だと見当をつけて待っていたのよ」

晴彦が立ち止まると、しおりは簡単な門柱によりかかるようにしていった。そばかすが少し浮いて見えるほど色白で繊細そうな顔に、縁の細い眼鏡がよく似合っている。

「涸谷の仕事が午前中で片づいたから、午後はじゃがいもの植えつけができると思って、急いで帰って来たんだ」

「今日の作業は、一人だったの?」

「太郎といっしょだ」

「あ、タロちゃんなら、さっき前を通って行ったわ。なぜ、いっしょにトラックに乗って来なかったのかな」

「水沢谷を歩いて帰る方が気持がいい、とかいって、一足先に帰ってしまったんだ」

「ごもっとも……っていう感じね」

しおりは、無造作に束ねた豊かな黒髪を左の肩の前に引っ張りだして、指先で梳きながら笑った。

「ところで、今夜は、藁細工やるでしょう」

「うん。もちろん、夕食をすませて、いつもの時間に始めるよ」

「そう。じゃ、掲示板に書いておくわ」

しおりは、今出て来た建物の方へ引き返した。入口には、『桃園学舎』と書いた大きな表札が出ている。

「しおりちゃんも話すんだろう」

二人は幼なじみなので、ほかの人がいない時は、子供の頃からの習慣が出て、相手をちゃんづけで呼ぶ。

「ええ。でも、わたしのはつけたしよ。皆さん、晴彦ちゃんのがお目当てだから」

そういいながら、しおりは入口の横の壁に下げてある黒板の前へ行き、〈今日の予定〉と

エナメルで書いてある横に、ちびたチョークで、

七：〇〇～七：三〇　古文解読　織田しおり
七：四五～　藁工芸実習　三田村晴彦

と書いた。

この建物は、もとはこの地区の公民館だったが、今では、桃園村の私設教育機関になっている。晴彦は週に二回、ここで草鞋と藁草履を中心にした藁製品の作り方を教えていた。最近では、大刷新以前の古い時代の物資の在庫が次第に底を突いてきたため、稲藁を無駄なく使わないと生活が成り立たなくなりかけていた。藁細工の実習に人気があるのは、そのせいだった。

五十代の人々を中心とした中年は、手仕事が苦手、というより、体を動かしてこまめに働く習慣がないため、自分のものを自分で作ろうという意欲に乏しい。それでも、五年ぐらい前までは、大刷新前に作った古い靴などが手に入ったから、藁草履などばかにしてはかなかったのだが、最近ではそんなことをいっていられなくなって、仕方なく習いに来る人が多い。

大刷新は、近代日本の国民にとって、明治維新と第二次大戦の昭和敗戦に次ぐ三度目の大変革だった。まだ二十代のしおりや晴彦の世代は、生まれた時には、すでに大刷新後の社会が安定状態になっていたから、今とほとんど同じ状態しか知らないし、自分の食べ物は自分

で作るという農業社会に適応してしまっている。

大刷新の前に、今では、江戸時代の次の『東京時代』と呼んでいる華やかな時代があったこと。そして、途上国の人口爆発による世界的な食料不足で、工業第一で農業を軽視していた日本も深刻な食料危機に陥ったことは、小学校でくわしく教わった。世界的な工業国だった時代なら、金にものをいわせて世界中から食料をかき集めることもできたが、工業生産が行き詰まってくると、その手も使えなくなった。

以来、二度と過去のあやまちを繰り返さないように生活全体を見直しながら、自給自足のできる今のような農業社会を作り上げたおかげで食べ物に不自由しなくなった、という苦労話も、若い世代なら耳にタコができるほど聞かされている。

そればかりか、小学校で、「けっして、あのあやまちは繰り返しません」などと斉唱させられたことさえあったのだが、若者たちにとっては今がすべてであり、正直なところ、明治維新も昭和の敗戦も大刷新も同列の歴史上の事件にすぎない。

東京時代の人ならがまんできないような農村の生活も、それしか知らない世代にとっては特に苦痛でもなかったが、五十歳前後から六十歳ぐらいまでの人々のうちには、社会の大きな変化に適応しきれず、東京時代の古くさい生活意識を引きずっている人が大勢いた。

晴彦たちにすれば、中年の世代がなぜ気持の良い下駄や、自分で簡単に作れる藁草履を嫌って、わざわざ古ぼけた靴を探してはき、足を変形させなくてはならないのか理解できなか

った。だが、靴を安く買えた時代に育った世代にとっては、原始的な木製や藁製の履物（はきもの）など見るのも不愉快だったのである。

しかし、最近では、いくら原始的でも藁で作った履物をはかなければ、はだしで歩くほかない状況になった。稲作が盛んな土地柄だけに材料の藁は豊富にあって、藁細工ができれば便利な日用品をいろいろ作れるため、藁細工にくわしい晴彦が、去年から週に二度教え始めていた。

実際に作る腕前からいえば、七十歳以上の人には晴彦よりずっと上手な名人級のベテランがいるのだが、藁に触れたこともない初心者を名人につけるのは無駄なので、最初は、藁縄の綯（な）い方から晴彦が手ほどきして、まず自分の履物が作れるところまで指導することにしていた。

習いに来るのは、最初は中年世代だけだったが、今では、その中年である親の世代から技術を伝えられなかった若い世代も増えた。しかし、若い世代は履物の作り方ぐらいすぐに覚えてしまうので、最近では、晴彦の方がタネ切れになりかけて、地元独特の藁製品の作り方を伝えている老人を訪ねては、技術を仕入れるほどになった。

「古文解釈は、今日はどんな文章を使うの？」

晴彦が尋ねた。しおりは、東京時代の生活が生々（なまなま）しくわかるような古い文章を見つけてきて、聴講者といっしょに考えながら読むのが好きなのだ。

「ちょっと面白いのを見つけたのよ。今までは、東京時代の情緒的な文ばかり読んでいたけれど、今度は、『VRメディア時代のデジタル的感性』っていう題で、大刷新以前の古い新聞に出ていた文章だけど、正直いってわたしにもよくわからない単語ばっかり出てきて、ほとんど意味がわからないの。

だから、意味の解釈をするっていうより、祖父母の時代の人が、こんなむずかしい文章を日常的に読んでいたということを、みなさんに知ってほしいと思ってね」

しおりはそういうと、桃園学舎の入口のドアを閉めながらいった。

「わたしも、まだ午後の畑仕事があるから、帰らなくちゃ。いっしょに行きましょう」

二人は、昼さがりの道を家に向かった。同じ地域に育った二人の家は、お互いに百メートルも離れていなくて、ここからは同じ方向なのだ。

「しおりちゃんは、きのうでじゃがいもは終わったの？」

「ええ。うちは、おととい全部植えつけて、今日から父が田圃の下ごしらえを始めたから、手伝わなくちゃ」

六千五百万人という膨大な人口が、狭い国内で食料を自給しなくてはならない現代社会では、とにかく田畑を耕して、作れるものは何でも作る。自分の食べ物を作ることがすべてに優先するから、まず、野良仕事をして、余った時間でほかのことをするのが大原則なのである。

ほっそりして見えるしおりも、子供の頃から農作業には慣れているから、二十七歳の今では一人前の農民だ。農作業といっても、最近は人力農業機械が発達しているから、肉体的にはあまり辛い仕事ではないが、大刷新以後の世の中では、農業ができなければ一人前扱いされない。

農道に入ると、やや強い風が吹いて来た。何か考えながら歩いていたしおりは、飛ばされないように麦藁帽子のつばをおさえながら、のんびりした口調でいった。

「何か新しい講座のテーマはないかなあ」

「しおりちゃんは、本当に桃園学舎が好きなんだね」

「だって、世の中には、面白いことがいっぱいあるのに、なかなか知る機会がないから、いらいらするわ。知らないままでいたら損じゃない。それに、近頃は、桃園学舎へ来る人も最初の五倍以上に増えたでしょう。みんな、何か知りたいのよ。

面白い話のできる人がどこかにいないかなあ」

口ではそういうものの、楽天的なしおりはあまり苦にしている様子もない。今のところ、桃園学舎の評判は良いし、差し当たりは人の集まりも良いからだ。

「参加者が増えたから、そのうちにいい智恵を出す人もいるだろう」

晴彦も、のんびりといった。

今では、買った食料だけで生活しているのは全人口の五パーセント以下の三百万人程度にすぎない。しかも、耕さずに生きている人は、けっしてかつての世の中のように〈身分〉が高いわけではなく、どちらかといえば低い階層の人が多かった。自作農中心の農業社会では、貨幣にあまり価値がないため質の良い食料品が市場に出廻りにくく、自分で食料を作れない人の生活水準はどうしても低くなるからだ。

自作農が質量ともに社会の中枢になり、食料を作ることをすべてに優先させなくては生きていけない社会からは、かつての過剰なまでのゆとりがほとんど消滅していた。

政治や行政さえ、巨大な機構が、数十分の一の規模の調整役に縮小した。そもそも、政や官の権力の基盤は、国民から集めた膨大な税金を摑み分けすることなのだから、自分の口に入れるものは自分で作らなくてはならない社会では税収が激減して、膨大なクニの組織を存続させることさえできなくなっていた。

工業の大部分が消滅してしまったため、税金を払うほど現金収入のある国民がほとんどいなくなったのに、農作物を年貢として徴収するための法制は整わなかった。また、かりに制度だけを作ったところで、農民から供出させた米や麦を使って政府を運営するのは容易ではない。大刷新以後の日本の変化は、肥大化した政府が適応しようのないほど早かったのである。

こんな社会では、基礎教育の小学校でも、五年かけて読み書きと計算、それに農業の基礎を教えるのがやっとである。基礎教育の上の段階の高等教育機関もないではないが、教育を

受けたところで、社会的地位にも所得にも影響はない。たとえいい学校を出たところで、学歴を評価して高い給料を払ってやとってくれる官庁や企業がないからだ。

また、人口の何割をも占める若者が、大学という半ば遊ぶための組織に入って無駄な時間を過ごす余裕など、日本の社会のどこにもなくなっていた。血気盛りの青年を都会で遊ばせ、老人たちが山里で細々と食料生産に従事していたのでは、国民全部が飢え死にすることが誰の目にも明らかになるにつれて、高等教育を受ける人間は激減し、ついには東京時代最盛期の百分の一以下になった。これも、大刷新の結果の一つだった。

桃園村でも、七歳で始まる五年間の基礎教育のうちから、両親とともに田畑へ出るのが普通になっている。もちろん、最初のうちは本格的な農作業などできないが、子供にでもできる雑用はいくらでもあるから、遊びながら仕事を覚える。十五、六歳にもなれば、自分の食い扶持ぐらいは作れるようになった。

しかし、そうはいうものの、学校は日本人の趣味か癖のようなものだ。

江戸時代でさえ、日本人の識字率は当時の世界での最高水準に達していたというのが定説になっている。徳川幕府の官僚機構には、庶民の教育を担当する部門がなく、庶民教育についての一片の法令すらないまったくの放任状態だった。それにもかかわらず、十九世紀はじめの文化年間（一八〇四～一八）には、江戸府内だけで何と千五百もの手習師匠、つまり寺子屋があった。

東京時代と違って、江戸時代は、有名な手習師匠について勉強したところで、偉い役人になれる可能性はまったくないし、いい寺子屋を卒業すれば、格式の高い商店で高給優遇してくれるなどということは間違ってもなかった。それどころか、寺子屋では、卒業という発想さえなかったのだ。寺子屋へ行くのは、読み書きができないと自分が困るからであって、親がこれでいいと判断する程度に読み書きができるようになれば、その日がいわば卒業式だった。江戸時代の人は、ハクをつけるためにいい寺子屋へ行くなどという発想が理解できなかっただろう。

それにもかかわらず、江戸、大坂、京都、名古屋など大都市の市中に生まれ育った子供なら、身分を問わずほとんど全部が就学していた。モスクワの一九一〇年代の就学率が二十パーセント程度で、ヴィクトリア時代のイギリスの大工業都市の就学率もほぼ同じだったというのに比べるなら、誰にも強制されない日本の就学率の高さは驚異的といってもいいすぎではないだろう。

放任状態である以上、クニつまり幕府は、何もしてくれなかったのに、すべての初等学校を庶民がまったく自主的に運営していたのだから、本当に学校好きな国民性なのだ。

放っておいてもこれほど学校が好きなのに、明治維新以後の政府は、膨大な国費を使って帝国大学を作ったばかりか、最高の権威づけまでしてしまった。おかげで、ただでさえ学校が大好きなわが国民の間で、学校熱は一気に燃え上がり、東京時代の後半になると、本来は

人生の手段にすぎないはずの学校が、人生の目的になってしまったのだ。

東京時代の日本で重要だったのは、大学で何を学んだかという内容ではなくて、出身大学の名前だった。江戸時代の日本は、生まれた家の格によって人間の格も決まる封建制度だったが、東京時代には、出身大学の格式によって決まるようになっていた。

家の格は自分で選べないが、大学は自分で選べるところが進歩といえば進歩だったから、出身大学の名前によって人間の格が決まる学校封建制度は百年以上も続いたが、東京時代の終わりとともに完全に過去の霞のなかに消え去った。しかし、学校好きの国民の血は少しも変わっていない。

おまけに、クニが権威づけしてくれなくても、別に偉くなれなくても、貧乏でもかまわないから勉強したいという本物の学問好きは、少数ながらいつの世の中にもいるので、上級学校も細々と続いていた。特定の学問の分野、たとえば農学では、東京時代より今の方が水準が高いという意外な結果になっているというが、本当の学問好きだけが研究生活に打ち込んでいるせいだろう。

晴彦は、両親のたっての希望で美術大学へ行ったが、今の大学はすべて農村にあって、教師も学生も、自分の食料の半分ぐらいは自分で作らなくてはならないから、毎日田畑へ出ながらの勉強だった。しかも、晴彦は伝統的な藁工芸を専攻したから、進学したといっても、村にいるのと大差ない生活だった。

幸い、藁細工の上手な叔父夫婦に子供の頃からみっちり仕込まれていたから、実習では苦労しなかったし、大学にある写真や標本を見て、昔の人の考えたさまざまな藁細工を復元する機会があったから、今どき珍しいほど、すぐ役に立つ高等教育を受けた結果になったのは幸いだった。

村の旧家の一人娘で、大学の国文科を出たしおりの場合は、しばらく母校の助手、つまり駆け出しの大学教師をしていたが、実家で働き手が必要だったため、二年前に村へ帰って来た。しかし、やはり教師としての素質があったのか、農閑期に、仲間うちの勉強会のようなことを始めたのが桃園学舎に発展したのである。

名前は学舎でも、実際は、村の同好会だから、特別なカリキュラムも決まった教師もなく、その時々に適当な講師を頼むのだが、交通手段が少なく狭い範囲からしか選べないため、最近では同じような顔ぶれになるのが悩みのタネだった。

晴彦が藁細工の講座を始めたのも、日常生活に必要な技術を覚えたいという希望が多いので、しおりに頼まれたからだ。見よう見まねで苦労している人が多かったから、基本から教えてくれるのが喜ばれて、今では桃園学舎の大黒柱というほどの人気講座になっている。

桃園学舎の藁工芸講座が始まってから、村での藁利用率が一気に高まったばかりか、親の見よう見まねで、自分の履物ぐらいは自分で作れる子供も増えた。また、卵を入れて運ぶ藁づとの作り方を晴彦が伝えたため、卵を食品交換市場に出しやすくなったというような、実

用的な効果も上がっている。

ぶらぶら歩いて行くと、やがて二人の家へ行く道が分かれる四つ角へ来た。ここは四方とも生け垣になっていて、大きな桜の木がある。三分咲きの花の下へ来ると、しおりはあたりを見廻して人目のないことを確かめてから、ちょっと爪立ちして晴彦の唇に軽く口づけした。

「それじゃ、また今夜ね」

しおりはそういうと、顔の横で手を振ってから、小走りに家の方に向かった。晴彦も、二人で歩いていた時の三倍ほどの速さで歩き始めた。

桃園学舎

じゃがいもの植えつけに思いがけなく手間取ってしまったので、晴彦がそそくさと食事を済ませて桃園学舎にかけつけた時には、古い板敷きの部屋で織田しおりの授業が始まっていた。方々から集めた不揃いな机や椅子が並べてあり、自分で持って来た座卓と座布団を使っている聴講者も二人いた。

三十人ほどの聴講者は、二十代の若い世代ばかりで、太郎の顔も見えた。しおりは黒板の前に立って、ノートを見ながらチョークで文章を写していた。晴彦は、そっとうしろの席に座ってから、いかにも国語の教師らしい読みやすい文字で書いた古文を読んだ。

――マルチメディア時代のエンターテインメントVRのクリエーターとしては、手段としてのデジタルを使いこなせるアーチストであることが、ビジネスとして成立するための必須条件である。そのためには、アナログの写実的なビジュアル表現では不可能なイマジネーションの世界を、コンピューターグラフィックスによって限りなくブローアップし、人々のフィーリングに訴える能力が必要なのだ。――

黒板に書きおえたしおりが振り向くと、一番前に座っている一人の男性聴講者が、首をひねりながら尋ねた。

「ねえ、織田さん。大刷新以前の昔の人は、本当にこれを読んですらすらわかったのかなあ。とても日本語とは思えないけど」

しおりは、うなずいて答えた。

「普通の新聞に出ていた文章だから、普通の人にわかったと思うほかないでしょう。それに、大刷新以前の東京時代の文化を理解するのには、こういう文章を読むのがいちばん手っとり早いのよ」

晴彦も何度か読んでみて、首をかしげた。これまで一度も読んだことのない不思議な文章で、ほとんど意味がわからなかったからだ。しおりは、説明を始めた。

「江戸時代の人々の教養の基礎が、漢文つまり中国の古典語だったように、二十世紀後半の東京時代の日本人の教養の基礎は、その当時のアメリカ英語でした。

この時代の古文を読むには、かなり、英語……それもカタカナ化した英語の素養が必要だということは、これまでも何度か説明しましたが、日本語で書いてもわかるようなことまで、カタカナ英語で書けるのが教養のあかしでしたから、こういうふうになるべくカタカナ英語をたくさん使える人が、知識人として尊敬されたのです。

もちろん、一般人でも英語が非常によくわかって、これぐらいの文章はすらすら読めたことは知っておいて下さい。じゃ、最初から読んでみましょう」

しおりは、少しずり落ちた眼鏡に手をかけて押し上げると、黒板の方を向いた。

「それでは、まず、マルチメディアから説明するべきですが、これは当時としてもかなりあいまいな意味に使っていたようで、今となっては、はっきりわかりません。それ以前には独立した道具だった電話の音声やテレビの画像などを同じ電線を使って送り、コンピューターを使っていろいろな方法に利用することのようです。

しかし、どこの家にも電話とカラーテレビとコンピューターがあったという大刷新以前の生活感覚は、正直なところ、今のわたしたちにはあまりよく理解できません。マルチメディアというものをどんな形で使っていたのかもはっきりしないのです。言葉だけあって、はっきりした実態はなかったと書いた文献もあります。

いずれにせよ、わたしもまだ三十歳前ですから大刷新のずっと後の生まれで、電灯とラジオ以外の電気器具をほとんど知らない世代です。当時の生活感覚がまったく理解できない点では、みなさんと同じなのです。

次は、エンターテインメント……これは、ここでは娯楽という意味に使っています」

「質問……」

前の方にいる女性の聴講者が手を挙げた。

「はい、どうぞ」

「それなら、どうして、マルチメディア時代の娯楽と書かずに、わざわざ英語を使ったのですか」

「エンターテインメントは英語独特の言葉で、日本語にはない広い意味があるから、翻訳しないのです。たとえば、楽しませてくれる人をエンターテイナーといいますが、これに相当する日本語はないので、はじめから全部カタカナ英語として取り入れてしまったのでしょうね。

外国人の姿を見ることさえほとんどない現代人と違って、東京時代の人は、アメリカ人との接触も多くて英語の教養が充分にあったから、エンターテインメントという英語の深い意味が理解できたと考えて下さい。

それでは、次のVRへいきましょう。これも英語で、ヴァーチャル・リアリティという言葉の頭文字を並べた略語です。仮想現実感と訳します。この時代の流行語だったらしく、現実には存在しないのに、まるで現実に存在するように感じられる、という意味で、東京時代にはその機械が大流行して、一般家庭にも入りました。

次のクリエーターという言葉も、やはり英語で、何か新しいものを作りだす人、創造者というような意味です。デジタルは、ものの量を、二進法という数学的手法で表現すること。アーチストは、芸術家のことです。ビジネスは、商売、事業です。

ここまでの意味をかいつまんでいうなら、『電話、テレビなどを一本化して利用する時代

の娯楽としての仮想現実感を創造する人は、二進法を使いこなせる芸術家でないと、事業としては成り立たない』ということになります」

「でも……」

また一人、別の女性聴講者が手を挙げて質問した。

「それは、言葉をいい換えただけで、わたしには、やっぱり何のことかわかりませんけれど」

「そうでしょう。話してるわたしも、本当はまるでわかってません。なぜ、事業が成功するのに二進法という数学が必要なのか、わたしの頭ではいくら考えてもわからないわ」

しおりが困ったような顔でいったので、聴講者たちは、どっと笑った。

「でも、わたしには、なぜわからないかがわかってます。それは、大刷新前の東京時代の生活が、今のわたしたちの生活と違いすぎるせいなのよ。

だから、いくら一つ一つの単語の意味を別の言葉でいい換えたところで、その背後にある生活がわからない限り、本当の意味はわかりません。古文を読むむずかしさも面白さもそこにあるのです。

こんな文章を見つけてきて読んだわけは、そのことを知ってほしかったからです。古文の本当の意味を知るためには、その時代の生活の実態がわからないと無理だということが、これだけの文を読んでもよくわかるでしょう。だから、この表面的な意味はわからなくても、

自分で問題を考えるための手がかりにすることはできます。

たとえば、大刷新以前の昔の人が、それほど英語好きだったのに、なぜ日本語をやめて全部英語にしなかったのか、その理由を考えるだけでも面白いと思います」

しおりの話はいつもこんなふうで、古文の意味を正確に解読することよりも、その時代背景の説明が主になる。堅苦しい講義はせず、すぐ雑談になってしまうから、それが楽しみで聞きに来る若者が多かった。

「あのう、ちょっと質問していいでしょうか」

遠慮がちな声を出したのは、太郎だった。

「どうぞ」

しおりは、胸のポケットから小さく切った手拭いを取り出して、額ににじんだ汗を拭いた。

「この文章を見てすぐわかるのは、大刷新以前の社会には、ぼくたちの知らないものがずいぶんあったらしいということです。

ぼくは、去年の春先まで東京で車引きをしてましたから、方々見て歩いたけれど、皆さんも知っているように、今の東京は、大部分が崩れそうなビルばっかりの廃墟です。あまりコンクリートで固めすぎたため、田圃にも畑にもならず、夏はやたらと暑くて冬はこごえるほど寒いから、誰も寄りつかなくなったせいです。

役に立ちそうなものはとっくの昔に引きはがしてしまったから、どのビルもお化け屋敷のように荒れ果ててますが、それでも、たまにはまとまった金属の塊なんかを見つける人がいて、ぼくは、それを荷車に載せて運ぶ仕事をしてました。

だから、東京の中ではあちこちへ行ったけれど、ガラスのない窓からビルの中をのぞくと、何に使ったのかわからない不思議な機械の残骸が、土埃に埋もれてごろごろしていました。昔の日本はあんなに機械だらけだったのに、どうして今のように機械のほとんどない国になってしまったのか、本当に不思議です。

ここの涸谷にも、古い自動車や古いエンジンがびっくりするぐらいたくさん積んであります。あそこは、大刷新前に日本で作った自動車の捨て場だったそうだけれど、今では、自動車なんてめったに見かけないのに、五十年ほど前までは、捨てるほどたくさんの自動車を日本でも作っていたなんて、ちょっと信じられません。

ぼくは、この村では新入りだから気になるのかもしれないけれど、なぜ涸谷にあんなにたくさんの古自動車やエンジンがあるのか、そのいきさつを書いた古い文書があれば、織田さんに読んでほしいです」

しおりは、首をかしげた。

「物心ついた時には、村はもう今と同じようになっていたから、世の中はこんなものかと思っていたけれど、どこの村にも古自動車の山があるわけじゃないのだから、そういわれてみ

れば、不思議な話ね。

涸谷の自動車は、大刷新の時にはもう積んであったそうだから、ずいぶん古くからあったことになるけれど、役場へ行けば事情がわかるかもしれないわ。時間があったら、明日にでも行って聞いてみるけれど、もしあったらその古文書を写してきて、みんなで読んでみましょう。

みなさん、ほかにそういう面白そうな話題があれば、提案して下さい」

もともと、話題を引き出す目的で昔の文章を持ち出したのだから、しおりは喜んで水を向けた。すぐに、一人の青年が手を挙げた。晴彦の友達でもある本山明夫だった。村の最長老、本山吾一朗の孫で、小学校へ入る頃から鍛冶屋の訓練を受けているから、今では腕の良い職人である。

「うちには古い文書はあまりないけれど、大刷新以前の機械や何かのことなら、うちのじいさまに聞けばわかると思うよ。今の古文でも、じいさまに読ませれば大体の意味がわかるんじゃないかな。大刷新前から、東京で技術者やっていたそうだから」

「それは、いい考えだわ」

しおりは、両手を打ち合わせながらうなずいた。

「今度、本山のおじい様にここへ来ていただいて、大刷新以前の昔のことをくわしく話していただきましょうか」

「賛成だ」

晴彦が拍手しながらいった。

「ぼくは、役場のトラックの係をしてるから、あちこち改造してもらったり、修理してもらったりで、本山さんにはずいぶんお世話になってる。そのたびにいろいろな話を聞いたけれど、大刷新以前の世の中って、今では想像もできないような、不思議なことばかりやっていたらしい。

ただ、あんまり現代人の常識とかけ離れているもんだから、まるで、おとぎ話かよその星の話でも聞いているみたいで、よくわからなかった。でも、そういう断片的な話じゃなくて、大刷新の時に何が起きたのかを時間を追ってずっと話してもらえば、近代の歴史がかなりよくわかるんじゃないかな」

「そうしましょう」

また新しい提案が出たから、しおりは嬉しそうにうなずいたものの、ちょっと不安そうに尋ねた。

「でも、本山のおじい様は、もう八十いくつでしょう。いやがられないかな」

明夫は、自信ありげに答えた。

「その点は保証するよ。この間、八十九になったばかりだけれど、まだ一日に二、三時間は、現役の鍛冶屋をやっているし、ぼくより物覚えがいい。家でも、弟子を相手にけっこう

長話をしてるから、週に一、二回ここへ来て、一時間や二時間しゃべるぐらい平気だと思う。

でも、一応ぼくから話してみるよ」

「お願い。じゃ、明日の晩、仕事が終わってから、わたしが本山さんの所へ様子を聞きに行くから、おじい様をうまく話に乗せておいてね」

桃園学舎のことは、いつもこの程度のいい加減さで決まった。純粋な同好会で、しおりが世話役をしているほか、指導者も何もいない。いやなら聞きに来なければいいし、誰も来なければお流れになる。面白い企画があれば、自分でやればいいだけのことだから、反対も賛成もないのである。

「晴彦君。そろそろ始めてますよ」

その時、教室のドアを少し開けて、晴彦の父の大学の後輩だったという太田（おおた）が声をかけた。隣の作業室にはもう藁細工を習う人が集まって、作り始めているのだ。

「ああ、もうこんな時間だ」

晴彦は、慌てて立ち上がって作業室へ行った。四十人ほどの男女が、板の間に敷いたむしろの上に座って藁と取り組んでいた。古文の方からも、三分の一ぐらいの人数が藁工芸の方へついて来た。

「どうですか。わからないところがあれば聞いて下さい」

自分の席に座りながら、晴彦は声をかけた。自分の席といっても、ほかの人と同じようにむしろの上に座布団代わりのさんだわらを敷いただけだ。

すぐに、先週から始めたばかりの人が来て、細かい部分について質問した。続いて、自宅で作った製品の仕上がりを批評して貰（もら）いに来た人が何人かいて、そのあとは、みんなそれぞれおしゃべりしながらせっせと手を動かしている。

この講座に来る年代の人は、最近まで藁に触れたこともないのが普通だったから、最初の頃は、藁の扱い方からいちいち教えなくてはならなかった。だが、最近では、先輩が新入りに教えてくれるので、晴彦の仕事はずっと減っていた。藁細工は、もともとが学校で習うような性質の作業ではなく、家庭の中で親や年上のきょうだいの見よう見まねで伝わってきた技術なのだから、その方が自然なのである。いずれは先祖返りして、またそういう時代になるだろうと晴彦は思っていた。

「あっちの教室では、何だか、ずいぶん話が弾んでいたみたいだな」

太田が、晴彦に話しかけた。

「ええ。例の町田のタロちゃんが、涸谷の古自動車は、いつ誰があそこに集めたのだろうといい出したもので、それでわいわいやっていたのですよ」

晴彦は、見本用に作りかけていた藁靴を、器用な手つきで編みながら答えた。

「涸谷の……ねえ。あれは、ずいぶん古いことで、わしの物心がついた頃には、もう涸谷の

大部分が古自動車とエンジンで埋まっていたもんだ。確か、今の村長のお祖父さんに当たる人が村長だった時に、一台いくらとか金を取って自動車の捨て場を始めたもので、村にはずいぶん金が入ったということだ」

「村で、反対する人はいなかったのですか」

「涸谷は、名前のとおりほとんどが岩場で、水が湧かないことを地元の者は知っていたから、別に害はないと思っていたのだろうな」

「じゃ、涸谷があいう地形だから、自動車の捨て場を始めたのですか」

「そうだと、わしは聞いているよ」

それまで二人のやり取りを黙って聞きながら藁草履を編んでいた、六十歳ぐらいの女性が口をはさんだ。

「わたしが母に聞いたところでは、反対する人もいたけれど、時の村長さんがみんなを説得なすったということですよ。

村長は昔からの名主の家柄だから、村のためにならないことはしないと、みんなが漠然と思っていたし、どうせ水の湧く場所じゃないし、捨てる業者が地面に分厚い防水シートを敷くというし、あそこは山菜もあまり出ない谷だったから、何となく納得したとかいう話でした。

実際、今まで何も悪いことが起こらなかったし、今では村の大きな財産になっているのだから、あの時の村長さんは先見の明がおありだったんだよ」

「そうそう。それで思い出した」

太田が、うなずきながら晴彦の顔を見上げた。

「ただ捨てたのでは、あとが大変だからとかいって、エンジンとガラスとタイヤは現場で外して別々に積み上げさせたんだ。車体はクレーンで吊って上から谷へ落としたから、自分の重みだけでかなりぺちゃんこになる。その上へまたどんどん落としたから、底の方の車体は、衝撃と重みで煎餅みたいになってるだろうなあ」

それを聞いて、晴彦がいった。

「でも、もう一つよくわからないのは、なぜ、昔の人は、こんな山の中まで捨てに来なくてはならないほど大量の自動車を作ったかということです。必要なだけ作って大事に使えばずっと安くつくだろうに。

だって、役場のあのトラックなんて、ぼくの生まれる前にできたのに、手入れがいいから、三十年もたった今でもちゃんと動いてますよ」

「大刷新前のことは、今考えればわけのわからんことばかりさ。わしは、子供だったからあまりよく知らんが、覚えている限りで考えても、東京時代というのは今の常識がまるで通用せんような、想像もできないような時代だった。

わしはこの村の生まれで、れっきとした桃園村出身者には違いないが、赤ん坊の時に東京

へ連れて行かれたから、盆と暮れに両親といっしょに帰郷する時しか故郷の村を見ることもなかった。きみたちも知っているだろうが、昔は、貧しかった桃園村にだって、どこの家にもカラーテレビや電気冷蔵庫があったし、軽自動車ぐらい持っていてもぜいたくとは思わなかった。

それでいて、そういう機械を動かす電気やガソリンのもとになる石油なんかは、全部よその国から買っていた。食べ物でさえ、大部分は輸入に頼っていたもんだ。今考えれば、よくあんな不安定な生活を平気でしていたものだと思ってぞっとするが、そんな状態が五十年以上も続いたから、まるで地球が廻るのが当たり前なように、ごく当たり前なことだと思い込んだ。だから、完全に行き詰まって食料不足が深刻になり、餓死者が出る直前までは、本気で方針の転換をしようと思う人はいなかった」

それまで黙って聞いていた晴彦は、我慢しきれなくなっていった。

「東京時代がそんな世の中で、だから行き詰まって大刷新になったという話は、小学校でも教わって知っています。

でも、ぼくたちが知りたいのは、そういう一般論ではなくて、涸谷へ何万台も捨てなくてはならないほど自動車を作った、その本当の理由なんです」

「大量生産すれば、安くできるからさ」

「でも、安いともうからないでしょう」

「うんと作るから、数でかせぐのさ」

「それなら、少し作って高く売れば、同じじゃないですか。何も、捨てるほど作らなくてもいいのに」

「わしにもよくはわからんが、とにかく大量生産するために大きな工場を作るだろう。そうすれば、その工場をなるべく長い時間動かしておかないと利益が出ないから、できれば一日中動かしておこうとする。結局、うんと自動車ができてしまうんだ。

わしの子供の頃は、もうずいぶん落ち目だったが、ひと頃の日本は世界一の自動車生産国だったそうだ。大きな工場で大量生産して安くできたから、世界中に売れた。日本国民二人に一台のわりで自動車を持ってた時代もあるんだぞ。

そうなると、どんどん作り続けるためには、どんどん売らにゃならん。だから、次々に新型を作って、旧式のと買い換えさせた。だから、捨てるほどできたのさ」

「はあ」

と、答えたものの、どこかに飛躍があるようで、晴彦には納得できない。晴彦の両親もそうだったが、この年代の人は、どことなくおっとりしているというか、散漫なところがあって、話を聞いてもなかなか要点がわかりにくいのである。

「でも、そんなことしていたら、日本中が自動車だらけになって、いずれは行き詰まるに決まっているじゃありませんか。おまけに、米だって野菜だって、二倍の量作って単価を半分

にするのなら、骨折り損のくたびれもうけだということぐらい、桃園村の子供にでもわかるりくつだけどなあ」

「そのりくつが、子供にもわからなくなっていたのが、東京時代なのさ。わしぐらいの年だと、幸いなことにごく小さいうちに大刷新の時代に入ったけれど、もう少し年上の人、きみのお父さんぐらいの年配の人は大変だったんだよ。

小学校のうちから猛勉強させられて、学校が終わると塾へ行く。十ぐらいの子供が、寝るのは夜中の十二時、一時というのが普通だったそうだ。

だから、二十世紀の末頃は、十歳になればそろそろ体が中年になり始めた。二十歳になれば、見かけだけは青年でも、十人のうち六人までは、立派な成人病の患者で、高血圧だ肥満だ、糖尿病だ神経症だって、大変だったんだよ。

村の中を見てごらん。七十以上のじいさん、ばあさんがぴんぴんしてるのに、五十ぐらいの中年の方が一足お先という感じで、見るからによぼよぼになってるのは、そのなれの果てなのさ」

「その話は、聞いてます。ぼくが小学校の頃、両親が『昔は夜中まで勉強勉強で大変だったけれど、今の子は呑気でいい』って、しょっちゅういってました。実際、ぼくの両親だって、見かけはすらっとしていて恰好が良かったけれど、ひ弱で病気がちだったし、結局二人とも、六十前後で死んでしまいましたからね。

でも、子供のうちから夜中まで勉強するほど学問が盛んで、みんなが熱心に勉強したのなら、二倍作って半値で売れば損することぐらい、すぐに気のつく人が大勢いそうなものだがなあ」

晴彦が不思議そうにいうと、聞くとはなしに二人の問答を聞いていた、太田よりやや年上の男が、かなり慣れた手つきで縄を綯いながら教えてくれた。

「そういう学問が盛んになるようなら、大刷新などする必要はなかったんだよ。

子供が勉強するといったって、学問とか何とかいう立派なことじゃなくて、上の学校の試験に合格するための勉強だけだったものね。良い学校は、圧倒的な売手市場だから、受験生が殺到する。だから、効率よく振るい落とすためには、うんとむずかしい問題を出すほかないだろう。

だから、ひねりにひねった難問を出して、それができれば頭が良いということになる。私の頃なんて、英語ができるのが頭が良いということになっていて、小学校へ入る前から英語の塾に通わせる家が多かったけれど、英語の入試問題をイギリス人の学者に見せたら正解がわからない、なんて笑い話があったぐらいでね。学問とは名前ばかりで、実際は試験のための謎解きみたいになってしまっていた。

自分が落第生で、良い学校にも良い会社にも入れなかったから、ひがんでいるのかもしれないけれど、そんな問題のできる優等生ばかりが上の学校へ行き、官庁や大企業へ入ってこ

の国を支配したのだから、そりゃ、日本が落ち目になったのは当然さ。

古い諺でいえば『鹿を追う猟師、山を見ず』というのかな。今のホンの目先のことしかわからず、明日もうかることだけしか考えられない人ばっかりが、やたらとむずかしい試験で選び抜かれて、社会の上層に集まってしまった」

「もうけることに熱心な人が集まったから、自動車を半値で二倍作るようになったというのも、よくわからないなあ」

「大刷新以前の日本は、ものすごい競争社会だったんだよ。だから、ある会社が、半値で売り出せば、ほかの会社の製品は売れなくなってつぶれてしまう。競争相手がつぶれれば、自分の製品はその分だけよけいに売れる。そうすれば、もっと安くできるからまたたくさん作る。

そうやって、外国の製品とも競争して勝ったから、なおのこと生産量が増えて、とうとう世界一の自動車生産国になったけれど、もっと生産量を増やすためには、古いのを捨てなくてはならないでしょう」

「そこのとこが、飛躍していてよくわからないんですよ。だって、新品を作るのには、鉄やアルミがいるのだから、古いのを利用した方が得だと思うけど」

「その頃は、古いのを再生するよりは、新しい材料の方が安かったのでしょうな」

「はあ、なるほど」

といったものの、晴彦にはますますわからなくなった。村でできた稲藁でさえ捨てずに利用しないと生きられなくなりかけている世の中から考えると、まだ使える複雑な工業製品を、山の中まで運んで来て捨てなくてはならない社会が、どのようにして成り立っていたのか、感覚的に理解できないのである。

「東京時代の人は、本当に、先のことなど考えずに作っていたのでしょうかねえ。信じられません」

「だから、『鹿を追う猟師、山を見ず』だといったじゃないですか。目の前を走る鹿だけを見て夢中で追いかけているうちに、気がついたら崖っぷちに立っていて、進退窮まってしまい、結局、大刷新になったのさ」

「ちょっと、いいですか」

その時、聴講者の一人が、卵を運ぶための藁づとの作りかけを持って質問に来た。途中まで作ったところで、その先の作り方がわからなくなってしまったのだ。

「どうぞ」

晴彦は、そちらを向いた。

「なあ、三田村さん」

晴彦の手が空くのを待って、太田がまた声をかけた。仕事を習っているから、桃園学舎にいる時だけは、さんをつけて呼んでくれる。

「あの頃の本当のいきさつを知りたければ、もっと年上の人に聞かにゃだめだ。たとえばだな、鍛冶屋の本山のじい様なら、どういうふうに東京時代が終わって、大刷新の時代になったかをよく知ってござっしゃるだろう。さしずめ、歴史の生き証人といったところかな。

あの人は、村の古い鍛冶屋の息子だけれど、東京の大学の工学部へ進んで、かなりの会社で機械技師をしていたし、大刷新の頃にはもう四十代だったから、われわれと違っていわば渦中の人だった。

まだ、体も頭もわれわれよりしっかりしているぐらいだから、今のうちに聞いておいた方がいいぞ」

「実をいうと、さっき、隣の教室で話が弾んでいたのは、そのことなんですよ」

晴彦は、町田の太郎の質問に始まって、大刷新前後の話をくわしく知るために、長老の話を聞こうということになったいきさつを話した。

「そりゃ、面白い。あのじい様は、頭もいいし話好きだから、喜んで話してくれるだろうよ。日にちが決まったら、わしにも知らせてくれや。是非聞きたいものだ」

太田は、嬉しそうにいった。

「村中に回状を廻せば、百人ぐらいは集まるな。この部屋の仕切りは取っ外せるから、あっちの教室とこっちの作業場をつなげば、それぐらい楽に入れる」

「そうですか。孫の明夫にも話を通すように頼んでおいたけれど、明日は、ぼくも頼みに行くかな」

「若い者が何人かで頼みに行けば、大喜びで引き受けてくれるさ。特に、晴彦くんのナニのあの娘、織田のしおりちゃんが行けば、一も二もないよ。しおりちゃんの亡くなったじい様と、本山のじい様は仲が良かったし、まるで孫みたいに思っているんだから」

「そうですか」

うっかり何かいえば冷やかされそうなので、晴彦は簡単に返事した。

桃園村とユートピア

戸締りをして、晴彦が桃園学舎を出ると、十三夜の月が出ていた。歩き慣れた道だから、いくらかでも足元が見えれば提灯をつけずに行ける。蠟燭はかなりの貴重品で、できれば使わずにすませたいから、春の朧月夜というには少し肌寒すぎる道を足早に歩いて、しおりの家へ向かった。

村でも、昔は名主だった村長の家に次ぐぐらいの旧家であるしおりの家の母屋は、太い材木を組み合わせた重々しい造りだった。しかし、しおりは、その母屋から五メートルほど離れた場所に建っている古いが頑丈でこぢんまりした家に一人で住んでいた。昔の隠居所ということだった。

隠居とは古い時代にあった習慣で、相続人が一人前になった時に、当主が家督つまり家の支配権を譲ることをいう。裕福な家では、隠居してから新しい当主の行動に干渉しないように、別の家に住むことがあった。そのための家が隠居所である。

二、三年前に祖父母が八十代の高齢で相次いで亡くなり、今では両親との三人暮らしをし

ているしおりは、昼間は母屋にいるが、夜だけは空き家になった隠居所を寝室として使っていた。誰かが住んでいないと家がいたむせいもあるが、最近では、晴彦が週に二、三回ぐらい泊まりに来るからだ。

桃園村では、昔からいわゆる〈妻問い〉のような習慣があって、男が恋人の家へ泊まりに行くのはごく普通のことだった。明治維新以後は、青年を立派な兵士に仕立てることが国家の重要な目標になったため、表向きには「恥ずべき因習」ということにされてしまった。さらに、昭和敗戦後には、欧米の上っ面だけをまねる偽善的な風潮があって、伝統的な習慣はすべて悪いことになった。

ところが、大刷新以後は、藁の利用が復活したように、さまざまな古い習慣が少しずつ息を吹き返しかけていた。といっても、晴彦としおりが古い習慣を意識していたわけではない。晴彦も、叔父夫婦といっしょに暮らしているから、今のところは、結婚してどちらかの家に同居するより、好きな時に会っている方が自然で気楽だというだけの理由でこうしている。それが、結果として昔ながらの妻問いの形になっているだけだった。

だが、当人たちが意識しようがしまいが、自然にこういう間柄になれるのは、村に根強く残っていた風習のためで、村人たちに偏見のないせいであることはいうまでもない。

外国の風習を尊び、外国のまねに熱中していられたのは、それだけ余分のエネルギーを使って無理に恰好をつけるだけの余裕があったからにすぎなかった。外国の風習といって新しがっても、実際はよその国の伝統的な社会での合理的な行動をまねているだけだから、地元の産物だけで生活しなくてはならない社会になれば、縁もゆかりもないよその伝統をまねる不合理さが一斉に吹き出す。今では、自分たち本来の伝統的な方法の方が多くの面で合理的なことを認めざるを得なくなってしまったのだ。

隠居所に着くと、晴彦は入口の雨戸をこつこつと叩いた。すぐに中で足音がして、しおりのひそやかな声が聞こえた。

「どなた?」

「ぼくだよ」

内側から雨戸を半分ほど引いて、しおりが顔を出した。晴彦が中へ入ると、すぐに閉めてまた戸締りをする。しおりは湯上がりらしく、白っぽい浴衣の上に祖母の遺品である半纏を羽織って、石鹸の匂いをさせていた。髪は濡らさないように後頭部に結い上げたままなので、襟足の後れ毛がなまめかしく、いつもより大人らしい雰囲気だった。

しおりが戸締りをするのを待って、晴彦は、暖かい体を抱き寄せた。しおりも、両手を男の首に廻してやや爪立ちしながら、積極的に唇を寄せた。

抱き合ってしばらく口づけを交わしてから、二人は囲炉裏端に上がり、体を寄せ合って座り込んだ。まだ、夜になると肌寒いので、囲炉裏には火が燃えている。しおりは、薪を足しながら尋ねた。

「藁の講習は、どうだった?」
「近頃は、毎回少しずつ手がかからなくなるのがわかるよ。この分だと、あと二、三年もすれば、わざわざ桃園学舎で教えなくても、子供が親のやっているのを見覚えて、自然にできるようになるんじゃないかな」
「そうなれば、桃園学舎でまた新しい人気講座を考えなくちゃね」
しおりは、何かにつけて桃園学舎のことが気になるらしいのだ。
「そうそう」
晴彦が、何か思い出したようにいった。
「藁工芸の時、太田のおじさんに涸谷の古自動車のことを聞いたら、こちらが何もいわないうちに、本山のおじいさんに聞けばわかるだろうっていったよ。それに、もし、長老が大刷新時代のことをくわしく話してくれるのなら、ぜひ聞きたい人が大勢いるはずだから回状を廻してほしいってさ。
百人ぐらいは桃園学舎に集まるだろうともいってた」
「そう。やっぱり、みんな心の中では知りたいことが多いのね。じゃ、明日の晩はいっしょに行って、本山のおじい様に頼みましょうよ」
「しおりちゃんが行けば、一も二もなく引き受けてくれるだろうって、太田さんはいってたけれど……」

「そんなこともないでしょうけど、とにかくいっしょに行ってね」
「もちろん、行くさ」
晴彦が請け合うと、しおりはいった。
「お風呂が沸いてるわ」
「じゃ、入ろうかな」
「お風呂を出たら、お酒をちょっと飲まない。伯父が、晴彦ちゃんといっしょに飲めって、一甕届けてくれたのよ。あなたの藁工芸の講習でみんな大助かりだから、わたしもついでに感謝されて鼻が高いわ」
「しおりちゃんの伯父さんのお酒は、おいしいからな。もちろん、喜んでいただくよ」
「じゃ、支度しておくから」
晴彦は、そのまま風呂場へ行った。
大刷新後の桃園村では、昔ながらの〈結い〉の風習も結いという言葉も復活していた。〈結い〉は、辞典式に説明すれば「労力の交換」といったところだろうが、一時間の労働に対して一時間の労働で返すというようなはっきりした契約があるわけではなく、能力に応じたゆるやかな協力態勢である。
晴彦が藁工芸を教えるのも、報酬を貰うつもりはまったくない。気持の上では、囲炉裏端へ近所の人が見に来ているのと同じで、囲炉裏端でやっていることを大勢の人に開放しただ

けなのだ。

また、カタカナ英語の〈ボランティア〉と違って、自発的奉仕といった気持さえなく、村のつきあいの一部だと思った方がわかりやすい。しかも、美術大学で勉強できたのは、村全体の協力があったおかげだと思っているから、それに対する漠然とした〈結い〉の気分もあった。

しかし、手を取って教えてもらった方でも、同じように〈結い〉にしたい気持があるから、こうやって、直接間接にいろいろと貰いものをする場合も多かった。この場合は、酒作りの上手なしおりの伯父が、気をきかせてくれたのだが、だからといって、自分の身内が習いに来ているわけでもない。村の長老の一人として、一種の〈結い〉の気持で贈ってくれたのである。

それはともかく、自分で飲むための酒を作ることさえ禁止している酒税法という法律は、大刷新後も改正にならないまま生きているはずだったが、実際に取り締まるためには、大勢の係官が必要である。いうまでもなく、今の社会には、そんな余剰人員をかかえておくだけの余力はなくなっていたから、法律は有名無実となり、自家用の酒作りはごく普通になっていた。ビール麦とホップを育ててビールを自家醸造している家も何軒かあった。

それどころか、自分の食べ物は自分で作るのが常識になっている世代は、個人が酒を作ることを禁止する法律があることさえ知らない。しおりにしても、自分の伯父が上手に酒を作

るのを自慢することはあっても、それが法律に違反している悪いことだなどとは夢にも思ったことさえなかった。日本人ははじめてまともな政府、つまりこまごまと面倒をみてくれもしないかわりに、よけいなお節介もせず、国民生活の足を引っ張る能力もない政府をもったのだ。

この地方にも昔からの醸造家があって、今でも良い酒を作っているから、行事の時などにはプロの作った高級な酒を飲むこともあるが、日常的には、酒作りの上手な人に米と交換で作って貰ったのを飲んでいた。

風呂から上がって火の始末をすると、晴彦は、湯冷めしないように浴衣の上に綿入れを着て、囲炉裏端へ戻った。

「ああ、いい湯だった」

といいながら、いつも自分が座る客座にあぐらをかく。この土地の妻訪いの風習では、女性が主座に座ることになっているのだが、その方が自然なので、二人とも無意識のうちに古い習慣に従っていた。

「お酒、暖めてあるから」

しおりは、囲炉裏の灰の中に埋めてあった古い徳利を引出し、布で灰を拭ってから、並べておいてある二つのぐい呑になみなみと注いだ。自分もかなり飲める方なので、ぐっと一口飲んでからいった。

「お天気の良い日は一日中働いて疲れるけれど、寝る前のお酒がおいしいわね」
「うん」
晴彦は、ぐい呑を飲み干してから、小皿に入れた川魚の煮つけに箸をつけた。
「これ、春先に、お宅の叔母様にいただいたのよ」
しおりは、晴彦のぐい呑を満たした。村を流れる小物川では、最近ずいぶん魚の種類も数も増えた。晴彦自身は釣りをやらないが、叔父がいろいろ釣って来るので、そのことはよく知っていた。
大刷新以前は、休日になると、都会からの釣り客が自動車に乗って何百人も来たという信じられないような話が村には残っている。それでも、魚よりも釣る人の方が多いぐらいだったため、鮎の稚魚などを放流したそうだが、今では、何もしなくても魚がどんどん増えていた。
正確にいえば、何もしなかったのではない。二十年ほど前から、大刷新運動の一環として川筋を昔のままの姿に復元し続けた効果が現れたのと、生活排水が流れ込まなくなったせいだ。
川筋の復元は、昔の写真や地図を見ながら、不必要なコンクリートの護岸を破壊することから始まった。役に立っている護岸も少しはあったが、九十パーセントまではただコンクリートの使用量を増やすために塗り固めた有害な部分だったので、青年たちは、農作業のひまをみて先祖の愚行の痕跡を熱心に破壊した。釣り客のために作った道路も広い駐車場も、もとの雑木林にするために舗装をはがし砂利をふるい取って丁寧に耕し、近くの林から実生の苗やどんぐりなどを持ってきて植えた。

生活排水の方は、努力したのではなく、自然に流れなくなった。蛇口をひねればいくらでも水が流れる便利な水道は、エネルギー不足のためとうに使えなくなり、もとのように井戸から汲み上げている生活では、川へ流れ込むほど大量の水は使えない。また、便利な合成洗剤も、今では手に入らなくなっていた。
工業力による破壊と汚染がなくなれば、夏が高温多湿の日本では、自然の回復も早いから、一夏ごとに木は目に見えて大きく育ち、小物川の周囲がコンクリートの代わりに草木で覆われるようになるまでには十年もかからなかった。東京時代の日本では、人口が二倍、面積が二十五倍もあるアメリカ合衆国とほぼ同量のコンクリートを使って国土を塗り固めていたそうだ。それがはがされたことで、大地は再び息づき始めたのだった。
おかげで今では釣り好きの人に頼んでおけば、酒のサカナぐらいには不自由しない。晴彦たちの世代は、もの心ついてこのかた、川が年を追って豊かになる状況だけを見て育ってきたのだ。
晴彦は、叔母が丁寧に煮つけた小魚を食べながらいった。
「死んだおやじは、畑仕事がきつくてつらいとグチばかりいっていたけれど、それでも、晩

年には、東京時代の都会のサラリーマンに比べれば、今の生活の方が気楽かもしれないというようになっていたよ。

だって、東京時代の東京じゃ、毎日片道一時間半も満員電車に乗って会社へ行ったというのだから、往復三時間も電車の中に立っていたことになる。どんなに都会の生活が便利で素晴らしかったか知らないけれど、その話を聞くだけでうんざりするものなあ。

今の農業のやり方なら、いちばん忙しい時期だって一日に正味七時間ぐらいしか働かなくてすむし、一年を平均すれば、一日あたり三時間ぐらいしか働いてないだろう。だから、ただ電車の中で立っているだけだといっても、会社の往復だけで三時間もかかる生活より楽だと思う」

「わたしたちは、子供の頃から農作業に慣れているから、この年になって昔の勤め人みたいに、毎日、往復三時間も電車の中で立っている生活に入ったら、その方がよほどきつくてつらいって、グチをいうわね」

「絶対そうなるよ。それに、今は、雨の日は休むし、農閑期はたっぷり一ヵ月ぐらいひまだから、好きなことも十分できるけれど、東京時代の勤め人は、半月続けて休むのがやっとだったというんだから、かなりみじめな暮らしだ。

ぼくは便利な機械がありすぎて、神経症とかいう病気になったという東京時代の暮らしより、今の桃園村で、こうやって百姓をやっている方がずっといい。確かに、体はきついと思

うこともあるけれど、誰にも拘束されないし、失業の心配もないし競争もないし、けっこうおいしいものが食べられるし、何より気が楽だもの」

「両方を経験したことないから何ともいえないけれど、わたしは、今の生活でまあ満足しているわ。こうやって、晴彦ちゃんといっしょにいられて、食べたい時にはたっぷり食べられて、毎日お風呂に入れて、お酒まで飲めれば、いうことない。おまけに、村の図書館には、昔の本が読み切れないほどあるし」

「東京時代の日本人は、自分の欲深さに気づかないほど欲深くなって行き詰まったのだそうだけれど、ぼくは、もともと大して欲がないから、今のままでも充分以上だ。これ以上良い暮らしができるのは、ユートピアぐらいだと思ってるよ」

晴彦がそういうと、しおりは、ぐい呑を囲炉裏の縁において笑った。

「あら、いやだ。晴彦ちゃんまで、ユートピアが桃園村より良い所だと思ってるの？」

「だって、ユートピアって、理想社会のことなんだろう」

「ユートピアは、英語の普通名詞じゃなくて、トーマス・モアの書いた小説の主題になっている国の名前なのよ。英語にすれば、NOWHERE……つまり、どこにもない国という意味で、言葉自体には理想という意味はないんだって。

それに、わたしは、何度読んでも、あの国が、理想の社会だとはとても思えないんだけどなあ。

晴彦ちゃんは、『ユートピア』を読んだことない？」

「ない」

「たいていの人は読まないで、ユートピアが理想の社会だと思い込んでいるだけ。さっき話したみたいに、東京時代は、何でもかでもカタカナ英語を使うのが大流行したから、ものの名前の最後にユートピアの〈ピア〉をくっつけて、グリーンピアだのカードピアだのシートピア、何とかピア、かんとかピアだのと、何でもピアにしてしまうのがはやった時期もあったらしいわ。

ピアという音は可愛らしいし、何となくしゃれているから人気があったのだと思うけれど、〈何とかピア〉という名前を考えた偉い人は、肝心のユートピアという小説を読んだことがなかったのにきまってる。

長い小説じゃないから、ちょっと読めばわかるけれど、今の自由なわたしたちには、とても我慢できないほど不自由な国で、わたしには、とても理想郷だなんて思えない。

そりゃ、毎日田圃や畑で働かなくちゃならない桃園村だって、理想の社会からはほど遠いけれど、それでも、わたしは、ユートピアよりはずっとましだと思ってるわ」

「ユートピアって、そんなにひどい所なのかい？」

「ひどいかどうかはお好み次第だけれど、とにかく、大変な超管理社会よ。だから、こまごまと管理したりされたりするのが大好きな人にとっては理想なんでしょうね。でも、少なくとも、わたしは、桃園村からユートピアに引っ越したいとは思わない」

「具体的にいえば、どういう社会なのさ」

「まず、奴隷制度があるから、それだけで、うんざり」

「奴隷制度って、奴隷の階級があるのかい」

「さすがに、生まれつきの奴隷ではないけれど、今の感覚ではどこが悪いかわからないような違反をしても、罰としてみじめな奴隷の境遇に落とされてしまうのよ。

ユートピアは、日本の県より狭いぐらいの都市が五十四集まってできている国なんだけれど、隣の都市へ行く時には、あらかじめ市長に申請して、帰る日の指定入りの許可証を貰わなくてはいけないの。ただし、許可証があっても、一人で勝手には行けなくて、同じ方向へ行く人が集まって行くのね。

隣の県へ行くために、毎回この手続きが必要だというからあきれるじゃない。もし、許可証なしに出たところを逮捕されれば、一度目は厳罰。二度目は、何と奴隷にされてしまう。ただし、正式に行けば、旅費はタダなんですってさ」

「へえ」

晴彦は、あきれたような声を出した。

「ぼくなら、旅費ぐらい自分で払うから、好きなように行きたいね」

「でしょう。旅行に関していえば、江戸時代の日本だって、ユートピアより千倍も自由だっ

たわ。自分の家のお寺にわずかな手数料を払って、通行手形という簡単な書類を作って貰えば、日本中どこでもいつでも、好きなように歩き廻れたんだから」

「ほかに、ユートピアのどんなところが管理社会なのさ」

と、晴彦が尋ねた。しおりは、笑いながらいった。

「ユートピア人の普段着は、七年もつという丈夫な皮か毛皮の作業着で、それしか着ないのよ。外出する時は、染めないウールか麻の上着をボロ隠しに着るだけ。装身具はいっさいなし。金は、奴隷をつなぐ鎖にしか使わないというのだから、すごい国でしょ。

灰色の社会という感じね。大刷新以後の質素な桃園村の女性たちどころか、縄文時代の女性だって、こんなものを画一的に着せられたら、反乱を起こすしかないじゃないの」

「奴隷の鎖！」

こまかいことをあまり気にしない晴彦も、びっくりしていった。

「奴隷を鎖でつなぐというだけでも、理想社会っていう感じじゃないね。で、その殺風景な作業服や上着は、軍隊の制服みたいに強制的に着せられるわけ？」

「強制じゃなくて、みんな喜んで自発的に着ているんだって。でも、たとえそうだとしても、国中の人が揃って自発的……といえば、全体主義そのものだと思わない？」

「本当かうそか知らないけれど、東京時代には、日本をそういう全体主義国家にしたい人がかなりいて、そのグループを革新団体っていってたとかいう話を聞いたから、昔の人は全体

主義が好きだったんじゃないの。

全体主義のことはともかくとして、ユートピアの人って何を食べてたのかな」

「食事の献立まではわからないけれど、食事は無料で、三度三度ご馳走ばかり食べていたんだって。それはいいとして、すっごい全体主義国家だから、自分で好きなように食べられるわけじゃなくて、一グループ三十世帯単位の集団給食ですってさ。

時間になると、ラッパの合図で全員が自分たちのホールに集合して、大きな三つのテーブルに男女が向かい合って座り、礼儀正しくなごやかにいただけば、後片づけは、奴隷がやってくれます。それればかりか、食事の前には必ず、道徳に関する本の朗読を聞かせて下さるそうだから、有難くて涙が出そう。

これでも、ユートピアが素晴らしい理想社会だと思える？」

「ぼくなら、しおりちゃんと二人で、囲炉裏の煙にむせびながら、たくあんだけで麦飯のお茶漬けを食べる方が百倍もいい」

晴彦は、少しうんざりしたような声を出した。しおりは、笑った。

「ところが、ユートピアは素晴らしく道徳水準が高いから、わたしたちみたいにふしだらなことをしていたら大変。だって、結婚前に性的関係があったことがわかれば、罰として結婚が禁止されるんだから。

わたしたちなんて、もしユートピアへ行けば、これからよほど改心して道徳的な生活に入

り、偉い人の前にひれ伏してお許しをいただかなければ、一生引き離されてしまうわけ。でもね、大の大人同士が納得ずくでやっていることなら、誰がどうしようがまったくよけいなお世話だと思わない？

わたしたちみたいなふしだらな人間はともかくとして、普通のまじめな人が結婚する時はどうするかというと、まず、お見合いをします。ところが、その時は、社会的地位の高いおじさま、おばさまの立会いのもとで、お見合いをする男も女も真っ裸になり、お互いの体をすみずみまでよーく調べてから決めるんだって」

それを聞いて、晴彦は嬉しそうにもみ手をした。

「へえ。その、お見合いだけは、何度かやってみたい」

「晴彦ちゃんのバカ」

しおりは、ひと睨みしてからいった。

「わたしは、そんなお見合いなんてぜーったいにしたくありませんからね。晴彦ちゃんがユートピアのお見合いを何度もしたいのなら、わたし、ぜったいに結婚しない。

だから、ユートピアになんて住んでやらない」

「でも、知らなかったなあ。ユートピアって、そんな国なのか」

晴彦は、あきれたようにいった。

「それじゃ、桃園村の方がましじゃないか」

『ユートピア』の翻訳は、村の図書館にもちゃんと何種類か置いてあるから、今度、借りて読んでごらんなさいよ。のんびりしていい加減な桃園村とどちらが好きかは、当人の趣味で決めればいいけれど、どこがどう違うかはわかるから。

モアが『ユートピア』を書き始めたのは、一五一五年で、当時は王侯貴族が権勢を誇っていた時代だから、その裏返しみたいな社会を理想として小説に書いたんだって。だから、その時代の人にとっては、ユートピアでもそれなりに理想の社会制度だったのかもしれないけれど、相当な高度管理社会だったという東京時代の日本に比べても、あきれるほどの超管理社会だわ。

大刷新後の日本は、政府の組織が東京時代の何十分の一とか百何十分の一とかに減ったから、今のわたしたちは、自分たちで自分たちのことをちゃんとしていさえすれば、どこからも文句をいわれない。その自由な生活にすっかり慣れてしまったでしょう。だから、ユートピアなんかに引っ越したら、半日も我慢できないわよ、きっと」

「聞いただけでも、そんな感じがする。

桃園村の生活は、貧しくて不便だけど、その代わりに、食べ物さえちゃんと作っていれば、誰にも干渉されずに好きなように暮らせるからいい。

ユートピアみたいに、毎日、三度三度ただで最高のエサを支給してくれるのはいいとしても、その代償として、まるで動物園なみに、着るものから人間の交配の手続きまで管理され

るのなら、たまったものじゃないや。

ぼくだって、ユートピアより、桃園村の方がぜったいにいい」

「ユートピアも、食事や医療が無料とか、いいこともあるんだけれど、その代償に、個人の生活にまでこまごまとした道徳的管理をされるのじゃたまらない。所詮、人間の住んでいる所に、良いことずくめの理想社会なんてありはしないのよ。

わたしは、晴彦ちゃんとこうやっていられるのなら、あとのことは大抵がまんできるから、貧乏でも桃園村がいい」

「ぼくだって、そうさ。それに、ありもしない理想社会をよそのどこかに探すよりは、桃園村でごろごろしている方が気楽だもの。

今度、本山のおじいさんにくわしく聞けばわかるだろうけれど、大刷新以前の日本人は、どこかよそへ行けば理想社会があると勘違いしていたのじゃないだろうか。それで、自分の身近なものから逃げようとして、次から次へと現状否定みたいなことばかりやって、結局は行き詰まってしまった」

「子孫のわたしたちが、またこうやって一生懸命に伝統的な生活に戻らないと、生活が成り立たなくなっているのだから、そうだったのかも……ね」

二人は、しばらくの間黙って考えにふけっていたが、やがて、しおりが柱時計を見上げていった。

「もういい時間だわ。晴彦ちゃん。そろそろ寝ようよ」

晴彦は、笑いながらうなずいた。

「うん。ユートピアなら処罰されそうだけれどね」

しおりは、ぱっと赤くなった。

長老の考え

昼間は、農具を打つ槌音でにぎやかな奥の作業場は、もう静まり返っていた。

「明夫からも聞いたが、どうも、なかなかむずかしい注文だな」

晴彦としおり、それに孫の明夫を前にした本山吾一朗は、電球が一個だけ灯った土間の腰掛けに座って腕組みをしながらいった。年齢は立派な老人だが、とても九十歳近い高齢とは思えない鋭い表情で、小柄だが筋肉質の体もがっしりしている。

若い頃はなかなかの美男子だったと老人たちはいっているが、今でも充分に美男子である。亡くなった父など、六十前の時にもっと老人じみていたものだと、晴彦は思った。

本山老人は、またしばらく考えてから口をひらいた。

「最近では、明治維新や昭和の敗戦に並べて大刷新ということが多いけれど、その中で生きてきた私には、大刷新が、明治維新や昭和敗戦と同列の社会現象だとはとても思えないのだよ。

明治維新や昭和の敗戦には、はっきりした人工的な節目があった。

大政奉還という事件が、徳川体制の終わりで、明治体制の始まりだったことは、ほぼ異論がないだろう。その時の中央政府だった徳川幕府が消えてなくなり、天皇政府、といっても実質的には薩長の下級武士たちの作った新政府が始まった。政府の形もはっきり変わったんだ。

また、ポツダム宣言を受諾して無条件降伏した時が、実質的には明治体制の終わりで、東京時代の始まりだったことも事実だ。アメリカ軍が日本を占領して、軍閥政府は消え失せた。これは、本当に目ざましい変化だったと、父から聞いている。

だから、明治維新や昭和の敗戦には、劇的な中心部分があって、その前後で、あることがどう変化し、どう変化しなかったかを聞けば、時代の移り変わりがよくわかる。歴史の本も、そういう書き方をしてあるのが普通だ。

ところがだな、大刷新には、そんな中心などない。

革命運動の結果でもなければ、政府の政策によって起きた変化でもない。もちろん、きみたちも知っているように、戦争に負けたからでもない。ほとんど誰も望んでいなかった方向へ、少なく見ても十年以上かけて、社会の全面がのっぴきならない形で変化していったのだ。

破局といえばとてつもない破局だったが、大刷新というだけあって新しい秩序の建設でもあった。ところが、その大刷新という呼び方でさえ、かなりあとになって誰ともなしにそう

いい始めただけで、当時は特別な名前もなかったし、その中で暮らしていたわれわれとしては、刷新という明るいイメージより、後退して行くというマイナスの印象の方が強かった。

東京時代という呼び方だって、かなり後になってそういい始めたので、あの頃のわれわれが『ああ、自分は今、東京時代のただ中に暮らしているのだ』だなんて思ったことは、ただの一度だってなかった。そのことは、世界的な大都市として繁栄していた時代の東京に二十年以上住んでいたこの私が、はっきりと証言するよ。

江戸時代だって、われわれが今になって勝手にそう呼んでいるだけのことで、先祖たちが、『自分は江戸時代に生きているのだ』などと思ったはずはないだろう。

実際、その中で生きたわれわれには、はっきりわかっていることだが、大政奉還やポツダム宣言受諾のように、後世の人にとって理解しやすい事件がある日起きたのではない。ただ、なし崩しにずるずると変わっていっただけで、何年かたって振り返った時に、はじめて中央政府がほとんど消え失せていることに気づいて、ああ、日本もずいぶん変わったなあ、と思うような性質の変化だった。

大刷新は、そういうゆるやかな変化だったから、子供にとっては、変化にさらされているという意識さえなかったはずだ。当時、二十五歳から三十歳ぐらいになっていないと、何が起きているのかさえ理解できなかったのではないかな。

昭和敗戦のようにはっきりした変化のあった場合でさえ、変化の状況が、自分の直接の体

験である程度理解できたのは、少なくとも十歳以上の人だったというから、当時まだ幼児だった今の六十歳以下の連中に大刷新当時のことを尋ねたところで、納得のいく返事をしてくれなくて当然さ。

私は、もう四十を過ぎていたから、いわば大刷新の当事者といっていい年齢だった。それにもかかわらず、今になってもまだ何がどうなったのかはっきりわからない点が多いぐらい全面的にずるずると、なし崩しの崩壊だか変化だかが続いたのだからね」

「その、ずるずる変わっていった様子を、桃園学舎で話していただけないでしょうか」

と、しおりがいった。

「しおり君が、元の公民館を借りて学校を始めたと聞いて、私は喜んでいるよ。きみは高校教員の免許もあるのだから、それを生かすのは立派なことだ」

本山老人は、しおりの顔を見て目を細めた。

「そんな……桃園学舎は学校じゃないんです」

しおりは、顔を赤らめていった。白雪姫というあだ名があるほど色が白いので、ちょっと上気するとすぐに顔色に出てしまうのだ。

「今は、いろいろなことを知る機会が少ないから、みんなで集まって知識の交換みたいなことをしているだけです」

「晴彦君も、桃園学舎で藁細工を教えてくれているそうだが、おかげで、最近では若い連中

が上手に日用品を作るようになった。私の子供の頃には、もう藁の仕事はすたれかけていたから、村の様子は、昭和の初年より以前に戻ったようだ。

そうやって、みんなが村のために努力してくれているのだから、私も協力したいのはやまやまだが、右から左へと安請け合いするわけにもいかんのだ」

「なぜでしょう。本山さんの経験なさったことを、そのまま話して下さればいいと思うのですけれど」

と、晴彦がいった。

「そう簡単ではない」

老人は、首を横に振った。

「今いったように、大刷新は、最初のうちは刷新でも何でもなくて、きわめてゆっくり進行したから、みんなは、ただの経済的な景気の波の一つぐらいに思っていた。ところが、実際はそんななまやさしいことではなかったのだ。

もう、もとのような世の中に戻れないことをみんなが納得してあきらめるまでにも、五年以上、十年近くはかかったと思う。変化の意味をみんなが本当に理解して、逆らわず積極的に受け入れようとする、いわゆる大刷新時代になったのは、その後のことなのだ。

しかも、そういういろいろなことが、順を追って起きたのではなくて、あらゆることが同時進行でじわじわ変化していったのだから、今になっても、どれが原因でどれが結果という

ことさえ、はっきりわからないほど入り組んでいる。

私が、中央官庁の要職にでもついていたら、いくらか社会全体を見ることができたかもしれないが、何しろ、こちらは中ぐらいの会社の技術者だから、あの大きな社会変動のほんの一部しか見ることはできなかった。

今と違って、新聞は毎日来たし、ケーブルテレビというのがあって、いつでも何十ものテレビ番組を放映していたし、パソコンつまり自分専用のコンピューターを電話回線につなげば、世界中から情報を集めることもできたから、断片的なことはよくわかった。ところが、この当時、新聞やテレビ番組を作っていた人は、はじめから頭の中に結論を持っていて、それに合った社会現象だけを報道するという実に奇妙な性癖があったから、本当は何が起きていたのかよくわからないのだ。

新聞を読んでもテレビを見ても、賢いのは自分だけというような偉い人ばかりがしゃしゃり出て来て、しかも、ある人が右を向けといえば、別の人は左を向けというような具合だったから、本質的には、われわれなみの野次馬がわいわい騒いでいるのと同じだった。要するに、報道はほとんど何の役にも立たなかったように覚えているよ。

特に、外国との関連になると、なお始末が悪かった。

広い世界と小さな日本の関係なのに、〈外国対日本〉という対等に近い感覚でひっくくってしまうし、それぞれ、自分のひいき筋の外国があって、そちらのおやりになったことはすべて正しいという報道の仕方をする。だから、もともと外国の事情にくわしくないわれわれ一般人には、今になっても当時の対外関係がはっきり見えない。

大学時代の友人が、かなり広い範囲に就職していたから、それぞれの立場からの見聞もいくらかは知ることができたが、社会全体が土台から大きく変わっていくのを前にしては、いうなれば『葦の髄から天井のぞく』ようなものさ。

こんなわけで、自分でさえ、いったい何がどのように起きたのか全体像はなかなかわからないし、四十年も前のことだから、記憶も怪しくなっている」

「はあ、そうですかぁ」

しおりは、がっかりしたような声を出して視線を土間に落とした。

「いやいや」

その様子を見た本山は、ちょっと慌てたように、手を上げて左右に振った。

「話をしないといっているんじゃない。ぜひ話しておきたいとは思っている。できれば、文章としてしおり君に書き残しておいてほしいぐらいだ。

しかし、藪から棒に頼まれても、どこから話していいかわからないし、前後関係さえ忘れてしまっていることが多いのだ。少し、時間を貰って、古い本を調べたり昔の日記を見たりしてから、簡単なノートぐらい作らないと、筋の通った話などできそうにない」

「もちろん、明日からすぐにというわけではありません。充分に準備していただければ、そ

れに越したことはないのですけれど、お忙しいのにあまり負担をおかけしても悪いと思いますし」

「なに、仕事は、若い者がちゃんとやってくれるから、私は見ているだけで、もう大してることもない。たまには、こんなことにでも頭を使った方がボケなくていいだろうと思っている。

ただし……だ」

老人は、皮肉な笑いを浮かべた。

「年寄りの昔話は、自分のやったことだけを美化して、自分だけが正しい道を歩んだようなお話を作り上げてしまうから、老人のいうことは眉に唾をつけて聞いた方がいいぞ。

わしの話だって、自分につごうの悪いことは全部忘れているか、最初から気づいていなかったかもしれないから、自分は絶対に悪者にならない。良いことは全部自分がやって、悪いことは全部他人のせいだというかもしれないが、そのへんは、聞く方で適当に判断してくれ」

歯切れの良い話しぶりは、爽快なほどだった。

「そうそう」

それまで黙っていた本山明夫が、急に思いついたようにいった。

「しおりさん。ゆうべのあの東京時代の古文を持って来た?」

「ええ。確か、出る時に入れたつもりだけれど……」

しおりはそういいながら、藁で編んだ手提げの中をかきまわしていたが、すぐに一枚の紙を取り出した。

「ゆうべ、桃園学舎でこういう古い文章を読みました。でも、誰にも意味がわからなくて、そのことが、今度の話のきっかけになったのですけれど、おじい様は、この意味がおわかりでしょうか」

「大学の国文学科を出たしおりにわからない古文が、鍛冶屋の私にわかるとは思えないが、ちょっと見せてごらん」

本山老人は、笑いながらしおりが渡した紙を受け取り、声を出して読んだ。

「何なに……マルチメディア時代のエンターテインメントVRのクリエーターとしては、手段としてのデジタルを使いこなせるアーチストであることが、ビジネスとして成立するための必須条件である。そのためには、アナログの写実的なビジュアル表現では不可能なイマジネーションの世界を……

なるほど、これは、かなり古い時代の文だ。しかし、これでは国文科出身にはわからんだろう。今なら、さしずめ科学技術史の分野だろうからな」

「昔の新聞に出ていたのですが、当時の技術を説明した文章だと思います。これ、いったいどういう意味でしょうか」

と、しおりが尋ねた。

「電気を使った道具といえば、電灯とラジオとモーターぐらいしか知らないきみたちに、この時代のハイテク用語を説明するのはちょっと厄介だな」

老人は、苦笑しながらいった。

「すると、おじい様は、この意味がおわかりですか」

「もちろん、これぐらい完全にわかるさ。

私は機械屋だから、こういう業務はしなかったが、東京時代の技術者は、コンピューターを日常的に使わないと仕事にならなかった。私の場合でも、機械の設計は、一種のコンピューターグラフィックスだったからね。マルチメディアも、デジタル化によって成り立ったのだし、これぐらいは、日常会話のうちだったよ」

何の気負いもなしにあっさりという長老の顔を、若者たちは驚いたように見詰めた。

「やっぱり、うちのおじいさんならわかるだろうと思ったんだ」

明夫は、しおりと晴彦の顔を見ながら、ちょっと得意そうにいった。しおりが、かさねて尋ねた。

「これは、普通の新聞に出ていた文章ですけれど、東京時代なら、一般の読者でもこんなむずかしい文章の意味がわかったのでしょうか」

老人は、うなずいた。

「あの頃は、何でもかでもこういうカタカナ語で表現したものさ。科学評論家をしていた友人が、途中からサイエンス・ライターとかテクニカル・ライター、サイエンス・ジャーナリストと書かれるようになったといって笑っていたことがある。書く方だって、科学評論家とサイエンス・ライターとテクニカル・ライターとサイエンス・ジャーナリストがどう違うかなんて、はっきりわかっちゃいなかったと思うよ。

だから、当時の人でも、それぞれの専門的な知識がないとわかりにくいことは多かった。たとえば、われわれには、新聞に出ている女性の外国ファッションのことなど、いくら読んでもさっぱりわからなかったものさ。

だから、これもコンピューターやエレクトロニクスにまるで関心のない人にはわからなかっただろうが、技術に関心がある人なら、誰にでもわかったはずだ」

「おじいさんは、今はぼくらと同じ世界に住んでいるけれど、長い間、ぜんぜん違う世界に住んでたことがあるんだね」

明夫が、溜息まじりにいった。

「そうだ。東京時代は、ほとんど江戸時代のようになってしまった今とは、まるで違う世界だった」

本山は、孫の方を見てうなずいてから、言葉を続けた。

「だが、私の親、明夫のひい祖父さんぐらいの年の人は、私なんぞとは比較にならんほどの

大きな変化を、一生のうちに経験している。

特に、わが桃園村みたいな純粋な農村で生まれた人は、江戸時代と大差ない環境に生まれ育ったのに、十代で戦争が始まり、二十歳ぐらいで兵隊になって外国へ戦争に行かされた。この村でも、きみたちより若い青年が、私の父を含めて百人以上も戦争に行った。父は無事に帰って来たが、二十三人も戦死したのだよ。

それも、兵隊たちはかなりみじめな死に方をさせられたらしい。下級兵士の間には『将校商売、下士官道楽、兵隊ばかりが国のため』という言葉があったそうだ。誰も口には出さなかったが、当時の日本の職業軍人たちの質の悪さは国民の常識みたいなものだった。無理な作戦を強要して兵隊を消耗品のように扱い、何万人をむだに死なせても責任らしい責任を取る必要はなかったのだ。

そのくせ、自分では、日本の軍隊は世界一だなどといっていたのだから、あんな軍隊は消えてなくなっても当然だった。まあ、東京時代末期の高級官僚たちも同じようなものだったがね。

こちらから攻めて行ったばかりじゃなく、外国からも、大きな飛行機に乗って爆弾を落としに来た若者たちがいて、日本の都会という都会を焼き払ってしまった。ついに、最後には原子爆弾というのを落とされて、日本は無条件降伏をした。

昭和の敗戦後は、それまで、お国のために命がけで戦ったのも全部間違っていたことにな

り、今度は、お国のために米を作れといわれて、夢中で米を作った。うちは、鍛冶屋だから、父は戦争から帰って来ると、百姓のかたわら乏しい鉄をやりくりして、村の人のために農具をせっせと打った。

ところが、しばらくすると、今度は工業立国とかいい出して、田畑を耕すより工場で働くのが国のためだということになった。農地をつぶして工場にして、そこで作った工業製品を輸出すれば、その農地でできる作物の値段の百倍もの金がもうかるはずだから、その金で食料を輸入した方が得だというりくつだ。

いや、そうはっきりいってくれればわかりやすいのだが、昭和敗戦後の秀才官僚たちもかつての軍人と同じで、自分たちが世界一優秀な官僚だと自負していたそうだから、けっしてそんなことを口にしない。農業振興とかいう立派な名目を立てて、遠廻しに農業を安楽死させようとしたのだ。

われわれ百姓は単純だから、次から次へと打ち出す新しい農業政策の前におろおろしながらお上のいわれるままにしていると、いつの間にか農業では生活が成り立たなくなって、都会の工場に働きに出なくてはならなくなった。

私が、東京の大学へ行って会社勤めをしたのも、そういう農業つぶしの政策の結果として農村では生活できなくなったからだ。都会から遠く離れたこの村は、私と同じように離村する人ばかりで、大刷新の前には人口がたったの八十三人にまで減ってしまった。もちろん、

田畑は荒れ放題に荒れた。小学生が全部で二人しかいないから、分教場も閉鎖になって、子供は片道一時間もかけて通学するようになった。

つまり、もう一歩で廃村になりかねない状態にまで落ち込んでしまったのさ。

農具専門の鍛冶屋だった父は、年は取るし、弟子が来ないどころか、息子まで都会へ出て行ってしまうし、仕事もほとんどなくなった。仕方がないから、母と二人で食べるだけの田畑を耕しながら、私からのわずかな仕送りで細々と暮らしていた。でも、想像もしなかったテレビや電話が、田舎の生活の中に入り込んできたのにはびっくりもしていたし、喜んでいたものだよ。

江戸時代並みの生活から外国での戦争、それに東京時代の生活まで三つの世界を経験したおやじの世代に比べれば、私の経験した変化なんぞ穏やかなものさ」

「……」

一流の学歴の上にあぐらをかいて人民の上に君臨していた軍人や官僚のおもわくに、一生の間振り回され続けた、曾祖父母や祖父母の世代の人々の苦労を、若者たちは黙って聞いた。

「政治は、本当に恐ろしい」

老人は、しみじみといった。

「日本のように小さな国は、世界の桧舞台に立つなどという大それたことを考えず、ひっそりと生きるべきなのだ。それなのに、誰か偉い人が、西洋に負けない軍事大国になろうなどと思いつけば、桃園村の青年までが縁もゆかりもない遠い外国へ連れて行かれて、恨みもつらみもない外国の青年と殺し合いをさせられる。

そういう意味では、大刷新は、本当に日本の歴史始まって以来の大刷新だったのかもしれない。名目は封建制度だろうが軍国主義だろうが民主主義だろうが、とにかく、政府に強大な権力を与えて、すべて政府のいいなりになっていた鬱陶しい時代が、たとえいやいやながらでも終わらざるを得なかったのだからなあ。

しかも、上に立つ偉い人などいなくても、われわれ日本人は立派にやって行けることがわかったのは、大きな収穫だよ。いや、江戸時代までの日本の百姓も、形の上では領主に従属していても、年貢を納める以外ではしっかりした自治をしていたから、実際は先祖返りしただけかもしれない」

今では、村の外のことについてほとんど考える必要も習慣もなくなっている晴彦たちの世代の若者は、こういう大きな問題について考えようとしたことさえなく、相槌の打ちようもなかった。

「だが、こうやって話していると、昔のことを少しずつ思い出す」

長老は、遠くを見るような目つきになっていった。

「それでは、一つ、きみたちのご要望に応えて、あの頃のことを時間を追って書き出してみ

るとするか。そうすれば、ここ四、五十年の間に日本に起きたことを、どう話せばわかって貰えるか、私なりの筋書きができるかもしれない」

「有難うございます」

しおりが、立って頭を下げた。

「いや、礼などいってくれる必要はないよ。きみたちのためじゃなくて、自分のためにやっておきたいからね。

そのうちに何とかまとまりそうになったら、明夫にそういうから、その時には改めて相談しようじゃないか」

「それでは、よろしくお願い致します」

晴彦も立ち上がって、最敬礼をした。

先祖返り

晴彦は、等間隔に三列の種播きができる機械を押しながら水田の中をゆっくり歩いていた。この地域で田植えをしなくなってからもう二十年にもなるので、晴彦は、田植えをしていた時代をほとんど覚えていない。

水田に籾を直接播く農法と不耕起栽培の技術が目ざましく発達したため、かつての十分の一の労力もかけずに田植えまでの作業がすんでしまう。石油エンジンのついた農業機械を使わなくても、わずかな労力で楽に農作業ができるのだ。しかも、単位面積当たりの米の収量はエンジンつきの機械を使っていた時代よりかなり多くなっているので、今ではこの方法が稲作の主流になっていた。

晴彦は、今のようになってしまってからのことしか知らないが、大刷新以前は、すでに普及してしまった高価な農業機械に合った農法しかできないので、便利な機械がかえって進歩を遅らせていた面もあるということだった。

「晴彦ちゃーん」

どこかで、しおりの声が聞こえた。晴彦は、機械を押すのをやめて振り向いた。しおりは、三十メートルほど離れたあぜ道で手を振っていた。薄曇りの五月の空につばめが飛び交っている。

「ちょっと話があるんだけどお」

大きな麦わら帽をかぶったしおりは、両手を口の横に当てて大声でいった。

「じゃ、もう一回りしてそっちへ行くから、待ってて」

晴彦は、田の端まで行ってからまた機械を押して、しおりの待っているあぜ道まで戻った。彼女の家ではもう水田の仕事は片づいていて、差し当たりは水に入る仕事がないから、足首までかくす紺のロングスカート姿だった。裾だけを外して洗えるようになっているこのスカートが最近流行の女性用作業着だが、今の農法ではほとんどの作業が立ったままできるようになっていて、腰をかがめる必要がないため、水田に入る時以外はこのスタイルが楽なのである。

「ずいぶんはかどったわね」

しおりは、晴れやかな顔で水田を見廻しながらいった。今日は眼鏡をかけていないが、もともとあまり強い近眼ではないので、農作業中は普通かけないようにしている。顔の汗を拭きにくいばかりか、眼鏡が濡れればかえって見えにくくなるからだ。

「話って何さ」

晴彦は、首に巻いてあった手拭いで汗を拭きながら尋ねた。爽やかな季節でまだ暑くはないのだが、強い陽射しの下で作業をしていると、すぐに汗をかく。

「ゆうべ、本山のおじい様がうちの父の所へ話しに来られて、大刷新前後のことを桃園学舎で話す準備がかなり進んだから、そろそろ具体的な日取りを決めておいてほしいとおっしゃるのよ」

「でも、それは、こちらで決めることじゃなくて、長老に決めてもらうべきだろう。こちらでお願いしているんだから」

「もちろんそうだけれど、あちらとしても、いつでもいいといわれるとかえってやりにくいらしいわ。

鍛冶屋の仕事でも、お客と相談の上で何月何日に渡すと約束すれば、できるだけその日までに仕上げる。でも、いつでもいいからできた時に知らせてくれ、といわれたのでは、どうしても他の仕事を優先してしまう。

だから、一応の予定を決めてもらえば、できるだけその日に合わせて準備するとおっしゃるのよ」

「そりゃそうかもしれないな」

晴彦は、うなずいた。

「ぼくでも、藁細工の仕事を頼まれる時に、いつでもいいよ、なんていわれると、かえって

やる気がなくなるもの。

無理かもしれないけれど、あさってまでに何とかならないかなあ、とかいって頼まれれば、本当に無理でもやってしまう。しかも、そういう時に、かえって良い仕事ができたりしてね」

しおりは、ちょっと考え込みながらうなずいた。

「それじゃ、六月のはじめからということに決めようかな。今は一応は農繁期ということになっているけれど、最近では農繁期という言葉だけが残っていて、実際は大して忙しくもないから、反対する人もあまりいないと思うわ」

しおりは、晴彦と水面を半々に見るようにしながら、いつもながらのどことなくのんびりした口ぶりでいった。

「反対する人なんていないだろう。ぼくは、もう二十人ぐらいの人に、本山のじいさまの話はいつから始まるんだ、って聞かれたよ。みんな、楽しみにしているんだ。文句をいう連中は、はじめから来やしないよ」

「じゃ、あさって集まりの時に、桃園学舎でみんなの意見を聞いてみるわ」

しおりは、そういってから、晴彦が籾を播き終えたあとを改めて見廻した。

「今年は、お天気が順調だといいわね。去年はちょっと水温が低めで収量が落ちたから、今年は梅雨明けからカーッと照ってほしいな」

「うん。最悪でも十俵は取りたいよ」

晴彦が機械のハンドルによりかかるようにしていうと、しおりは笑った。

「最悪で十俵っていうのは、ちょっと欲張りすぎじゃない」

「だって、坂下の敏郎さんなんて、不作の去年でさえ十一俵取ったっていうからね」

「あの人は特別よ。何か思いつくと、夜中でも田圃へ出るんだから。あんなこと、普通の人にはできないわ」

坂下に住んでいる敏郎は、村内きっての篤農家で、七十五歳の今日まで、米の収量を少しでも増やすために人生のすべてを賭けてきた人だった。しかも、困った時には気さくに相談に乗ってくれるので、村で世話になっていない農家は一軒もないほどなのだ。

「じゃ、わたしは、まだ午前中の作業が残ってるから帰るけれど、お昼はどうする？　晴彦ちゃんの方が忙しそうだから、こっちへ食べに来ようか」

「今日は、ぼくの方から行くよ」

「そう。じゃ、またあとでね」

しおりは、そういって帰って行った。晴彦は、またゆっくりと機械を押し始めた。

大刷新以後の農業は、江戸時代のように、生産量の半分近くを政府に召し上げられるわけでもないし、東京時代のように商品生産のために働いているのでもない。基本的には自家消費分を作るのが目的だから、文字通りの意味で楽に食っていければいいので、そういう意味

では本当に気楽な仕事である。

しかも、科学技術や産業の多くの分野が潰滅的な状況なのに、動力を使わずにできる農業技術と、そのための品種改良だけは目ざましく進歩しているから、晴彦のような二十代の青年でも変化を感じ取れるほどの早さで、農作業が楽になっていく。

最近の桃園村での米の平年作は、反収つまり田の面積一反歩（約十アール＝千平方メートル）当たりの収量にして、玄米十一俵を上廻るほどだ。一俵は六十キログラムだから、七百キログラムも取れる。東京時代末期でも、この村では、平均して八俵か九俵ぐらい取れるようになっていたが、今では、当時の何十分の一のエネルギー消費と、半分ぐらいの手間でさらに多くの米が取れるのだ。

晴彦は、かつて村長の家で村の古文書を見せてもらったことがあるが、江戸時代の初期では、反収が一石しかなかったと知って驚いた。一石は体積の単位で一升の百倍。千八百リットルだが、米の重さとしては約百五十キログラムで、わずか二俵半にすぎない。

幕末期でもせいぜいこれより二十パーセントか三十パーセントぐらい収量が増えただけだったが、今では同じ面積で四倍以上、豊作なら五倍以上もの米が取れるのだ。

工場で機械などを作るのなら、新型の製造装置を入れたり作業工程を改善したりすれば、短期間に製造能力を二倍ぐらいに増やせないことはない。しかし、農業では、相手が生物なのだから、たとえ膨大な石油エネルギーを注ぎ込んだところで、相手が思うように育ってくれるとは限らない。収量を四倍にするためには、品種改良を始めとする数百年間に及ぶたゆまぬ努力が必要だったのだ。

参考までに書いておくと、一反歩で一石取るのが無理な北国の寒冷地などでは、昔は一石取れる面積を一反としていた場合もあるそうだ。また、米の値段は、今の証券などと同じように需給をにらみ合わせて取引所で決めるシステムだったため、不作なら米相場が高騰し、豊作なら下落したが、中心になる価格は、米一石が金一両だった。

一石の米は、当時の平均的な日本人が一年間に食べる量でもあったので、一人分の食料に相当する一石が面積一反歩の田で取れて、値段が一両という非常にわかりやすい関係に決めてあったのだ。

江戸時代の日本の人口は、人口統計の始まった十八世紀前半から幕末期まで、ずっと三千万人で安定していたが、その八十パーセントまでが農業人口だった。農業といっても、この中には林業や漁業に従事している人も含んでいるが、昔は今のようにはっきり分業せずに、漁民でも農業をやるのが普通だったから、二千四、五百万人ぐらいは、多かれ少なかれ植物栽培をしていた。

農民だけではなく、人口の五パーセントほどだった支配階級に属する武士たちにも、田畑を耕している人が大勢いた。江戸に暮らす徳川家の家臣、直参の武士たちでさえ、大部分を占める下級武士たちは、自宅の庭で野菜を作って乏しい収入を補っていた。もっとも地位の

低い幕臣でも、七十坪（約二百三十平方メートル）ばかりの土地に住んでいたので、上手に使えば、四、五人家族の食べる野菜ぐらいは作れたのだ。

直参でさえこんな状態だったから、地方の大名に仕える武士ともなれば、貨幣経済の発達した城下町ではとても生活が成り立たず、農村にある自分の給地に住んで田畑を耕し、見かけ上は農民とほとんど同じ生活をしている人さえ大勢いた。

一反歩で一石しか取れなかった時代は、これほどまでにしないと、三千万人が文字通りの意味で食べていくことができなかったのである。

国民の大部分が農民になっているという点では江戸時代に似ているが、二十一世紀の現代が決定的に違っているのは、単位面積当たりの収穫量の違いだった。今では、十アールつまり一反歩で七百キログラム、五石近く取れるのが平年作だから、四人家族なら、わずか三十三メートル四方の水田を作るだけで一年分の食料になる米ができて、一人分の備蓄までできる。食生活が多様化している現代人は、米を一年に一石も食べないからだ。

東京時代のように、便利な電気器具はないものの、江戸時代の半分も働かずに、六千五百万の人口がのんびり暮らしていられる世の中になったのも当然だった。

もちろん、米を作るだけでは生活できないが、一反歩しか耕地のない家は少なくとも桃園村にはない。晴彦の家は、宅地も含めた土地が二ヘクタールつまり二百アールあるし、しおりの家は三ヘクタール近くある。

いずれも、面積の半分は雑木林にしてあって、落ち葉は堆肥の材料にし、次々に成長する木を燃料にする。晴彦の家では、麦のほかに各種の野菜、いも、豆類を作っているばかりか、梅、柿、ゆずなどの果樹も植えてあるが、要するに自分たちが食べたいもので、作れるものは何でも作る徹底した複作農業なのだ。ほかに、にわとりを五十羽ほど飼っているから、卵にも鶏肉にも不自由しないし、良質の肥料も取れる。

外国の方法がすべて正しいことになっていた時代、気候も風土も無視して同じ作物ばかりを大量に作る単作農業を推し進めたことがある。効率良く経済を発展させることをすべてに優先できた時代は、それですんだのだが、日本の国土で取れる作物だけで六千五百万人の全国民が生きていくための農業としては、決定的な欠陥があった。単作農業と複作農業の総収穫量を比べると、単作の方がはるかに少ないのだ。

農業の複作化も一種の先祖返りだが、大刷新以後は、また昔ながらのこういうやり方に戻ってしまった。

町田の太郎のような最小規模の農家でも、二反歩の農地を完全にまかされているから、一人暮らしの食料が充分に自給できるばかりでなく、去年は不作だったのに、すでに少しは備蓄もしている。薪は充分ではないが、力持ちの太郎は、広い雑木林のある家で薪割りや炭焼きを手伝っては、少しずつ分けてもらうから、燃料にも不自由はしない。

つまり、今の桃園村は、たとえ外部から孤立してしまっても、当分の間は少しも困ること

なく、今のままの生活を続けられるようになっていた。

これは、桃園村に限ったことではない。周辺の村は、土地の状態や伝統による特産品の種類に違いがあるだけで、どこでも似たようなものである。いや、大刷新以後は、日本の国全体がほとんど同じような状況になってしまった。農業人口が圧倒的多数になって、自給自足の社会になったという意味では、これも先祖返りである。

まだ昼には少し間のある十一時半前に、晴彦は籾を播きおえてしまった。

叔父夫婦との三人暮らしだから、稲作は十アールだけでも自分たちの食料には充分なのだが、半分しか取れない凶作でも飢えないようにもう十アール。それに、少なくとも二年分の備蓄を減らさないためにもう十アール。さらに、物々交換用の米を作るためにもう十アール作る。大刷新以後も、国民のすべてが米を自給できるわけではないため、米には補助通貨としての重要な機能もあるからだ。

合計で四十アールの水田を作っているが、昨日の午後から始めてもう全部に播いてしまった。あとは、成育状態に合わせて肥料をやる仕事と草取りが待っているが、その作業が始まるまで、稲作に関しては差し当たりほとんどすることがない。

晴彦は、畦道に上がって今日播いた田を見渡した。

子供の頃から、毎年繰り返して見てきたことだが、あの頼りない一粒ずつの籾が間もなく発芽して、半年もたたないうちに熟した立派な稲穂になり、千何百粒にも増えて、この水田

に重い頭を垂らすのだと思うと不思議な気がする。

しかし、稲作は、先祖がここに住み着いてこの方、同じ場所で営々と続けてきた仕事なのだ。何百年もの間、同じ植物を育てながら同じ場所で、先祖代々生き抜いてきたのだから、大地にしっかり根づいた本当の産業、産む業なのである。

晴彦は、村の中で手に入る材料だけを使って、自分の力だけですべてを作り出せる自分の仕事にいちいち確実な手応えを感じていた。この感覚は、東京時代のごく短い期間だけぱっと咲いてぱっと散った根無し草のような近代産業で働くのとはまるで違うはずだろうと想像してもいた。

かつて東京の大企業で働いていて、大刷新後に農村へ戻ったある老人に聞いた話だが、同じ会社で三十年近くの間サラリーマン勤めをして定年退職し、三ヵ月後に用事があって会社へ行ったところ、組織の統廃合が進んでいて、もと自分がいた部も課もなくなり、部下や仲間も散りぢりになっているので驚いたが、何よりも、自分がいなくても会社が前と同じように動いているのを見て愕然としたといっていた。

その人は、ろくに子供と話をする時間もないほど会社に尽くしてきたそうだが、半生をかけて身につけたのは、会社の外の世間でほとんど通用しない特殊な仕事の知識と、社内でだけしか通用しない地位だけだったことに気づいて、これまでの生涯はいったい何だったのだろうと真剣に考え込んでしまったそうだ。

晴彦は、少なくとも現代の農業は、そういうサラリーマン仕事とはまったく異質だと感じている。田畑は自分のものだし、自分の技術ですべてを管理できるし、努力すれば土を肥やすこともできる、誰の命令も受けない代わり、全責任は自分にある。

もちろん、作柄が天候の影響を大きく受けるのは避けられないが、人間相手の商売で裏切られるのと違って、相手が天ならあきらめるほかないし、実際、昔からあきらめてきたのだ。ただし、先祖たちと決定的に違うのは、凶作が二年や三年続いたぐらいではびくともしない程度に食料を備蓄している点である。

晴彦は、播きむらがないことを確かめるために、水田を一通り見渡してから、手足を洗うためにすぐ近くを流れている細い水路へ向かった。

今日の午後は、絵の好きな堀江秀作(ほりえしゅうさく)が油絵を描(か)きにやって来るので、それまでに野菜畑を一通り見て手入れしておかなくてはならない。少し早いが、このまましおりの畑へ行って弁当を食べるつもりだった。

昔は良かった？

「ああ、いやな世の中だ」

素人離れした手つきで下絵を描きながら、堀江秀作がいった。

「こんな世の中に生まれて、きみたちは気の毒だよ」

「そうですかね」

また始まったと思いながら、晴彦は相づちを打った。

「みんなが、泥まみれになって働かないと、自分の食べるものさえできやしない。みじめな暮らしじゃないか。こんな生活がまともだと思い込まされている若い連中を見ると、私は気の毒でならんね。

東京時代なら、こんなフランス製の油絵具なんていくらでも安く手に入って、絵が好きなら、子供でも小遣いで買って使えたものだ。それが今じゃ貴重品……どころか、ほとんど手に入らないじゃないか」

堀江は、いつもながらの調子でくどくどとぼやいたが、手だけは目の前においてある青磁(せいじ)

の花瓶と、山盛りに生けてある見事な花を手早くスケッチしている。花は、昼食後にしおりの家でもらって来たのだ。

桃園村で花を作らない家はほとんどないが、売るためではない。自分で見て楽しむのと、先祖の墓に供えて、いつでも賑やかにしておくのが主な目的だった。晴彦も、できるだけいろいろな花を咲かせておくようにしているが、しおりの一家にはとてもかなわなかった。

両親とも、昔から花作りに熱心だっただけに、いろいろな品種のタネを持っている。しかも、それぞれの種類を育てるコツをよく知っていて、四季を通じて家のまわりに花を絶やすことがなかった。村でも有数の花作りの名人だから、写生用にわざわざ選んで切らせてもらって来たのだ。

東京時代の日本人は、あまり花好きではなかった。売るための花卉栽培は盛んになったが、家のまわりを花で美しく飾る習慣はほとんどなかった。そんなことをしても、金がもうからないからである。

それでいて、ヨーロッパを旅して、町中の家が色とりどりの花で飾ってあるのを見たりすると、「さすがに進んだ国は違ったものだ」などといって感動した。

ところが、国へ帰れば、旅先の一時的な感激などどこへやら、金ばかりかかって何の役にも立たない花など、せいぜいたまに家の中に飾るぐらいで、金もうけのことだけに熱中するのが普通だった。

しかし、日本人はもともとそれほど経済第一の浅ましい民族ではなかったのである。

幕末期の万延元年（一八六〇）に江戸を訪れたイギリスの園芸植物採集家ロバート・フォーチューンは、日本の庶民の間で園芸の趣味が非常に盛んなのに驚いて、次のような文章を残している。

> もしも、花を愛する国民性が、人間の文化生活の高さを証明するものとすれば、日本の低い層の人々は、イギリスの同じ階級の人達に比べると、ずっと優って見える
>
> （江戸と北京・三宅馨訳・講談社学術文庫）

日本人が森林や花より、コンクリートの方が好きになったのは、どうやら明治の夜明け以後……というより、昭和敗戦のあとの特異現象にすぎないらしい。したがって、多くの面で先祖返りの起きた大刷新のあとでは、お世辞にも上層階級とはいえない桃園村の人々は、楽しみとしての花作りに熱中するようになっていたのだ。

簡単な下絵を描き終った堀江は、無造作に生けてある見事な花の色合いを写すために、慎重な手つきで油絵具をまぜ始めた。しかし、口の方は相変わらずで、毎回少しずつ筋は違うがほとんど同じようなぐちをいい始めた。

「あの頃は、スーパーマーケットへ行けば、いつでも何百種類もの食べ物を売っていて、安

くいくらでも買えた。二十四時間店を開けているコンビニエンスストアなら、夜中だってアイスクリームだろうが菓子だろうが、ほかほか弁当だろうが果物だろうが、何でも手に入った。

頭を使う知的な仕事をするだけで給料がもらえて、その金で食べ物が安く買えたのさ。せっせと体を動かして泥で手足を汚す下級な仕事をしないと、自分の食べ物さえ手に入らない今の世の中に比べれば、東京時代はほとんど極楽みたいなものだった。

大刷新以後の偏向教育を受けたきみたちがどう思っているか知らんが、東京時代は、本当に良い時代だったんだよ」

七十歳になったばかりの堀江は、東京時代が最後の華やかさを見せていた時期にまだ二十代で、東京でのサラリーマン生活を経験している。その時代がよほど懐かしいらしくて、自給自足に近い今の農業社会が大嫌いなのだ。

村へ戻ってからもう二十年にもなるというのに、かつての都会生活が忘れられず、今でも、外出する時にはけっして藁草履をはかず、とっておきの革靴をはく。そればかりか、村の寄り合いには、背広にネクタイという昔の勤め人の「正装」で現れるという個性的な人物なのだ。

晴彦と知り合いになったのは、半年ほど前だった。晴彦が小物川のほとりで冬景色の水彩

画を描いていた時、堀江がたまたま通りかかったのがきっかけだった。それまでは、同じ村の古くからの住民同士だから顔と名前は知っているものの、まったくつき合いがなかったが、しばらく立ち止まって絵を見てから、

「さすがに美大を出たというだけあって、うまいものだねえ」

と、ほめてくれた。

「美大といっても、ぼくは工芸の方だから、絵はあまり自信がないんです。でも、下手の横好きで、描くのは大好きです」

美大出身者といっても、けっして絵が上手な方だと思っていない晴彦は、謙遜のつもりでなくいった。だが、堀江は謙遜だと受け取ったらしく、

「工芸でも何でも、絵が上手でないと美大には入れないんだろう」

という。

「上手かどうかはともかく、担当の教授たちの気に入るように描けないと入れてくれないはずですが」

「そうだろう。やはり、見よう見まねの素人の絵とは違うよ」

堀江は、大まじめにほめてから、

「私も絵が好きだが、やはり素人だからな、残念ながら、とてもきみのように上手には描けない。もし良ければ、今度いっしょに描いて教えてもらえないかな」

と、とんでもないことをいいだした。
「教えるなんて……」
晴彦は目を丸くした。
「しかし、三田村さんは、高校の美術の先生の資格も持っているんだろう」
「教員免許は持ってますが、子供に教えた経験さえありません」
「なに、素人にとっては、筆や絵具の扱い方の基礎だけでもきちんと教えてもらえれば、大助かりなんだ。できれば、油絵を教えてほしいな」
「道具は持ってますが、最近は油絵具が手に入らないから無理ですよ」
教える自信のない晴彦が、そういって逃げると、堀江は、得たりとばかりいった。
「油絵具なら、私がうんと持っている。昔、東京で買っておいたのが大きな箱に一杯あるんだ。腐るものじゃないからまだ使えるだろう」
「なぜ、そんなに持っていらっしゃるのですか」
晴彦は、びっくりして尋ねた。
「子供の頃から、絵を描くのは好きだった。だから、会社に勤めていた頃、社内の美術クラブに入って、日曜なんか写生に行ったりしたものだが、良い指導者に恵まれなかったし、忙しくてなかなか一枚を仕上げることもできなくて、そのうちやめてしまった。
それでも、いずれひまになったらゆっくり描きたいものだと思って、材料をぼつぼつ買い

込んだりしたが、東京の家は狭かったもので、買うたびに郷里の母親の所へ送って、しまっておいてもらった。それが、ほとんど手つかずに残っているのだよ。
たまたま、先月それを見つけて調べてみたが、別に変色もしていない。良ければ見に来てくれないか」
油絵を描くのが大好きな晴彦は、思わず絵筆をおいて堀江の顔を見詰めた。
「そんなに沢山あるんですか」
「うん。私は、ちょっとした収集癖みたいなものがあってな、何かを始めると道具や本などを買い集めたくなる。だから、油絵具だけで大きなダンボール箱に何箱かあるし、筆もキャンバスも死ぬまでには使い切れないほど持っているんだ。
一度に買えば大変だけれど、十年もかけて買い足していったのだから、それほど大変なことじゃなかった。あとで桃園村へ帰って見て、こんなにあったのか、と思ってびっくりしたぐらいだよ」
こんな会話を交わしてから、晴彦はそのまま道具をたたんで堀江の家へついて行った。村では中ぐらいの農家だったが、今では、手に入りにくい油絵用の画材をたっぷり持っているのに驚いてしまい、教えられるかどうかはともかくとして、いっしょに絵を描こうと約束した。
それ以来、堀江が週に一度ぐらいの割合でやって来るようになった。晴彦の家には、日当

たりの良い物置の隅を使った自分用の作業場があって、そこで新しい藁製品の試作をしたりスケッチをしたりしていた。アトリエというほどではないにせよ、生活空間から独立しているし、採光の具合も良かったからだ。

最初の頃は、強いて頼まれるまま、デッサンして手直しをしたり、絵具の扱いやカンバスの張り方を教えたりした。堀江は、自分で好きだというだけあって、道具の扱いにはすぐ慣れてしまったし、絵のセンスもなかなか良いので、もともと教えたがりでない晴彦は、すぐに口出しするのをやめた。

藁細工は実用品だから、上手下手に客観的な基準を決められるが、素人画家の場合は、当人が楽しければいいと思っている晴彦は、作品を批評してほしいといわれても、なるべく欠点を指摘せず、むしろ、ご当人が自信を持っていそうな部分を見つけてはほめるようにしていた。

自負心の強い堀江は、それが嬉しかったらしく、せっせと通って来るようになったし、実際にめきめきと油絵の腕を上げていた。

「三田村さんみたいに美大を出た人が、田舎でこんな生活をしているなんて、本当に気の毒なものだよ」

細い筆先で花びらの部分に絵具をのせながら、堀江がいった。

「東京時代なら、あんたみたいな人は、どこかちゃんとした会社のデザイン部門にでも入って、社会の役に立つ仕事をしているだろうに、今の世の中じゃ、毎日泥まみれになって田畑で働くほかない。まったく、人材の無駄づかいというものじゃないか」

「そんなものですかねえ」

毎度のことなので、晴彦は軽く受け流した。

「ぼくは、植物を育てるのが大好きだから、こんなに面白い仕事はないと思って喜んでやってますけれど……」

「みじめな暮らしをしているのに、それがみじめだと思っていないから、なおのこと気の毒なのさ」

堀江は、晴彦の方をちらっと見て、本当に同情しているような表情でいった。

「東京時代なら、三田村さんみたいな人は、海外へ出て世界一流の美術品をいくらでも見る機会があった。

私が会社勤めをしていた当時は、海外旅行もかなり面倒にはなっていたけれど、それでも、私でさえ海外へは三回も出ているし、パリのルーブル美術館やニューヨークの近代美術館へ行ったことがあるんだからねえ。それが、今じゃ、外国へ行くことなんて普通の人間には夢みたいなものだ。

外国どころじゃない。最近の若い連中は、せいぜい園田市へ行くぐらいであまり村からも

出なくなってしまったじゃないか。だから、ますます視野が狭くなって、桃園村のことだけ……というより、自分の田圃のことしか考えやしない。

その点、東京時代の若者は立派だった。誰でも英語の会話ぐらいできたし、われわれだって、いつも世界を視野に入れて働いていたものさ。大学生だって、夏休みになれば、平気で外国へ出て行ったものだよ」

「そんなものですかねえ」

晴彦は、また同じ相槌を打った。黙って聞いていさえすれば、貴重な油絵具をたっぷり使わせてもらえるのだから、文句をいうこともない。

「いい時代だった」

堀江は、筆を休めて夢見るような目つきで外を見ながらいった。

「子供の頃からちゃんと決められた勉強をしていれば、いい学校に入れて、いい学校を出ればいい会社に入れた。いい会社に入れば、社員は家族みたいなものだから、給料以外にも社宅だの社員福祉だのでいろいろ面倒を見てもらえた。会社のためにせっせと働いていれば、生活に困ることはない。

毎日、コンピューターに向かっての仕事ばかりだったから、白いぱりっとしたワイシャツにネクタイを締めた服装で出社して、手を汚す必要もない。有り余るほどの給料はもらえなかったが、それでも、今じゃ想像もできないほど贅沢な生活ができた。どこの家にも大きな

電気冷蔵庫やワイドスクーンのカラーテレビがあって、新型が出れば旧式のは粗大ごみとして捨ててしまった。

それぐらい豊かな社会だったのに、今はどうだ。きみたちぐらいの年だと、電気冷蔵庫なんて使ったこともなかろう」

「ええ」

哀れむような目つきで見られて、晴彦はうなずいた。桃園診療所には医薬保管用の冷蔵庫があるから、見たことはあるが、どの家にも冷蔵庫がある生活など、想像もできなかった。それに、食生活はもっとも早くから先祖返りを起こしていた。野菜は畑から取ってくれはいいし、卵も、生みたてのが落ちている。保存のきく鶏肉や魚の燻製も作ってあるし、漬物もそれぞれの家に伝わる方法でたっぷり準備してある。必要量の食料を保存できるさまざまな方法が復活しているから、昔の都会生活と違って、冷蔵庫などなくても特に困ることもなかったのである。

しかし、晴彦も、東京時代のサラリーマンの生活が、今では想像もつかないほど贅沢だったことだけは、うすうす知っていた。

「子供だって、夏でも冷房のきいた部屋で冷たい飲み物を飲みながら、ＶＲゲームというのをやって遊んだ。あれが、文明の生活というものさ。

外で遊ぶ時も、今の子供が、虫取りだ、メダカすくいだといって、それぞれ勝手に泥まみ

れになって野蛮な遊びをするのと違って、サッカーや野球のような外国にも通用するちゃんとしたルールのあるスポーツをやるんだよ。それも、勝手にやるのじゃなくて、子供の遊びの専門教育を受けた大学生なんかが監督してきちんと遊ばせるから、けんかにもならないし怪我もしない。

あれでこそ、高度の文明社会といえるだろう」

「はあ」

確かに、晴彦自身も、子供の頃はそんな高級な遊びなどしたことがなく、仲間といっしょに泥まみれになって野山をはね廻っていただけだったし、大人に遊びの指導を受けた経験もない。けんかもしたし、すり傷ぐらいしない日はないほどだった。

それに、大人になってからも、スポーツらしいスポーツをやったのは、大学の授業としてだけだった。といっても、何でもかでも教え込んで学生の教養を高めようとした東京時代の親切な大学と違って、今の大学は、学生が専攻したい学科を集中的に教えるのが目的だから、スポーツも、希望者だけにいろいろな種類を一通り教えるだけだった。

こういう面でも、大刷新後の庶民の生活はかなり先祖返りを起こしていた。もともと、日本……というより、東アジア文化圏には、ヨーロッパ式のスポーツに相当する遊びはなかったからだ。

東アジア文化圏に属していた江戸時代の日本にも、当然のことながら二十世紀に大流行したようなスポーツはなかった。強いて庶民のスポーツといっていえないことがないのは相撲ぐらいだが、これも、本来は格闘のための武術だった。しかし、農村では、男たちの力くらべの要素が大きかったから、辛うじてアマチュアスポーツのうちに入れられるかもしれない。

十八世紀以後の江戸時代の興行相撲には、プロスポーツとしての面もあったが、これも、近代相撲とはかなり異質だった。土俵に上がって体を見せるのが目的の、見かけだけが立派な力士がいたし、有名な力士でも、顔は見せても毎日相撲を取るとは限らないなど、見せ物としての要素が圧倒的に大きく、現代語でスポーツというのは無理だろう。

剣術や弓術は、多少スポーツ化していても、やはり本質は武術だったし、水泳も、武士の場合は武術の一種だった。川や海で働く人々の場合は、もちろん実用を第一の目的とした技術だった。他人より百分の何秒早く泳げるからといって、英雄扱いしてもらえる近代スポーツとはまったく異質だった。

つまり、厳密な勝負を争うスポーツは、もともとがヨーロッパの貴族の遊びだったのが、社会が豊かになるにつれて次第にヨーロッパの庶民の間に普及した。植民地からの収奪によって生まれた経済的余裕の産物なのだ。

ヨーロッパ以外の土地では、まず、貴族や金持がヨーロッパ人のまねをして始めたことからもわかるように、もともとは他人を働かせて自分は遊んでいられる階級のひまつぶしだっ

たのである。

日本でも、西洋式スポーツは、最初は庶民とは無縁の西洋化したエリートの遊びだった。日本がはじめてオリンピックに参加した時、誰よりも早く長距離を走れる人力車夫（じんりきしゃふ）をマラソンの選手として送り出そうとしたところ、偉い人が反対してお流れになった。反対の理由が、そんな下層労働者を国際的な場所に送り出すのは「日本の恥であり、外国に対しても失礼に当たる」というのだったことからも、そのあたりの事情が読み取れる。

大刷新以後の日本から西洋式のスポーツがほとんど姿を消してしまった理由も、人口の大部分が純粋な農民になってしまったからだ、という説が有力だった。みんなが自分の食料を自分で作らなくてはならない社会に、むだに体力を消耗するだけの貴族の遊戯が入り込む余地などないというのだ。

晴彦にしても、村の青年たちにしても、勝ち負けを争うための遊びなど、心理的には子供の頃に卒業してしまっている。毎日、田畑で体を動かして働いている農民は運動不足になる心配はないどころか、いつ襲って来るかもしれない天候の変化に対して体力を温存しておく必要もあって、お祭り以外の遊びに体力を消耗したくないのだ。

だからといって、現代の青年たちが虚弱なわけではない。かつての国民体育大会という各県廻り持ちのスポーツ大会があった時代、開会式の途中で気分が悪くなって倒れるスポーツエリートの選手たちがいたため、開催県の救急車だけでは足りず、隣接県からも借りて待機

させていたというあきれるような話があった。相手に勝つために特殊な筋肉の瞬発力だけを発達させる近代スポーツでは、本当の体力が養（やしな）えるとは限らないのだ。

その点、十歳台で成人病の症候を示すことさえ珍しくなかった東京時代の若者に比べると、さまざまな労働によって全身の筋肉を鍛えている桃園村の若者の方がはるかに健康だった。

だが、過去の栄光しか念頭にない堀江は、恍惚（こうこつ）としたように話し続ける。

「なあ、三田村さん。今じゃ、ちょっと想像もつかないだろうが、東京時代には、どこの家にだって自家用の乗用車があったんだよ。

私だって、五年おきぐらいに新しい乗用車に買い換えていたものだ。はたちになれば、たいていの若者は車……くるまっていうのは、あの頃の言葉で乗用車の意味だ。その、車の免許を取って、自由に乗り回した。大学生だって、自分の乗用車を持っていた豊かな時代だからねえ。

桃園村の農家だって、車のない家なんてほとんどなかっただろう。ところが、今じゃ、役場にあのおんぼろトラックが一台あるきりだ。みじめなものじゃないか。

東京時代は、子供のうちからそういう高級な生活が保証されていたから、みんな小さい頃からせっせと勉強をしたものだ。東京が栄えていた当時は、夜の十一時過ぎに電車に乗っても、学習塾帰りの子供が大勢乗っていたものだよ。小学生でも、学校が終ってからまた塾へ

行って英語の勉強なんかをするほど、学習意欲が旺盛だったんだな。

それが、今の子はどうだ。学校は午前中だけで、それも、国語と算数の授業が大部分で、理科と社会が申しわけのようにあるだけだ。小さいうちは暗くなるまで遊びほうけていて、大きくなっても学問どころか、農業しか覚えない。野良仕事のほかにほとんど何も知らないじゃないか。

あれじゃ、東京時代の子に比べれば、ほとんど野蛮人と同じだ」

野蛮人といわれて、晴彦も少し腹が立った。自分も、まさにその野蛮人として育ったからである。しかし、堀江は知らないのだが、小学校でも、植物の育て方、つまり農業の基礎については、きちんと教わった。農作物の品種や品種改良の技術についても、かなり専門的な知識がある。堀江のいうような受験のための勉強こそしなかったが、今では普通の人間にとって何の役にも立たない机の上だけの学問や、わざわざ学校で教えなくても自然におぼえてしまうような知識を教えなくなっただけのことなのだ。

だが、晴彦は、老人を尊敬するように子供の頃からきびしくしつけられた世代なので、直接いい返すことはしない。しばらく黙って絵筆を動かしながら考えていたが、ふと思いついたような顔で質問した。

「昔の人は、それほど学問に励んで偉かったのに、なぜ、こんな野蛮な世の中にしてしまったのですか？

だって、ぼくがもの心ついた時には、桃園村は今とほとんど同じようになっていたのだから、こういう野蛮な社会を作ったのが、ぼくたちの世代じゃなくて、東京時代に生きていたもっと前の世代の人だということだけは確かですからね」

「ふん」

堀江は、ちょっとばかにしたように鼻を鳴らしたが、晴彦の質問には答えず、急に熱心に絵を描き始めた。しかし、黙っていたのも束の間で、すぐに手を休めていった。

「グレーシャムの法則を知っているかね」

「知りません」

「悪貨は良貨を駆逐する……というのだ。もともとは経済学の法則で、たとえば、金貨が通用している社会で、同じ金額として通用する紙幣を発行したとする。政府にしてみれば、印刷した紙切れが貴金属と同じ価値になるのなら、紙幣を発行した方がとくだから、すぐに金貨を引っ込めて紙幣ばかりになる。つまり、紙切れが貴金属を追い出してしまう結果になるというわけだ。

それと同じようなことが、人間社会でも成り立って、とかく横車を押すような連中がのさばるから困るのだ。大部分の人は、まともに学問をしてちゃんとした会社に勤めているのに、まともな社会に入れないか、入りそこなってしまった、ほんの一握りのばかな連中がいて、こんな社会は間違っている、などといい始める。

輝かしい東京時代がつぶれてしまったのも、そんなやつらのせいなんだ」

堀江は憎らしそうにいった。

「はあ、そうですか」

晴彦は、もっともらしく返事をしたが、内心では、堀江の答えが答えになっていないと思っていた。だが、堀江か、堀江より年下の人に大刷新前後のことを尋ねても、まともな答えを得られないのは今に始まったことではないから、別に驚かなかった。

堀江の年齢でさえ、あの時代のことについてまともに答えられないのだから、やはり、本山長老に教えてもらうほかない。晴彦の信念はいっそう強くなった。

あの人なら、たとえその場では答えられないような問題でも、いい加減にごまかしたりせず、次の機会までに調べるなり考えるなりして、教えてくれるだろうと思った。

成功は失敗のもと

「ようやく、何をどう話すかの準備ができたもので、皆さんにお集まりいただいた」

八十九歳の本山長老は、しおりが準備した大きな椅子にゆったり座ったままいった。横においてある机には、古い雑誌やノートなどが何冊かおいてあり、片手には文字をぎっしり書き込んだ新しいノートを持っている。

「こんな恰好でお話しするのは、失礼といえば失礼なのだが、長い間立っているのはくたびれるもので、年に免じてお許し願いたい」

桃園学舎には、百人近くの聴衆が来ていた。仕切りを外して二つの部屋を一つにしてあるが、椅子をおいたのではとても入りきらないので、全員が座布団持参で来ていた。それでも入りきらない人は、廊下に座っていた。みんな、熱心に本山の顔を見詰めていた。

しおりは、部屋の前の方に小さな机をおいてその前にきちんと座り、長老の話を筆記するために新しいノートを広げて待ち構えている。

晴彦も世話役の一人なので一番前に座っていたから、参加している全員の顔を話が始まる

前に一通り見渡した。堀江の姿はなかったが、桃園診療所の原田医師が部屋の中ほどに座っているのが見えた。五十歳前後の温厚な人柄の医者だが、普段はあまり人前に出る人でないだけに、今度の話に対する人々の関心の深さがわかるような気がした。

「さて……」

本山は、胸のポケットから眼鏡を出してかけると、開いたノートを見ながら、いつもと同じような口ぶりでゆっくり話し始めた。洗い晒したような厚手のシャツを着ているだけのくだけた服装のせいで、長老の講義という堅苦しい雰囲気はなかった。

「今日から、大刷新の頃のことを話すことになった。一部の人にはすでに説明しておいたが、大刷新という言葉はあとになってからできたので、はっきりした区切りのある事件が起きたわけではない」

そういってから、本山長老は、いつか晴彦たちに話したのと同じように、大刷新と明治維新、昭和敗戦とがいかに違っているかを説明した。簡単で要領の良い説明を終えてゆっくり室内を見廻した本山は、一同が納得したらしい様子を確かめてから、話を続けた。

「だから、歴史の専門家でない私には、みなさんが歴史の本で読む時のようにわかりやすく整理した話はできないのだ。

いろいろ考えたあげくに、やはり自分が経験したことを経験したままに話すほかないと思うようになった。とはいえ、今も話したように、これが大きな変化の始まりだったというよ

うなはっきりした現象は、思い当たらないから、どのあたりから話せばいいのかわからなくて困っていた。

仕方がないから、古い日記を読んでいたところ、人間の記憶というのはまことに不思議なもので、急に若い頃のある夏の日の情景がありありとよみがえって、そうだ、あの日のことあたりから話そうかと思いついた。

今から三十数年前、まだ四十前だった私は、当時、東京にあったアラン工業株式会社という機械メーカーに勤めていた。先代の社長が自動車のブレーキ部品のメーカーとして創業した会社で、自動車産業が発展するにつれて大きくなり、この頃は自動車関連の部品を何十種類も製造する中堅メーカーだった。

地味な会社だったが、自動車メーカーの注文通りの品物を作るのではなくて、ほとんど全部が自社開発の製品だったから、アラン工業の部品の能力に合わせて自動車の設計をするぐらい実力があった。

しかし、従業員は五百人ぐらいだったから、あまり大きな会社ではない」

本山は、そこまで話すと、聴衆の表情を見て笑いながらいった。

「工業国だった時代を知らない今の若い人は、従業員が五百人もいる会社と聞けば、びっくりするかもしれないが、東京時代としてはけっしてそれほど大きな企業ではなかった。当時は、従業員が何千人、何万人という会社がざらにあったし、グループ全体では、十万人、二

十万人というような、小さな国なみのとてつもない大企業さえ珍しくもなかった時代だから、アラン工業ぐらいの会社なら中小企業のうちだったよ。

それはともかく、今世紀に入って間もない頃の十月のある日だった。私は、設計第三課長という地位だったが、自分のデスクで仕事をしていた時、直属の上司である製造部長の川上さんから電話があって、開発と製造部門全体を統括している大下専務の部屋へ来るようにいわれた。

私が右も左もわからない学卒の新入社員だった頃、大下専務は課長、川上部長が係長クラスの実力者で、手を取って教える……というより、一人前の技術者になるよう徹底的にしごかれた上司であり、お師匠さんのような人でもあった。

すぐ駆けつけて行くと、専務は、いきなりこんなことをいいだした」

＊＊＊

「本山君。きみがかつて室長をしていたことのある開発室のことだが、ちょっとあそこの面倒を見てやってほしいのだ」

「面倒を見ると申しますと……」

本山は、大下専務の言葉の意味がよくわからなかったので、問い返した。

「実は、あそこの実績がさっぱり上がらなくて困っている。知っての通り、ここ十年というもの、自動車メーカーからの発注は年々減る一方だ。かつては、メインの受注先だった日豊自動車への売上が全売上の九十パーセント以上を占めていたのに、先期は、何と五十パーセントを切ってしまったのだ。

わが社の命運は、独自開発の商品が切れ目なしにできるかどうかにかかっている。とくい先から図面を渡されてその通りに作るのなら、外国勢の追い上げの前に手も足も出ない。すぐに倒産するだろう。

わが社では、創業者以来の方針で、若手の技術者を開発の中心に据えて次から次へと新機能の高付加価値製品を作らせて発展してきたのだが、最近では、開発の速度が急に落ちてしまった。有力な新製品もさっぱり生まれない」

「はあ」

最近、これはという新製品ができないことは、本山もうすうす感じていたが、新製品の開発は、運に左右される部分が多いので、あまり気にはしていなかった。二、三年前には失敗作と認定されてお蔵入りしていた試作品を、しばらくたって製品化したら大当たりしたということさえあるのだ。

そう思った本山は、すぐにいった。

「あまり気になさることもないと思います。若手の成績が、しばらくの間、低調だからとい

って、いちいち咎め立てしていたのでは、現場の士気が低下してしまうと思います。大きなことをやっていればいるほど、簡単には成績が上がりませんから」

専務は、数秒間だまっていたが、憮然とした表情になっていった。

「私も、入社当時は開発室に配属されて、後で製造に移ったから、そのへんの事情はわかっているつもりだよ。

だが、事態はかなり深刻で、どうやら、われわれの常識が通用しない時代になりかけているらしいのだ」

「私は、しばらく開発から離れているので何ともいえませんが、具体的には、どういうことが起きているのですか」

本山が質問すると、専務の代わりに川上部長がいった。

「今の室長の横村君は、いわばあの世代のピカ一の秀才だから、大いに期待していたのだがね、とにかく、彼の代になってからは、まったく成績が上がらない」

「何か、とんでもないことを企てているのではないのですか」

「それならそれで、たとえ失敗しても楽しみがある。うちの会社は、もともと失敗の責任をごちゃごちゃいわないのが創業者の方針で、その前向きの姿勢のおかげでここまで発展してきた。だから、開発室は、かなりばかげたことでも許される若手の自由の天地だったのだが、ここへきて、まるで沈滞してしまったから頭をかかえているんだよ。

いろいろなことを、せっせとやってくれてはいるんだが、これまでの製品をちょっと便利にした程度のものを器用にまとめるだけなんだ。その程度なら、開発室ではなくて、工場の製造過程で改良できるといいたいようなことばかりだ、といってやるのだが、ご当人たちにしてみれば、すぐに製造ラインに乗せられるはずの大発明ぐらいに思っているのだから、始末が悪い」

「横村君でだめなら、彼を製造の方に廻して、誰か野心のありそうなのを室長にすれば良いと思いますが」

本山がそういうと、大下専務は薄笑いを浮かべた。

「本山君なら、われわれより世代が近いから、人を見るにも別の見方ができるだろう。適当な人材がいれば、ぜひ推薦してくれないか。できるだけ早く異動をするから」

そういわれて、本山は絶句した。

大企業でないだけに、たとえいっしょに働いた経験はなくても、程度の差こそあれ技術系の全スタッフについて、一通りのことを知っている。それだけに、横村の後任として開発室をまかせられそうな人材といわれても、推薦できそうな人物がいないこともわかっているのだ。

これまで、人事についての責任ある立場に立ったことがないので、本気で考えたことはなかったが、いざ、推薦せよといわれても適当な人物がいないのである。本山の困ったような

表情を見て、川上部長がいった。

「十年前なら、ちょっとしたポジションには、必ず本命がいて、ライバルが二、三人いたから、その時の需要の動向などを見定めて、その数人のうちからいちばん向いていそうなのを選べた。実際、そういうやり方で、わが社の方針はずっと合格点を取ってきた。ぼく自身、そういうふうに選ばれたのだろうし、本山君も、二、三人の候補者の中から開発室長に選ばれ、さらに製造課長に昇進した。

五年前には、少し様子が変わっていたけれど、それでも、誰か一人ぐらいは適格者がいたものだ。でも、今では、一人もいなくなってしまった」

本山は、それを聞いてしばらく考えていたが、やがていった。

「しかし、私が開発室長だった頃の横村君は、本当に役に立つ男でした。私の出したごく大まかなアイデアを、きちんとまとめ上げて具体化する腕前は大したもので、私の業績になっていることも、実質は彼がやってくれたことが多いのですが……」

専務はうなずいた。

「その通りだ。だからこそ、われわれはためらわずに横村君を室長にした。ところが、彼は、開発の責任者になると同時に、何もできなくなってしまったんだ」

「ふうん」

本山は、大きく息をついて腕組みをした。

「何か、思い当たることでもあるかね」

と、部長が尋ねた。

「思い当たるというより、自分の責任かなと思う点はあります」

「どういうことだい」

「忙しさにまぎれて彼を助手みたいな使い方ばかりせず、もっと自主性を発揮できるように仕向けるべきだったと反省しています」

「きみが反省するのは立派だが、どうやら、問題はそれほど単純じゃないらしいぞ」

と、大下専務がいった。

「こういう傾向は、うちだけじゃない。

このあいだ、日豊自動車の里見副社長がぐちをいっておられたが、二十年前は新型車の開発主任といえば、主に三十歳ぐらいのちゃきちゃきの若手だったそうだ。入社後十年前後の青年が、会社の命運を背負って野心的な新車を作っていたのだ。

ところが、十年前には、同じ職務を中年の四十前後の人がやるようになり、最近では、五十過ぎの役員待遇の技術者が担当しているというんだ。

つまり、年齢だけからいえば、二十年前の開発主任が、実質的にはそのままずっと新車の開発を担当しているといっていい」

「その話は聞いています。でも、そうなった理由は、自動車の主な需要層が、昔の若者中心

から年配の人に移ったせいだということですが……」

「そういう傾向もあるだろう。でも、それは表向きの説明で、くわしく内情を聞けば、そんな感性やフィーリングみたいな問題だけじゃないらしい。どうやら、日本の技術者が、われわれの時代とは別の人類みたいに変質しかけているとしか思えないというのが、副社長の考えなんだ。

きみも知っているように、里見さんはここ二十年間、日豊のベストセラー車を十種類近くも出してきた新車開発の総責任者だから、われわれみたいな部品屋よりずっと広い範囲を見渡しながら、大きな流れを見てきた人だ」

「もちろん、存じております」

「里見さんは、自分たちと比べものにならないほど豊かな環境で育ってしまった世代の若者には、今の状態をもっともっと良くしたいという欲求がうすいのではないかといわれるのだ。

副社長が日豊に入社された当時は、まだ欧米の自動車が圧倒的に優れていた。日本製の乗用車では、とてもあちらの高速道路を走れないほどの技術格差があったから、日本の若い自動車技術者たちは、それこそ石にかじりついても追い越してやろうという熱意に燃えていたそうだ。

そういう気持で押しまくった結果として、日本は生産台数世界一の自動車王国になったのだが、自動車王国になってからの日本に生まれて育った世代にとっては、自動車は空気のような存在になった。

自分の家に乗用車の一台や二台あって当たり前、十八になれば運転できて当たり前、時速百何十キロで高速道路を飛ばすのも当たり前、故障しなくて当たり前だから、なぜ動くのか、どうすればもっと良くなるのかなどと考える習慣がない。サルが空気について何も考えないのと同じなんだ」

「そうかもしれません」

本山は、うなずいた。あまり豊かとはいえない農村出身者として、都会育ちの同僚に同じような傾向を感じることがあったからだ。専務は、続けた。

「だから、開発主任になって新車の開発をまかされても、小手先の改良はできても、これから作る車全体の構想を組み上げる能力が乏しい。仕方なしに、もとの上司だった前の主任の所へ行っていちいち相談する。一度や二度はいいとしても、毎日毎日相談に来られたのでは自分の仕事ができないから突っ放すと、開発の仕事がさっぱり進まなくなる。

会社としてもそれでは困るから、経験者をまた新車の開発担当に復帰させると、若い連中は活き活きとして動き出すというんだ。自分では何も決められないけれど、人が方向を決めてくれれば、勇気百倍で、かなりむずかしいことでもやりこなすらしい。

そんなことを何度も何度も繰り返しているうちに、結局、ベテランが、新車開発の現場に

そのまま居つくのが慣例になってしまったというんだ。

文明社会には、文明を内側から崩壊させる要素があるのではないか、というのが、里見副社長の意見だった」

本山も、部下たちに対して同じような感情を抱いたことがないわけではない。しかし、中間管理職が、上司のこういう考え方をそのまま受け入れて、年長者側に立ってしまえば、若い連中の立つ瀬がないので、本山は敢えていった。

「専務。昔から、〈今の若い者〉はいつでも〈なっていない〉のが普通だったそうですから、あまり心配することはないと思うのですが……

われわれも、先輩たちに叱られながら何とかやってきましたから、連中は連中なりに将来の社会を背負っていくのじゃないでしょうか」

本山は、部下をかばうような気持で発言したが、専務はにこりともせずにいった。

「もちろん、未来は若い連中にまかせるほかない。しかし、今われわれが問題にしているのは、彼らが未来の〈社会〉を背負ってくれるかどうかじゃなくて、未来の〈会社〉を背負えるかどうかなんだ。われわれは、何よりもまず会社のことを考えなくちゃならん。

未来といっても、五十年、百年先のことなら心配する必要もないが、十年後の会社がどうなっているかは、間もなく六十になる私なんかより、本山君にとってこそ大問題のはずじゃないか。十年後といえば、きみはまだ五十歳にもなっていないんだからね」

「はい」

本山は、神妙な顔でうなずいた。

「だからといって、今ここで、若手の人材不足をとやかくいっても、これだけの会社なんだからどうしようもないことだ。急場しのぎにしかならないが、差し当たり、アラン工業も日豊自動車のまねをして、経験者にもとのポジションを引き受けてもらうほかないという結論に達したのだ」

大下専務は、そこまでいうと川上部長の顔を見た。部長は、うなずいて続けた。

「要するに、きみに開発室長を兼任してほしいのだ」

「しかし……」

本山は、びっくりした。二つの業務を兼任することはとうていできないからだ。

「まあ、待ってくれ」

部長は、本山の表情を見てなだめるようにいった。

「両方できるはずがないことぐらい、こちらも先刻承知だよ。しかし、開発室長へ戻せば降格になるから、最初は兼任という形で、実質は開発へ戻ってほしい。製造の方は、差し当たり木戸係長に担当させる。それで、次の異動の時に、開発室を開発課に昇格させて、きみを課長、横村君は係長とする。きみの後任の木戸君は、そのまま製造第三課長に昇格させる。これなら、横村君も傷つかないだろう。彼だって、きみの下で働けば有能な男なんだか

ら、落ち込ませないように上手に使わなければ損だ」

「わかりました」

社内の人事にあまり関心のない本山は、素直にうなずいたが、大下専務は、なだめるような口ぶりでいった。

「こんな人事をするのは、今度がはじめてだから、本山君は不本意かもしれないが、とにかく非常事態だと思ってほしい。その代わり、開発課の予算など、これまでより増やせるし、課長の裁量権も大幅に認めることになるだろう」

同時に、責任もぐっと重くなるのですね……と、口まで出かかったが、もちろん本山はそんな余計なことはいわなかった。

専務の部屋を出てドアを閉めると、川上部長がいった。

「今日は、どうせ奥さんがいないんだろう。今夜は金曜日だから、久しぶりに一杯やって行かないか。いろいろ話したいことがあるんだ」

「いいですね」

本山は、うなずいた。

妻の礼子は、小学生の息子といっしょに桃園村へ行っている。息子の和夫は祖父と気が合って、細々と続いている鍛冶屋の仕事や畑仕事を手伝うのが面白いらしく、夏休みになると早々に両親に連れられて桃園村へ行くのを何よりの楽しみにしていた。

都会で生まれ育った礼子も、喜んで夫の故郷へついて行くが、和夫を祖父母のもとにおいて一旦夫婦で東京へ帰り、お盆休みの混雑が収まる八月後半になってから休暇を取って一人で行き、息子を連れて帰る習慣になっていた。今は妻が二度目に桃園村へ行っている時期なので、本山はしばらく独り暮らしをしているのだ。

あまり忙しい時期ではないので、二人は、六時前に待ち合わせて会社を出た。

「相変わらず、暑いなあ」

川上が、晴れ渡った空を見上げていった。

「例の店へ行くか」

「ええ。今日あたりは、空いているでしょう」

例の店とは、川上の行きつけの一杯飲み屋である。会社から離れているため、仕事の関係者と出くわすことがなくて気楽だし、つまみの種類が豊富で値段が安い。しかも、二人の家と同じ方向だった。

会社を出ていつもの通勤コースを逆行し途中下車した二人は、日暮れ近くなってもまだ三十度はある暑い町中を汗まみれで歩き、裏通りにあるあまり大きくない酒場に入った。冷房がよくきいていて、だらけていた体が引き締まるようだった。好みの席が空いていたので向かい合わせに座ると、本山は、すぐに生ビールの大ジョッキと、何種類かのつまみを注文した。

もったいぶった店ではないから、藍染めの作務衣に白い前かけをつけた若い男がさっさと注文の品を持って来る。川上は、うまそうにぐっと一口飲んでから、ふうっとひと息ついていった。

「会社ってのは、いろいろなことがあるなあ。一難去ってまた一難だ。きみも、これからが大変だぞ」

「わかってます。予算が増えて裁量権が大きくなれば、まあ、楽にはなりっこありませんからね」

「しかし、それが男の生きる道じゃないか」

「ええ。だから、別に文句をいってるわけじゃありません。感謝してます」

本山は、またひと口飲んでからいった。

「でも、部長。ぼくが会社へ入ってから十五年以上になるけれど、何だか年々仕事がしにくくなるような気がします。もちろん、地位が上がるにつれて責任も重くなるのは当然だとは思いますけれどね、それ以上に仕事がやりにくくなっています」

「きみも、そう思うか」

川上は、憮然としたような表情でいった。

「ぼくも、ここ十年ぐらいは本当にやりにくい。以前は、普通にやっていさえすれば、日豊さんの車が増えるにつれてアラン工業の売上も増えるのは当たり前だったし、増加分をどれだけウチに取り込めるかだけの問題だった。

しかし、最近は、横這いならましな方で、全体としては縮小傾向の中で、うちの売上やシェアだけを増やさなくてはならない。

仕事の前提そのものが無理なんだよ」

「競争に勝って、他社をつぶすほかありませんからね」

「そりゃそうだが、相手も昼寝しているわけじゃないし、わがアラン工業だって、今やかつての勢いはないからな。

失敗は成功のもとというけれど、うちの場合は、成功は失敗のもとかもしれない」

「それ、どういう意味です？」

と、本山が尋ねた。

「文字通りの意味さ。長い間……といっても二十年か三十年間だけれど、二、三十年というのは一世代だからな。人間は、同じ状態が五年続けば半永久的に続くと思う。十年続けば、このまま永久に続くと思う程度の知能しかないんだ。そんな頭しかないわれわれが、同じようなやり方で三十年近くも成功していたものだから、そのやり方でずっと押してきて、ほかの方法を考えもしなかった。

ところが、世の中が変わって、今までのやり方が通用しなくなってきたらしいのに、あまり長い間うまくいっていたから、根本的に見直すことができなくなっているんだ。

それだけじゃない。さっき専務がぼやいていたように、今の二十歳代の若手は、どうも技術者向きじゃないようだな。一応、大学で理工系の学科を専攻して、そこそこの成績で卒業したのを採用するし、最近では、大手企業が採用を絞っているから、アラン工業あたりでもかなり成績の良い学生が来てくれる。

ところが、まるで役にたたない……というより、物を作るのがどういうことなのか、まるでわかっていないから困るんだ」

「確かに、そういう傾向が強くなってきましたね」

「傾向どころじゃない。子供の頃からパソコンのキーボードがすべてで、自分の手でネジ一本締めた経験さえないのが、理学部や工学部へ入るんだ。いい学校つまり、親が理想に近いと思うような官庁や企業への就職率が高い大学へ入るために親に尻を叩かれて、ペーパーテストの優等生になって、偏差値がいくつ以上だからあの大学の工学部へ行けと指導されて入ってくる。

でも、何かを作ったという経験がほとんどないから、信じられないほど不器用だ。鉛筆さえきれいに削れない。かつては、物を作るのが好きで技術者になるのが普通だったけれど、最近は、そういうはっきりした意欲のある人間がめったにいない。たとえいたとしても、うちへ来てくれる確率はきわめて低い」

本山は、枝豆を食べながらうなずいた。

「ぼくは、田舎の鍛冶屋のせがれだけれど、子供の頃からおやじが毎日鉄を打っていろいろなものを作ったり、簡単な旋盤を使って農機具のちょっとした部品を削り出したりするのを夢中で見ていて、手伝いたくて仕方がなかったものですよ。

本当は、自分も鍛冶屋になりたかったけれど、おやじは、世の中が変わっていくのをちゃんと見ていて、まだおれが稼げるうちに学校を出ておけといってくれたもので、何とか二流大学で機械を勉強しました。同期の連中には、商社なんかへ就職したのがかなりいたけれど、ぼくは、機械が作りたくて作りたくてたまらなかったから、機械メーカー以外の会社に入ろうなんて夢にも思わなかったですよ。

今は、物を作るのが面白いと思う子供がいなくなってしまったのですかねえ」

「いっぱいいるはずだ。だけど、そういう人間は、教育のコンベヤベルトに乗りにくいから、下らないペーパーテストの○×試験のどこかで落ちこぼれて、産業界まで上がってこられないんだ」

「例によって、教育の問題ですか」

「教育だけのせいだとは思わない。マッチのすり方なんて、もともと学校で教えるべきことじゃないからね。でも、教育の影響も大きいよ。うちの子を見ていても、今みたいな方針で学校教育をやっていたんじゃ産業人なんて育たないとつくづく思う」

川上は、面白くなさそうな声を出した。

「また、何かあったのですか」
本山は尋ねた。川上には、高校生の息子がいるのだが、学校の教育方針についてしばしば不平をもらすのを聞かされている。
「この間、せがれが、学校で物理の実験をやるのは無駄だっていい始めた」
「なぜ、無駄なんですか」
「だって、入試で実験をやるわけじゃないから、実験の時間もペーパーテストの練習にあてるべきだ、っていうんだ。いや、これは、せがれ一人の発想じゃなくて、クラスの総意らしくて、物理の先生に申し入れたのだそうだ。
先生は、現象が起きるのを自分の目で見なければ真理はわからない、と当然のことをいって説明したそうだが、学生たちはおかしくて大笑いしたというんだ」
「どこが、おかしいんですか」
「要するに、高校で勉強するのは真理を学ぶためじゃない。できるだけいい大学の入試に受かるのが唯一最高の目的なんだから、よけいなことはしたくない……というより、しない方がいい……いや、するべきでない、という考えらしい」
「うーん。それは、すごいな」
本山は、驚くというより、むしろ感心してうなり声をあげた。
「合理主義の極致っていう感じがします」

川上は、苦笑しながらいった。
「受験が人類の最終的な目的だとすれば、確かに合理的だよ。しかし、工業製品を作る仕事ってのは、必ず正しい答えのある入試問題を解くのとはまったく異質だろう。答えがあるかどうかわからない問題に挑戦し続けるのがわれわれの仕事だ。
しかも、日本人がこんな生活をしていられるのは、われわれ技術者どもが、実験に次ぐ実験をかさねて、世界中に売れる製品を必死になって作っているからじゃないのか。
きみにこんなお説教しても始まらんが、ただ、コンピューターで理論計算をして図面を引いただけじゃ、まともな機械なんてできやしない。試作して具合の悪い部分を直し、工場の生産ラインに乗せられるかどうかを現場と相談しては手直しして、何度も何度もやり直しているうちに、ようやく売れる製品になる。
しかも、そうやって発売したところで、どんどん売れる保証はありゃしない。ユーザーに文句をいわれて、また手直しする。ようやく、ほぼ完成したかな、という頃には、もう旧式になりかけていて、また次の型を作り始める。まるで、賽の河原の石積みみたいなことを定年まで続けるんだけれど、こちとらは、それが面白くてやっているんだからね」
酒が入るとおしゃべりになる川上は、新しく頼んだ冷酒をちびちびやりながらいった。
「ところが、高校段階から、実験なんて無駄だと思う人類が激増しているんだ。いったいこんなことで、先行きどうなるのかね」

「さあ」

本山は、首をかしげた。小学校低学年の和夫は、桃園村へ行くと、まだ祖父が鉄を焼いたり打ったりするのを夢中で見ていたり、手伝ったりしている。おじいさんみたいに、鍛冶屋になりたいと口走ったりもする。しかし、もっと学年が進めば、夏休みでさえ遊んでいられなくなって、ペーパーテスト一辺倒の世界に引きずり込まれるのだろう。

「それにしても、われわれの世代は、すごい子供たちを育ててしまったものだとつくづく思うよ。いったい、なぜこんなことになってしまったのかねえ」

川上が詠嘆するようにいったので、本山はちょっと考えてから答えた。

「部長がさっきいわれたように、成功は失敗のもとの応用編じゃないでしょうか」

「どういう意味だい」

「むずかしい試験を通った人間が社会の上層に登れる制度は、すごく公平で良いと思います。実際、今の世の中で、家柄や身分で社会的な地位を決めていたら、産業国家としては二流にしかなれないでしょう。

昭和敗戦後の日本では、それまでの古い制度をこわして、かなり平等な社会を作りました。進学率も高くなって、高校までは行くのが当たり前、女性でも大学を出るのもそれほど特別なことではなくなり、大学によっては女子学生の方が多くなりました。日本が世界でも有数の大工業国として成功したのは、明らかに高い教育水準のおかげですよ。でも、工業国

としては発展途上国だった時代の成功体験が、これほど成熟してしまってからも通用すると思ったら大間違いだと思います。

今日の午後、大下専務がおっしゃったように、今の若い連中は、生まれた時から贅沢を贅沢とも思わずに育った世代でしょう。ほとんど何もない時代に生まれて、自分ですべてを作ってきたわれわれの世代と同じような方法でかれらの教育をやっても、うまくいきっこないと思いますけどねえ」

「なるほど。そういわれるとその通りだ」

川上部長は、うなずいた。

「工業国として発展していた時期の日本の産業は、当時の先進国をお手本にしていればよかった。いくら偉そうなことをいっても、発展期の日本を支えた主な製品は、欧米ですでに商品化して売れていたものばかりだったからね。

もちろん、ただまねをしただけじゃない。日本人独特の器用さで、使いやすくしたりうんと小型化したり、故障しないように改良を加えたりはしたけれど、日本人のアイデアだけで出発して、開発のリスクを背負いこんでゼロから売り出した製品は、ほとんどない。

だから、明治の帝国大学創設以来、日本の教育は、よそにあるお手本を見て上手にまねられる人材を養成するのが目的だった。なまじ独創性などを発揮されると、リスクが多くなるばかりか開発費がかかって厄介だから、あまり個性的ではない安全確実な人間が大勢ほしか

ったんだ。

昭和敗戦後は、もと帝国大学の教授でさえ、あまり独創的な研究をすると、財界幹部に呼びつけられて、金は出すからよけいな研究はやめるように説得されたそうだ。すでにできることがはっきりわかっている先進国の特許を買って、その一歩前に進んでくれというわけだ。

独創性をつぶすこういう方針のもとで、日本の学校は、整然と働ける画一的かつ無個性なサラリーマンの大群をどんどん社会に送り出したから、日本は、世界中の人が目を見張るほど成功して、三十年ぐらいで欧米に追いついてしまった。もちろん、われわれもそうやって送り出された個性のないサラリーマンの一人さ。

追いかけていた時は、なまじの個性なんてない方が良かった。しかし、追いついてしまえば、個性のない集団から新しいものは生まれない。同じ能力が、時によってプラスにもマイナスにもなって、成功の原因と失敗の原因が同じであり得るから恐ろしいんだな。

個性を育てる教育をしよう、なんていうスローガンがあったのは覚えているけれど、日本の社会では、本当に個性的な人間なんてすぐにはじき出され疎外されてしまう。

うちのせがれどもが、受験に役立たないことはすべて無駄ときめつけて、受験参考書を暗記して有名大学に入ることだけを人生の目的みたいにしているのも、画一的サラリーマンを求める日本の社会に従順なだけなのかもしれない。われわれが、目尻をつり上げて背中を見

せながら、自分の子供を育てたんだ」

「そうですよ。ぼくは、これは教育の問題というより、日本人の国民性だと思います」

本山が断言するような口調でいうのを聞いて、川上は笑った。

「ばかに自信たっぷりだな」

「ぼくは農村の出身だからよくわかるけれど、日本式の農業社会では、村の中の助け合いが何より重要です。昔ふうの田植えをするんだって、みんなが個性を発揮してばらばらに植えたのではうまく行かない。田植えの適期は限られているから、みんなで助け合いながら一斉に始めて、整然と植え進んで行くのがもっとも効率がいい。

日本の工業だって、欧米の製品というはっきりした目標があって、それに向かって工業のあらゆる分野で助け合いながら、田植え式に一斉に進んだから成功したんですよ。ぼくは、歴史のことをよく知らないから、西洋人が牧畜の民だといえるのかどうかわからないけれど、放牧時代の牧畜民は、家畜を追ってせいぜい家族単位ぐらいで新しい牧草地を探しながら移動したっていうんでしょう。

もしそうなら、田植えの発想を牧畜型に切り換えるのは、相当むずかしいのじゃないですかねえ」

「でも、もう半世紀以上も工業国をやっているんだから、そろそろ田植え式を卒業しないとやっていけないだろう」

「田植えは、縄文時代末期からやっていたそうですから、五十年や百年ぐらいじゃ変わらんでしょう。今さら急にアメリカ人やフランス人やドイツ人のようになれといわれても、無理だと思います。こちらの歴史の方が、ずっと古いのですからね」

「それじゃ、日本の工業は、これからどうなるんだい」

かなり酔いの廻った川上が真剣な顔で尋ねたので、本山は、笑った。

「そんなことわかれば、株でも買っておきますよ」

＊＊＊

「昔のサラリーマンは、気の合う同士が会社の帰りに酒場に寄って、こんなふうにおしゃべりをしては、うさ晴らしをしたものだ」

本山長老は、昔を懐かしむようにいった。

「普通は、翌朝には何をしゃべったか忘れてしまう程度の軽い話ばかりだが、この日に川上部長と話した内容は、妙にはっきり思い出せる。大体、この頃を境にして日本の工業力がじわじわと衰えていったからだろうか。

といっても、何度もいうように、ある日何かが起こって急に変化したのではない。アラン工業も、これで開発力がいきなり低下したというわけでもなく、一進一退という感じでそこ

そこの利益は上げ続けた。

しかし、たとえ私のように健康な老人でも、年をとれば老衰がじわじわと押し寄せる。どことといって具合の悪い部分はなくても、体全体は確実に弱っていく。三年前には平気で持ち運べたものが、重くて運べなくなって愕然としたりする。

今考えると、それと同じように工業国としての日本の国全体の弱体化が進行していて、われわれも、うすうすそのことに気づいていたのだろうな。

さて、少しくたびれたから、今日はこのあたりまでにしよう。何か質問はないかな」

長老は、そういって言葉を切り、聴衆の顔を見廻した。

東京が暑かったわけ

同じ方向に帰る晴彦としおりは、本山長老を自宅まで送った。孫の明夫ももちろんいっしょである。長老は、足がしっかりしていて、勝手のよくわかっている夜道をさっさと歩いて行くが、真っ暗なので、提灯を持った三人がまわりを囲むようにして帰った。

「それじゃ、またあさってお願い致します」

別れぎわに、しおりは、本山老人の前で丁寧に頼んだ。

「ああ、しゃべっているうちに若い頃のことをだんだん思い出して、楽しくなった。そのうちに、話すのにも慣れてもっと要領が良くなるだろうから、聞いて下さる人もわかりやすくなるだろう」

長老は、上機嫌だった。聞き手が非常に熱心で、続きを催促されたのが嬉しかったのである。晴彦も、自分の生まれるはるか前の時代の日本に生きていたサラリーマンという大勢の職業人の生態がわかって、満足していた。

何百万人という大勢の人が狭い空間に押し込められるようにして暮らしていたという、か

つての東京での生活にも関心はあったが、今となっては、その巨大都市が廃墟になっていく過程の方に興味があったので、今夜の話の続きが早く聞きたかった。

本山家の前で長老と明夫に別れてから、晴彦としおりは、織田家の隠居所へ帰った。ここ二、三日、晴彦はおそくまで家の仕事に追われていたので、泊まりに来ていなかったのだ。

「本山のおじい様のご機嫌が良くて、ほっとしたわ」

しおりは、嬉しそうにいった。

「とても面白かったよ。それに、みんな、ずいぶん熱心に聞いていたもの。話のあとの質問に対する答えも面白かったし……」

「でも、お年がお年だから、お疲れにならなければいいんだけれど。桃園学舎のために病気になられたりしたら、わたしとしては立つ瀬がないから」

しおりは、囲炉裏の火種を掘り出して紙屑に点火し、慣れた手つきで細い枯れ枝を燃え上がらせた。嬉しいと同時に少し心配なのだ。

「落ちついた人だから特に興奮した様子でもないし、健康には影響ないと思うよ」

「そうならいいけれど……」

囲炉裏に火を焚きつけたしおりは、顔を上げた。

「晴彦ちゃん、お風呂沸かして入ったら？　さっき、出がけに火をつけておいたから、すぐ沸くわ」

「そうかい」

晴彦は、浴室へ行って湯に手を入れてから、土間に降りて風呂の焚き口の前に座った。しおりは、囲炉裏の火にやかんをかけてから寝室へ着替えに行った。

――昔の都会の夏って、恐ろしく暑かったらしいな――

とろとろと燃えはじめた火を見ながら、晴彦は、一時間たらず前のことを思い出していた。

最初に長老に質問したのは、町田の太郎だった。

「夕方になっても、温度が三十度以上もある暑い日だった、とおっしゃいましたけれど、昔の東京はそんなに暑かったのですか。ぼくは、二年前まで東京にいましたが、真夏の昼間はやはりがまんできないほど暑かったです。でも、日暮れに近づくと急に気温が下がって、薄暗くなると肌寒いほどのこともありました。

もっとも、最近は、ほとんどどこへ行っても草ぼうぼうですけれど」

長老は、うなずいて答えた。

「私は、もう二十年近くも東京へ行ってないが、草ぼうぼうになっているのなら涼しくても当然かもしれない。昔の都会の暑さは、自然の暑さというよりかなり人工的な暑さだったからだよ。

最近は、冬になると、囲炉裏で石を焼いて熱くしておき、蓙とぼろにくるんだのをこたつ

代わりにして寝る人がいるだろう。これは、昔からやっていた温石（おんじゃく）という方法で、熱しにくいが冷めにくい石の性質を利用している。

昔の大都会は、全体が温石みたいなものだった。とにかく、ビルを建てるのが土地の有効利用で経済発展の基礎になるとかいって、到る所に高いビルつまりでっかいコンクリートの塊を建てまくった。コンクリートは人工的な石だから、冬になると冷え切ってしまうが、春から夏へかけての太陽熱でじわじわと焼かれれば、おいそれとは冷めない。

適当に暖まった頃、真夏になって焼けつくような太陽で一日あぶられると、本当に温石のように熱くなるから、夜になっても熱を発散し続ける」

若い女性が、不思議そうに尋ねた。

「そんな焼け石みたいになったビルの中で、昼間はどうやって暮らしたのですか」

「何十階というビルの中では、階段を歩いて上下することもできないから、いつもエレベーターが上下している。これも、電気モーターで吊り上げているのだから、かなりの電力を消費して熱を出す。また、大きなビルの中では、窓から遠い所は昼間でも暗いから、いつでも電灯がいっぱいついている。これも、かなりの熱を出す。

しかも、高層ビルでは窓が締切りになっていて、風も通らない。もちろん、これでは、暑い季節はとても仕事ができないから、冷房ということをした。大きなビルは、最初からその設備がしてあるのだが、熱を運び出す特殊な冷房用の機械を使って、ビルの中の熱をビルの

外へ放出するのだ。

面倒なりくつはどうでもいいが、この機械はポンプの一種で、熱を吸収したり発散したりしやすい物質をポンプで循環させて、部屋の中をどんどん冷やした」

「でも……」

その女性は、心配そうな表情になって素朴な質問をした。

「ビルが焼けるほど熱いのに、その熱をまた外へ無理に押し出せば、ビルがどんどん暑くなって溶けてしまわないでしょうか」

「コンクリートは、そう簡単には溶けやせん」

長老は愉快そうに笑ったが、すぐ真剣な表情になって答えた。

「しかし、溶けはしないまでも、一日中太陽で焼かれた巨大なコンクリートの放つ熱と、その中の熱をポンプで汲み出して外へ放出する熱とで、東京のような巨大都市の気温はぐんぐん上がった。熱の島、ヒートアイランドとカタカナ英語で呼んだほどだ。

もちろん、冷房用の電力を起こすために、東京からはるか遠くのどこかにある発電所では、巨大な発電機が膨大なエネルギーを消費して熱を放射しながら廻っていたから、極端にいえば、日本中が大都市を冷やすために熱くなっていたのだ。

二十世紀の末から二十一世紀のはじめ頃には、東京の都心の気温と、三、四十キロも離れた場所の気温では、五度も六度も違うというほどになってしまった。しかも、温石みたいに

なったコンクリートが、夜も熱を放出し続けるから、明け方でさえ三十度近くもあるという、焦熱地獄みたいなありさまだった。

ところが、東京時代は、電力も安くて、どこの家にも冷房の機械があったから、暑ければ暑いで、夜中も冷房機を動かし続けた。だから、外の気温はますます下がらない。かなり大規模な悪循環だった」

「何だか、すさまじい世界みたいですね」

晴彦が、思わずいった。

「ああ、真夏の東京は、すさまじい世界だったよ」

本山長老は、苦笑した。

「今は、ビルのことばかり話したが、そのほかに何十万台という自動車が、道路を埋め尽くすほどに走っている……というより、あまり混みすぎていて早く走れないから、ちょっと走っては止まるのを繰り返していた。

もちろん、自動車は石油燃料を燃やして走っているのだから、その分だけ気温も上がるし、空気も汚れる」

「なぜ、そんなすごい所に大勢の人が集まって住んでいたのでしょうか」

誰かが、不思議そうに尋ねた。

「大都会には悪い面も多いが、人が大勢いれば便利になるし、仕事の種類も多いから、自分

の気に入った職種を選べる。

そうそう、古い雑誌を見つけたので持って来たから、見てごらん」

本山長老は、紙が黄色くなった古い大きなグラフ雑誌を広げて見せた。

「東京の繁華街には、こんなふうに何百軒もの大きな店がぎっしり並んでいて、世界中の商品を売っていたから、どんなものでも金さえ出せば手に入った。今の若い人には、想像もつかないほど便利だったから、みんな都会へ出たがった……というより、東京時代の政府は、なるべく大勢の人を都会へ集める政策をとった。

だから、農民も都会の労働者になるために村を捨てざるを得なくなり、農村人口は極端に減って、農村での生活そのものが成り立たなくなりかけていた。

私だって、桃園村を捨てて東京へ出るほかなかったのだからね」

若者たちは、前の方に座っていたので、今では消え失せてしまったかつての日本の大都会の繁栄ぶりを写したカラー写真のページを食い入るように見詰めた。

桃園村にも、商店がないわけではない。桃園学舎より百メートルぐらい東側には、村の〈繁華街〉があって、商店が三軒ある。商店といっても、農家が片手間に営業しているような店だったが、薬のほかに、自分で手作りできないような雑貨、布類、文房具、調味料などを売っている。

十キロほど離れた園田市には、二、三十軒の商店があって、桃園村の普通の若者たちにと

っては、これが現実に接する最大の町だった。だから、古い雑誌で見るかつての東京の繁華街の規模は、村の若者の想像をはるかに越えていた。

数百軒もの大きな商店が広い道路の両側にぎっしりと並び、その前を人々が大勢歩いている。しかも、道路には無数の乗用車が、ぶつからないのが不思議なほどの間隔で走っているのだ。

若者たちのざわめきが静まるのを待って、長老はいった。

「私は、もの心ついてからでも八十年以上になる。私の父の世代の人にはかなわないまでも、社会の大きな変動を経験した。

その経験からいえるのは、どんなことでも、一方的に良いだけということはあり得ないということなのだ。高いビルを建てれば、狭い土地に大勢の人が住める。ビルを建てることによって、経済は発展して豊かになれる。

それが良いことは確かなのだが、けっして無から有は生じない。今話したように、膨大な電力を使う必要があって、さまざまな厄介な問題が起きる。しかも、暑いからといって冷房をすれば、それが原因になってさらに暑くなる。つまり、問題を解決したつもりでいると、その解決がまた新しい問題の原因になるという具合に、まるで底無し沼に落ち込んだように、次から次へと新しい厄介な問題が発生するのだ。

今考えると、東京時代は、そういう目先の合理性ばかりを追求しすぎていたような気がす

るね」

それを聞いて、また誰かが質問した。

「東京時代は、その底無し沼に落ちて終わったのですか」

「いや。東京時代が終わった原因は、それほど単純ではない。

さっき話したように、東京時代の繁栄を支えたのは、みんなが揃って同じようにきちんと働ける均質の国民性だったが、工業が発展してある段階に達すると、今度は、その国民性が工業の進歩にブレーキをかけてしまったのだな。でも、大刷新が成功して、こういう穏やかな世の中になったのも、同じ均質の国民性のおかげだと私は思っている。

この世では、一方的に良いだけのことはないのだよ。あらゆることがあらゆることと複雑に関連し合っているから、その一部だけを取り出して、人間のつごうだけに合わせて突出させれば、いずれはどこかにしわ寄せがきてひどい目にあうことがわかったのも、東京時代の大きな収穫だった。

大刷新の時期は、繁栄した東京時代を裏返したような反省と縮小の時代だったが、東京時代の苦い経験があったからこそ、発想を変えられたのだと思うよ」

聴衆は、静まり返って聞いていた。

――あさっての話が楽しみだ――

晴彦は、威勢良く燃える風呂釜に薪を足しながら思った。

「晴彦ちゃん。そんなにくべて、熱くならない？」
いつものように、洗いざらしの白っぽい軟らかな浴衣に着替えた上に半纏を羽織って戻って来たしおりが、晴彦の後ろで立ち止まって尋ねた。
「う……うん。大丈夫だよ。ぼくが先に入って水で埋めておくから……」
辻褄の合わない返事をして、晴彦は立ち上がった。

しおりが風呂から上がると、いつものように二人のささやかな酒宴が始まった。
自家製の漬物と晴彦の叔母が作った鶏肉の燻製を皿に盛って出してある。夕食は、桃園学舎へ行く前にそれぞれ自宅で済ませているから、あとは少し飲んで寝るだけだった。
「ねえ、晴彦ちゃん。本山のおじい様の話、本当のところどう思った？」
しおりが、少し心配そうに尋ねた。眼鏡をはずしたままの湯上がりの顔が、電灯と囲炉裏の火に照らされて、古い隠居所の黒ずんだ壁を背景に白く浮かび上がっている。
まるで、浮世絵で見た洗い髪の女性のようだと、晴彦は思った。
「とても面白くて、あさってが楽しみだよ。ほかの人もずいぶん熱心に聞いていたし、質問もずいぶん出て、ぼくもいろいろなことがよくわかった」
「そう。それなら良かったわ。せっかく話していただいたのに、聞きに来た人がいやいやながら義理でつきあっているようじゃ困るもの」

「その心配だけはない」
晴彦は、自信たっぷりにいった。
「実をいうと、さっきは、風呂を焚きながら東京の夏が暑かったという話を思い出していたら、つい薪をくべすぎてしまったんだ。
桃園村も夏は暑いし、暑くないと稲の生育が悪くて困るけれど、夕方になると涼しくなるし、夜中は、網戸にしておくと寒いぐらいだろう。年によっては、ひと夏に一晩や二晩ぐらいちょっとむし暑い時もあるけれど、明け方は確実に涼しい」
「そう。夜中になっても三十度なんて、考えられないわ。でも、あちらはコンクリートの塊。こちらは、家は木造で、家のまわりは雑木林で、その先は水田なんだから、涼しくて当たり前ね」
しおりは、燻製をちょっぴり食べてから、小さな盃で一杯飲んだ。
「東京時代のように、機械のボタンを押すだけで電気が何でもやってくれるわけじゃないけれど、何もしなくても涼しいんだから、これはこれでいいじゃない」
「ぼくも、そう思う。この世に、一方的にいいだけのことはない、っていう長老の考えは、まったく本当だと思う。植物相手に農業をやっていれば、そのことはいやでもわかってくるからね。
真夏でも電力をふんだんに使って室内を冷やせば、巨大都市全体の気温が上昇し、そのた

めにまた余計な冷房用の電力が必要になるはずだ、という単純なりくつがなぜ予想できなかったのか、今考えれば不思議というほかない。二十世紀の後半になっても、人類の頭の程度は十九世紀の素朴な科学技術万能思想からほとんど進歩していなかった、というのが本当のところらしい。

しかも、さらにその上に、二十世紀独特の経済成長最優先という新しい発想がくわわったのだから、東京時代の日本が恐ろしいばかりの悪循環に陥ったのも当然だった。

なるべく狭い土地にできるだけ大勢の人を住まわせるべきだ、ロンドンやパリでは何百年も前から住宅の高層化が進んでいた、それなのに遅れている日本では……という、例によって例のごとき論法がまかり通って、せいぜい二階屋しかなかった地域まで八階、十階のビルを建てまくったのはいい。

だが、日本はイギリスでもフランスでもなかった。

真夏は熱帯なみか、それ以上の高温多湿の気候になる国だ、ということに気づかなかったのか、地代を引き上げてコンクリートの売上を増やすために気づかないふりをしていたのかはともかく、大都会では本当に必要な量の何倍ものエネルギーを消費しないと生活できない状況に追い込まれてしまったことだけは確かだった。

これに対して、当時としては人口、面積とも世界一の巨大都市だった江戸では、冬の間こそ薪炭の使用量が増えたが、夏になれば、炊事用以外の熱源を使わなくなる。もちろん、それだけ気温を押し上げる原因が減るし、建造物は、一部の土蔵以外は全部木造だったから、温石のような保温作用がない。しかも、江戸の中心部は水路が発達していたから、いくら暑い季節でも、夜になれば気温が下がる。最低気温が二十五度以上のいわゆる熱帯夜になることはまずなかった。

膨大なエネルギーを使って一晩中暑い思いをするのもばからしい話だが、その暑さから逃れるために、さらにまた膨大なエネルギーを使い、結果としてまた気温を上げるのが高度の文明だとすれば、人類はいったい何のために努力していたのだろうか。

「最近、ぼくは堀江さんといっしょに油絵を描いているだろう」

晴彦は、しおりの顔を見ながらいった。

「あの人は、東京時代が大好きなんだ。というより、東京時代の思い出を徹底的に美化して、今がいかにみじめな時代かという話をさんざん聞かされる」

「わたしも聞いたことがあるわ。昔、コンピューターを使う仕事をしていたというのが、何よりのご自慢で、泥で手が汚れる百姓仕事なんて最低だっていうんでしょ。

そんな話ばっかり聞かされるから、最近じゃ若い人があまり寄りつかないのに、晴彦ちゃんだけがまともに相手をしてくれるものだから、堀江さんは嬉しいのよ」

「東京時代がどんなに素晴らしかったとしても、行き詰まってどうしようもなくなった結果として大刷新が起きたことは誰でも知っているのだから、聞いていると少しいやになるけれ

ど、とにかく、上等の油絵具や画材をふんだんに使わせてもらえるから、話を聞くぐらいどうってことない」

「ふふっ」

しおりは、晴彦に寄りかかるようにして顔を見上げながら笑った。

「本山のおじい様の今日のお話によれば、けっして無から有が生じることはないそうだから、晴彦ちゃんだって、油絵具をただで貰ったりすればろくなことにならないわ。

でも、みんなが煙たがる堀江さんの話相手をして使わせてもらっているのだから、ちゃんと代償を払っていることになるのかな」

「ぼくの場合は、代償を払っているのかどうかもわからないな」

晴彦は、首をかしげた。

「そりゃ、たまには腹も立つけれど、堀江さんの話は、それなりに愉快だからね。次から次へ昔の良かった話をしてくれるから、これがけっこう面白いんだ。ただ、最後には、東京時代はとても豊かだったから、人間も賢くて立派だったというところに落ちつくのが玉に傷でね。下手な落語を聞かされてるみたいでつまらない。

ぼくは、堀江さんと論争する気はないから、いつもは黙っているんだけれど、先週いっしょに絵を描いた時、昔の人は小学生でも夜中まで勉強して、そんなに利口だったというのに、なぜ偉い人がみんなでこんな不便な世の中にしてしまったのですか、って質問してみた

んだ」

「堀江さん、どんな返事をなさった？」

「なんだかわけのわからないことをいって、ごまかしてしまったよ。

ぼくが思うには、堀江さんみたいなタイプの人は、そんなに光り輝いていい東京時代が、長続きせずに終わってしまった理由なんて、考えたこともないんだ。目先さえ良ければ、遠い将来がどうなろうと気にしないんだね。あれがきっと、典型的な東京時代の発想なんだ」

「さっき、桃園診療所の原田先生が、江戸時代と東京時代の違いについて質問なさった時に、本山のおじい様は、面白いことをおっしゃったわね」

「うん。あれも面白い問答だった」

「私の家は、江戸時代の末、天保年間から祖父の代までこの村で医者をやっていて、父の代に村を離れましたが、私の代になってまた戻って参りました。祖父が、古いことに関心のある人だったもので、昔の記録類もいくらか残っております。

最近、これを引っ張り出して、祖父がつけておいてくれたふりがなを頼りに読んでおりますが、大刷新後の今のわれわれの生活は、江戸時代によく似ているように思います。本山さんは、どう感じていらっしゃるのでしょうか」

と、原田医師が尋ねた。

「さて……ね」

本山は、少し困ったようにいってから、すぐに言葉を続けた。相手がいつも健康診断してもらっている先生なので、ずっと年下ながら言葉づかいも少し丁寧になった。

「私が生まれたのは、江戸時代が終わって百年近くたった頃なもので、そんなに古いことは知りません。でも、子供の頃の桃園村には、まだ江戸時代の風習も色濃く残っていましたし、古い水車も一基だけ動いていました。

確かに、最盛期の東京時代に比べれば、今の方がずっと江戸時代に似ている。しかし、考えてみればむしろ当然でしょうな。廃村になりかけていた東京時代と違って、今では、村の人口も江戸時代とほぼ同じで、しかも江戸時代と同じように、ほとんど全部が農民です。

私の家は、三百年前からこの村の鍛冶屋だが、それでも自分で食べる米や野菜は作っていましたから、半工半農というところでしょう。商店も、昔から何軒かあったが、やはり農業と兼業の半商半農だったから、その点では、はっきり先祖返りしたといっていいでしょうな」

原田医師は、うなずいた。

「私の家も、医者ではありましたが、わが家の記録によれば、やはり自分の畑を持っていて、野菜だけでなく薬草をいろいろ栽培していたと書いてありますから、半医半農とでもいったところでしょうか。

それに、畑でできない薬草を採集するために山の中を歩き廻って探したという記録もありますから、昔の田舎の医者は、ある程度は薬まで自給自足していたようです。昔の医者に本草学（植物学）の知識が必要だったこともよくわかります」

「はじめて聞きましたが、それは面白い話だ」

長老は、大いに感心したようだった。

「技術者だった私の目で見て、大刷新後のわれわれの生き方が江戸時代に非常に似ていると思うのは、何より、ほとんど自給自足の生活に戻った点です。

東京時代が便利だった理由は、工業製品を輸出した金で外国から買った大量の石油を使えたからにほかならない。あらゆる便利な道具や、さっき話した冷房も、何十階のビルの上まであっという間に登れるエレベーターも、ほとんど石油や石炭を燃やす熱を利用して動かしていた。

ところが、燃やしてしまった石油や石炭は、もう二度ともとに戻ることはない。空気を汚すだけで、使ってしまえばおしまい、という所が最大の弱点でした。

これに対して今の桃園村なら、村の中で使っている限り、薪がなくなるなどということはあり得ないし、燃やしてできる炭酸ガスは、植物の炭酸同化作用でまた植物の体に戻ってしまう。

今の電力は、電気代が高いから電灯にしか使わないけれど、これも、地域の八ヵ村で共同

運営している小規模な水力発電だから、まあまあ半永久的なエネルギー源といっていいでしょう。それに、発電機の電気部分はコイルだから故障することはほとんどないし、機械部分の故障なら、私程度の鍛冶屋でも修理できる部分が多いから、ほぼ完全に自給自足のエネルギー源です。

食べ物については、皆さんの方がよく知っているから、今さら説明するまでもないが、これは、ほとんど完全に自給自足が成り立っています。

水は自分の家の井戸で汲むし、米も野菜も芋も豆も充分に取れる。鶏を飼っている家も多いし、一部の農家では稲鴨を育てて、この肉は近在の村から買いに来るほど生産量があります。小物川の魚も、最近ではずいぶん増えた。強いていえば、桃園村には海がないから、よそから買わなくてはならないのは、塩だけでしょう」

「そうそう」

原田医師は、勢い込んでいった。

「私の家に伝わっている古文書を見ても、このあたりの村々はかなり豊かで、江戸時代からほとんど自給自足ができたようです。外から買い込んだのは、普通の農家なら、干鰯のような肥料と、古着や陶器のようなごく限られた品物だけだ、などと書いた日記があります。自給自足の能力が回復したという点でも、現代と江戸時代はよく似ているといっていいのではないでしょうかね」

「まったくその通りですよ、先生」

本山老人は、嬉しそうにいった。

「東京時代の日本は、確かに世界有数の豊かな国ではあったけれど、あの頃の日本人は、生活に必要な資源の大部分を外国に頼っていました。表面的には安定しているようでも、内側はいつ崩壊しても不思議でないような状態になっていて、実にもろい社会だったことが今ではっきりわかっています。

だからこそ、ちょっとつまずいただけで、次から次へと破綻が拡大していって、ついには大刷新をせざるを得なくなったのです。

その点、今の桃園村というより、今の日本は、東京時代とは比べものにならないほど貧しくなってしまったけれど、それは表面的な経済の指数だけのことで、実質は、東京時代よりはるかに健全で安定しているのではないでしょうか」

「医者としてもそう思える面が多いのです」

原田医師がいった。

「私が医学生の頃に習った厄介な病気の中には、ここ二十年ぐらいの間に非常に減って、最近ではほとんどかかる人がいなくなってしまったのが多いのです。たとえば、小児成人病。これは、十歳ぐらいで、肥満、高血圧、糖尿病などにかかるのですが、私の場合、医者になりたての頃に診察したわずかな経験があるだけで、今の桃園村の子供には、一人もおりませ

ん。

東京時代には、日本人の四人か五人に一人が苦しんだというアレルギー性の患者さんも、最近ではほとんどいなくなりました。また、東京時代を通じて、男性の精子の数が半分以下に減ってしまった、という研究もあります。文明社会のストレスという説も、現代文明が空気や水の中に放出した怪しげな化学物質のせいだという説もありますが、先進国の人口が減った原因の一つだということになっています。

しかし、考えてみれば、これは当然でしょう。猿人が立って歩くようになってから四百万年。人類の肉体がほぼ今と同じような構造になってからでも十万年以上もの時がたっているのに、近代文明の歴史はせいぜい百年ぐらい。文明の進歩を十倍ぐらい加速するのは簡単でも、人間の肉体はそう簡単に進化しませんから、急速に変化する便利な近代文明に適応できるはずがありません。

私が医大で教えを受けた先生方は、東京時代の最盛期から末期にかけて臨床医として活躍された年代の人が多いので、当時としての現代病の厄介な症状がどんどん増えるのに苦労されたようです。

ところが、日本が貧乏になっていく時代に医者になったわれわれは、ややこしい病気が減る状況しか知らないのです。最近は難病の患者さんがほとんどいなくなってしまったので、せっかく習った知識が役に立たないのは、本当に残念でたまりません……なんていっては、

不謹慎すぎますかな」

普段は無駄口を叩くことのない原田医師が珍しく冗談をいったので、聴衆はどっと笑った。

「東京時代の輝かしい文化って、いったい何だったんだろう」

晴彦は、ひとり言のようにいった。

「子供の頃から、遊ぶ代わりに受験塾へ行き、大人になっても、近所の畑へ行く代わりに電車で二時間もかかる会社へ行き、ビルの中に座ってコンピューターを操作して、歩く代わりに自動車を運転して、結局はややこしい病気になる人が多かったとすれば、文化というよりアンチ文化というのにふさわしい」

上機嫌なしおりは、晴彦がわけのわからないことをつぶやくのを相手にせず、陽気な声で尋ねた。

「ねえ、晴彦ちゃん。原田先生の家にそんな古文書があるなんて、知ってた?」

「もちろん、はじめて聞いた」

「今度、桃園学舎でその話をしていただきましょうよ。本山のおじい様の話が終わったら、頼みに行こうっと。

晴彦ちゃん、もう少し飲まない?」

「それより、もうそろそろ休もうよ」
少し眠くなってきた晴彦は、しおりの肩を抱き寄せながらいった。
「ええ……」
しおりは、うなずいて頬を押しつけた。
「もっと、強く抱いて」
体中の血がたぎるように感じながら、晴彦は、しおりの暖かくてしなやかな体を抱き締めた。堀江が何といおうとも、文明のストレスや化学的汚染で精子が半分に減るような生活より、今のこの素朴な生活の方がずっと良い。
晴彦は、心の底からそう思った。

貴族国家

「みなさん。これが何か知っていますか」
本山長老は、右手に持った一枚の紙を顔の前でひらひらさせながら質問した。
今日の桃園学舎には、前回よりも大勢の人が集まっている。大刷新という言葉だけは誰でも知っているが、なぜ世の中がこんなふうになったのか、誰もよく知らない。実際にその中を生き抜いてきた九十歳近い長老が、大刷新前後の様子をくわしく話してくれるという前評判は聞いていたものの前回参加しなかった人までが、噂を聞いて詰めかけて来たからだ。
「それは、東京時代の一万円札ではありませんか」
七十歳ぐらいの老人が答えた。
「そうです」
長老はうなずいた。
「法律上は、今でも紙幣として通用しているのかもしれないが、たぶん、これを持って行っても誰も何も売ってはくれないだろう。

しかし、最盛期の東京時代では、これが世界最強の通貨だった。日本の紙幣を持って行けば、世界中どこでも何でも買えたし、世界の大半の国では、これ一枚あれば一ヵ月の間ぜいたくな暮らしができるほどの値打ちがあった」

聴衆は、それを聞いてざわめいた。

「そんな紙が、なぜ世界中でお金として通用したのですか」

前の方に座っていた青年が質問した。

「その頃の日本人は、世界中の人がほしがるような良い製品を安く作っていた。日本の紙幣を持っていれば、現実に日本製の自動車やカメラや便利な電気製品などが買えたから、日本のお金に値打ちがあったのは当然で、外国通貨をうんと出さないと日本の金と取り換えられなくなってしまった。

しかも、そういう便利な機械をどんどん外国に輸出したのだから、世界中のお金が日本に集まって、ますます日本のお金の値打ちがでる。結局、この紙幣は世界中どこのお金とも有利に交換できる強い通貨になったのだ。

東京時代後期の日本には、一人当たりの収入が世界一多くて、世界でもっとも豊かな国だった時期があったことを覚えておいてほしい。

だから、その頃の日本では、親や祖父母の時代なら、貴族とか上流階級とか大金持とかいうほんの一握りの特権階級でなくてはできないような生活が、ごく普通の庶民でもできるよ

うになっていた。

たとえば、昭和初年なら、外国へ行くのは特別な人に限られていた。昭和三十年代でも、学生が外国へ行くのは夢だったそうだが、二十世紀の末には、夏休みに家族連れで外国へ遊びに行くぐらいごく普通で、並のサラリーマン家庭の子が、海外旅行や留学をしても話題にもならない。家には、便利な電気器具があふれていて、子供の部屋に冷房機や専用のテレビや電話やコンピューターがあって当たり前という恵まれた世の中だった。

食べ物も、あり余っていた。

東京時代の最盛期だった一九八〇年代に、当時の農林水産省が発表したデータによれば、日本人に対する一日当たりの食料供給量は、約二六〇〇キロカロリーだったのに対して、食料摂取量は、約二一五〇キロカロリーだった。その差の四五〇キロカロリー分は、どうやら残飯として捨てていたらしい。

四五〇キロカロリーを当時の人口の一億二〇〇〇万倍し、さらに三六五倍すると、ざっと二〇兆キロカロリーというとてつもない数字になる。この食品熱量を米に換算すれば、ざっと五五〇万トン。今の日本の人口のほぼ半分、三千万人以上の人が一年間食べられる量を、毎年捨てていたことになるのだ」

長老は、いかにも技術者らしい計算をしてみせた。東京時代の人が、大量の食べ物を捨てていたと聞いて、若者たちは顔を見合わせてざわめいた。その様子を見ながら、本山長老は

続けた。

「食べ物から雑誌まで扱っているコンビニエンスストアという便利な店があって、弁当もいろいろな種類のを売っていたものだが、一定の時間がたった古い弁当は捨ててしまって、新しいのを仕入れた」

「あの、本当に、ご飯を……捨てたのですか」

すぐそばでノートを取っていたしおりが、おびえたような声で尋ねた。大刷新後に生まれた日本人には、食べ物を捨てる、とりわけ、自分たちが苦心して作った米の飯を捨てるなどという恐ろしいことは、考えることさえできなくなっていた。食べ物を粗末にするとバチが当たって恐ろしいことになる……もったいないという感覚は、日本人の間に完全に根づいていた。

「そうだ」

と、長老はうなずいた。

「大刷新以前の時代は、そんな世の中だった。

東京湾の埋立地には、残飯が山のように捨ててあったし、ホームレス、つまり家がなくて大都会の地下道などに住んでいる人でさえ、栄養過剰で糖尿病どころか痛風になるほど豊かだった」

「私は、この年まで医者をやっていて、まだ糖尿病の患者さんを三人しか診たことがありません。今では非常に珍しい病気です。恥ずかしながら、痛風は、医学生の頃に教授が診察されたのを一度横で見ていただけです」

と、原田医師がいった。

「そうでしょう。今の世の中では、あんなぜいたくをしたくてもできませんからね」

長老は、原田医師の方を見て笑ったが、すぐに続けた。

「とにかく、その頃の日本人の最大の悩みは、太ることだった。皆さんなら、太りたくなければ、食べなければいいと思うだろう。ところが、うまい食べ物がこれでもか、これでもかというように目の前にあって食欲をそそる。しかも、口当たりが良いだけじゃなくて、カロリーが高い西洋式の食品が多かった。

それでも、今のわれわれのように、どこへ行くのもてくてく歩き、体を動かしてせっせと働けばいいが、大部分の人は一日中デスクの前に座っている。おまけに乗物が発達していて、歩く機会がめったにないときているから、運動不足でぶくぶく太ってしまうのだ。当時は、テレビも雑誌も、やせる方法の特集ばかりやっていたような気がするね。

いずれにせよ、これだけ大量の食料を捨てて平気でいられたのだから、人類史上珍しい豊かな社会だったことは間違いないが、同じ頃の地球上では、大勢の人が餓死したり空腹をかかえて暮らしていたことを考え合わせれば、どう考えても当時の日本の繁栄ぶりがまともだったとは思えない。

しかも、そういう生活がぜいたくだとか異常だとか思う人はほとんどいなくて、日本には真の豊かさがない、ドイツではこういう豊かな暮らしをしているとか、フランスではどうだとかいって羨ましがっていたのだから、今考えると、本当にびっくりするような世の中だったというほかないね。

今日これから話すのは、ちょうどその繁栄の時代が終わりかけていた頃のことだ」

＊　＊　＊

「ねえ。あなた」

家に帰った本山が着替えていると、妻の礼子がそばへ来て小声でいった。

「和夫が、学校へ行くのがいやだ、っていいだしたのよ」

「またか」

どうして、こうも次から次へとやっかいごとが起きるのだろうと思いながら、本山はネクタイを取って礼子の顔を見た。

「そうなの。それで、今度は、おじいさんの所へ行って、田舎の小学校へ通いたいっていうの。大学なんて行きたくないから、おじいさんの後を継ぐって」

「和夫に、居間へ来るようにいいなさい。ぼくが話を聞くから」

「叱っちゃだめよ。当人は悩んでいるんだから」

心配そうな妻にうなずいて見せてから、本山は、着替えをすませて居間へ行った。すぐに、和夫が入って来たが、

「どうしたんだ」

と、尋ねても返事をせずにうつむいたまま突っ立っている。本山は、できるだけ穏やかな口調でいった。

「お父さんは、お前が学校へ行かないぐらいで怒ったりしないから、そこへ座ってわけを話してごらん」

肩で大きく息をしながらしばらく口をつぐんでいた和夫は、ふくれっ面で椅子に腰かけたが、やがて思い切ったようにいった。

「もう……いやなんだ。何もかもいやだ」

「またいじめられているのか」

またしばらくためらってから、和夫はうなずいた。

「何といっていじめるんだ」

「今度は、百姓、ドンビャクショウっていうんだ」

「うちは、先祖代々百姓なんだ。お父さんだって、大学へ入るまでは、おじいさんやおばあさんといっしょに百姓をしていた。人間の食べ物を作れるのは百姓だけなんだ。この世の中

に、百姓ほど立派な仕事はない。百姓でいいじゃないか。

しかし、なぜ和夫が百姓だっていわれるんだい」

「田舎のおじいさんの所で畑仕事を手伝ったら、とても面白かったっていったら、吉田のやつが、なんだ、お前んとこは百姓か、ってはやし立てて、それからみんなが、本山は百姓だ、泥くさいっていじめるんだ。

どこかの会社の偉い社長が、農業は土地をむだに使っているんだから、田圃や畑なんかつぶしてマンションや工場にした方がいい、っていったんだって。だから、百姓なんていない方がいいっていうんだ」

「何てことを……」

本山は、息子の顔を見ながら絶句した。

財界の大物といわれる人が、経営者のセミナーで、農業はただでさえ狭い土地を非効率的に使っている、と講演したということを本山も新聞で読んだ記憶がある。その時、これは、典型的な都会人、あるいは都会化した人の発想だと思ったものだ。

日本では、もともと土に触れることをいやしむ傾向がある。昔の天皇は、けっして土の上を歩かなかったそうだし、日本で映画の撮影が始まった当時、桧の板でできた舞台の上でしか演技をしない歌舞伎役者たちは、地面の上でも演技をする映画俳優のことを土くさい〈土役者〉といって軽蔑したそうだ。

とすると、今の日本人は、庶民までが中流を通り抜けて貴族化あるいは上流階級化したため、土に触れる仕事を軽蔑しているのかもしれない。そこへ、さらに経済効率という基準を持ち出されては、農業の立つ瀬はなくなってしまう。子供の世界も、こういう考え方しかできない大人の世界の縮図にすぎないのだろう、と本山は思った。

どう理屈をつけたところで、農業とは、要するに草を育てる仕事にすぎないのだから、金額ベースで工業と比較すれば、あきれるほど効率の悪い仕事だ。農業と工業の両方を体験した本山は、そのことを誰よりもよく知っている。

しかし、王様だろうが貴族だろうが財界の大物だろうが、内心では軽蔑している農民が土の上で育てた草のタネや、草そのものを食べなくては生きていけないのも厳然たる事実なのである。

植物を人工的な環境で育てる野菜工場は、熱や光のもとになるエネルギーが安く使えれば、単価の高い野菜などを作った場合に限って経済に引き合う場合もある。しかし、エネルギー価格が何かの理由で高騰すれば、野菜工場などすぐにスクラップになる。しかも、人類の生存がかかっている穀物栽培は、これまでのように太陽エネルギーを直接利用して育てるほかに方法がないのである。

それにしても日本人は何という浅ましい考え方をするようになったのかと思って、本山は暗い気持になったが、今はそんなことを考えている場合ではなかった。目の前にいる息子に

とっては、今のところ学校へ行くことが生活のほとんどすべてだから、父親としては、日本人の気持に関する総論を考える前に、明日の問題を解決してやらなくてはならなかった。

「よし。どうしてもいやなら、学校を休め。学校なんて、そんなにまでして行く値打ちのある所じゃない」

しばらく考えてから、本山はきっぱりといった。

「お父さんだって、もともとは百姓だ。だから、百姓だといっていじめるような人間は大嫌いだ。そんなやつらがのさばっている学校へなど行く必要はない。学校でいじめ殺されるぐらいなら、学校へなど行かなくてもいい。人間は、読み書きと計算さえできれば、あとは自分で勉強することができるからな。

それに、どうしても東京の学校がいやなら、桃園村の学校へ転校させてやる。おじいさんやおばあさんは、お前がいっしょに暮らすといえば大喜びしてくれるだろう。

だがな、人間は、いやなことから逃げようとしても逃げ切れるものじゃない。逃げれば逃げるほど、追い詰められて身動きができなくなることもあるんだ。桃園村へ行って、今度は都会人だといっていじめられたらどうするんだ。今度は、どこへ逃げる?」

そういわれて、和夫はしばらく考えていたが、やがて、

「わかったよ」

といった。

「あとは、自分で決めなさい。お父さんは、お前の判断を尊重する」

「有難う」

和夫は、ぺこりと頭を下げたが、まだ何かいいたそうにしていた。

「まだ何かいいたいことがあるのかい。怒らないから何でもいってごらん」

「じゃ、いうけれど、ぼくは大学なんて行きたくないんだ。

お父さんもお母さんも、大学を出て働いているけれど、毎日、会社会社って、会社のことしか考えていないじゃないか。ぼくは、大人になっても、自分のことさえろくに考えるひまもないような、お父さんたちみたいな生活だけは絶対にしたくない。桃園村で百姓仕事を教わって、おじいさんとおばあさんと三人分の食べものは、自分で作りたいんだ。

貧乏だってかまわない。お金なんかいくらあったって、大きな家に住んだり立派な自動車に乗ったりできるだけじゃないか。

お金なんかなくても、おじいさんの家は充分すぎるぐらい広いし、ぼくは、自動車なんていらないから」

「お前……」

本山は、息を呑んで息子の顔を見詰めた。子供だ子供だと思っていた和夫が、これだけ筋の通ったことを整然と話すのに驚いたのだ。

「わかった。しかし、農業だけじゃ生きていけない世の中だということも忘れるな」

「そのことなら、おじいさんにさんざん聞かされたから、よくわかってるよ」
「それでも、百姓をやりたいのか」
「うん」
「わかった。とにかく、どうしてもいやなら明日から学校を休め」
「うん」
和夫は、うなずいて居間を出て行った。
心配そうに二人のやり取りを聞いていた礼子は、夫と息子の間が険悪な雰囲気にならなかったのでほっとした様子だったが、それでも気がかりな様子でいった。
「あんなことといって本当に大丈夫なの?」
「大丈夫だ」
本山は、きっぱりいった。
「学校なんて、それほどの価値があるものじゃない」
「価値とか何とかいうむずかしい話はともかくとして、私の勤め先だって、いい学校を出た人から先に、地位も月給も上がっているわ。和夫だって、大学ぐらい出ていないと、これからの世の中で困ることが多いと思うわ。
息子を大学へやるのは、親の義務よ」
「礼子」

本山は、妻の顔をじっと見た。
「きみは、自分の生んだ子を信じられないのか」
「そりゃ、信じたいわ。でも、信じられることと信じられないことがあるでしょう。わがままや現実逃避をいちいち認めていたら、和夫はだめになってしまう」
「そうだ。しかし、和夫は、ずるずると学校を休んでだめになるようなたちじゃないと思う。それに、あの子のいい分にはもっともなところがある。
ぼくも、和夫が大人になる頃の日本は、もう学歴の役に立つ社会じゃなくなると思っているんだ」
「そうかしら」
自分自身が、有名大学を出て一流企業でのキャリアを積み上げてきた礼子は、疑わしげな表情でいった。
「あなたは理想家肌だから、そう思いたいかもしれないけれど、世の中が簡単に変わるはずがないし、学歴がものをいう世の中は当分続くと思うわ」
「きみの方が正しいかもしれない」
本山はそういってから、妻の顔を見つめた。
「しかし、ぼくはずっとメーカーで働いてきたから、きみとは違った見方をしている。これからの世の中は大変な勢いで変わるだろう。ものを作る世界には、もう国境さえなくなって

いるんだ。国際化なんていわなくても、とっくの昔に国際化している。そういう社会で通用するのは、自分の能力だけだ。

日本の有名大学を出たといっても、そんな学歴が通用するのは日本の国内だけで、しかも、日本の一流大学といっても、われわれが勝手に偏差値で序列を作って差別化しているだけで、研究や教育内容の国際的なランクはけっして高くない。

本当に学問がしたいのなら放送大学もある。高級官僚や東京証券取引市場の一部上場企業の自称エリートサラリーマンになりたいのならともかく、暗記力の競争みたいな勉強が今までのように通用するとはとても思えないんだ」

あまり議論好きな方でない礼子は、黙ってしまった。

「それはそれとして、和夫の将来のこととは別に、今話しておかなくてはならないことがある」

「なあに」

礼子は、眉を寄せて不安そうにいった。

「アラン工業が東南アジアのM国のプラトンという会社と提携していることは知っているだろう。ぼくも、一度だけ工場のトラブルを解決するために出張したことがある。

今日、あそこへ出向しないかという内示があった」

「出向って、どういうこと。単身赴任しろっていうわけ」

「いや。家族揃って赴任することもできる。実質所得は増えるから、三人で東京より楽な暮らしができるはずだ」

「じゃ、わたしが会社をやめて、和夫も連れて外国へ行くんですか」

「そうはいってない。行こうと思えば行けるというだけの話で、きみが日本に残りたければ、ぼくは単身赴任するだけさ」

「……」

今度は、礼子が絶句して夫の顔を見詰めたが、やがて恐る恐るという感じで尋ねた。

「それで、いつから行くことになるの」

「まだ、本決まりじゃない。

ぼくは、社内では英語ぺらぺらの〈国際派〉の方じゃなかったから、これまであまり海外向けの仕事をしなかったけれど、会社では、これからプラトン社との提携関係を深めていかなくてはならなくなっていて、ぼくみたいな地道な技術屋もあちらに送り込みたいらしいよ。とにかく、もう日本国内の産業は力がなくなっているからね。

ただ、アラン工業にも人材は多いから、ぼく以外にも何人かが意向を聞かれている。停年近くて子供が独立した人や、子供がいなくて奥さんが専業主婦の人なんかは、海外へ出るのにほとんど抵抗がないだろうから、先に手を挙げるだろう」

「それで、あなたはどうするつもりなの」

「近いうちに一度プラトン社へ行って、しばらく仕事をして来ないかといわれているんだ。いわれているっていうのは、要するに行けという業務命令さ」
「じゃ、出向を断れば、まずいことになるのね」
「今回は、まだそこまでいっていないと思う。
出向は、うちの会社の意向というより、むしろ、プラトン社からの要請なんだ。あちらは、景気はいいけれど、何といってもまだ新興企業だから、技術者に人材が足りない。その部分を日本人の専門家にカバーしてほしいのだろう。
だから、ぼくの場合は、しばらくその部門で仕事をしてみたり、ホテル住まいじゃない現地の生活を経験したりして、行くか行かないか決めればいいらしいよ。海外の仕事は、本人に適性がなければマイナスの効果しかないから、うちの会社も無理強いはしないし、プラトン側だって、肌の合わない外国人になんか来てほしくないだろう」
「すると、あなたがプラトンに出向しない可能性もあるわけね」
「もちろんだ。ぼくは、あまり外向きじゃないから、外国と聞いただけで張り切ってしまう国際派の連中みたいに、うまく適応できるかどうかわからないからな。
しかし、出向しないことになれば、今後はもう社内での昇進が頭打ちになるだろうと思う。会社にとっては、社員は将棋の駒みたいなものだから、指し手の期待通りの働きをしない駒に重要な役を振ったりはしない」

「それは、わたしの場合も同じだわ」
礼子はうなずいてから、はっきりといった。
「わたしも、今まで積み上げたものを捨てて、あなたと外国暮らしをするわけにいかないから、そのことだけは、はっきりしておいてほしいの」
和夫は、その後二、三日間学校を休んだ。本山は、息子が休んでいる間に学校へ行き、担任の教師に会って実情を説明した。まさかなぶり殺しにされるほど悪質ではなかろうと思ったが、小中学生がいじめ殺されたり自殺したりする陰惨な話は、最近では珍しくもない。人口が日本の半分ほどのイギリスでも、新聞に出るだけで毎年十数人の子供がいじめが原因で自殺しているそうだが、いかに先進国共通の問題だといっても、父親としては放っておくわけにいかなかった。
驚いた担任が家庭訪問に来ていろいろ話し合ったせいもあって、和夫は、また気を取り直して学校へ行くようになったが、いじめが完全に終わったわけではなさそうだった。しかし、いざとなれば祖父母の所へ行って農民になる決心をした強さが子供心にも通じるのか、次第に下火になったらしく、和夫も少しずつ明るさを取り戻した様子だった。
本山は、こういう息子の変化を見て、安心してプラトン社へ出向するための下検分の旅に出た。同行するのは、やはり出向候補者の一人で、六期先輩の電子技術者、林敏郎だった。林は技術者の中では国際派で、英語も達者だった。プラトン社との技術提携にも重要な役割

を果たしていたし、M国に二年間駐在した経験もある。

あまり英語が上手ではなく、対外折衝にも慣れていない本山としては、こういうベテランの先輩といっしょに行けるのは大助かりだった。

羽田に着くと、背が高く颯爽とした林が、チェックイン・カウンターの前で待っているのが見えた。

「遅くなってすみません」

大荷物を引きずりながら急ぎ足で近づいた本山は、息せき切って謝った。

「まだ、約束の時間前だよ。ぼくが早く来すぎたんだ」

気さくな林は、笑いながらそういって本山の航空券を受け取り、手際よく二人分のチェックインを済ませてくれた。手荷物だけの身軽な体になった二人が、肩を並べて国際線ロビーへ向かって歩き始めると、林がいった。

「近頃は、羽田発の国際線が多いね。今じゃもう成田に発着するのより便数が多いんじゃないかな。おかげで、海外出張が楽になって助かるよ。東京国際空港だなんていっても、成田は上総の国なんだから、空港の往復だけで半日つぶれてしまったものなあ」

久しぶりに海外へ出る本山は、珍しそうにあたりを見廻しながらいった。

「羽田でさえこんなに空いているんだから、十年ほど前までの成田空港の混雑がうそみたいですね」

「五、六年前までは、うちのOLさんたちも、休みといえば海外旅行で、パリだハワイだ、グアムだバリ島だと、威勢よく出かけて行ったものだが、こう円が安くなっては、外国どころじゃないからな。

でも、成田ががらがらになった理由はそれだけじゃなくて、世界中の航空会社があまり成田によりつかなくなったせいだそうだから、何となく秋風が身にしみる感じがするじゃないか」

「韓国や中国の大空港の方が二十四時間発着できて、しかもずっと安く使えるから、狭苦しい日本の成田空港なんて、今では極東の一ローカル空港にすぎなくなってしまったと、新聞で読みましたよ。そのおかげで、われわれの海外出張が楽になったというのも皮肉だけれど。

そういえば、旅行社の人が、今月の海外ツアーの数は、ついに最盛期の十分の一を割ったとかいってましたね。このぶんじゃ、二、三年のうちにも外貨の持ち出し制限が始まって、いずれ成田空港は廃港になるのじゃないかって、ぼやいてました」

「無理もないさ。最近は、輸出ががた落ちだもの。車だって、この間まで開発途上国なんていっていた国の方が、品質が良くて値段もずっと安いのをどんどん作るんだから、少しぐらい円安になったところで、日本車なんて売れるはずがない」

「われわれだって、国内産業の補強のために、海外との提携を強化しに行く……といえばきれいごとだけれど、要するに日本を食い詰めて外国へ落ちて行くようなものですね」
「落ちるというのは、かなり自信過剰の表現かもしれないぞ」
林は、ちょっとたしなめるような口調でいった。
「われわれは、都落ちするのじゃなくて、都へのぼるおのぼりさんになっているのかもしれない」
かつては、列を作って順番を待った出国手続きも、今では人がぽつりぽつりと来る程度なので、すぐに終わった。搭乗口の近くまで行って長椅子に腰をおろすと、林が、
「ビールでも飲まないか」
といった。
「いいですね。ぼくが買って来ます」
本山は、すぐに立ち上がった。ぼんやりしていると、腰の軽い先輩がさっさと買いにいってしまいそうだったからである。
「あちらに着くまでは、こうやってのんびりしていられるけれど、こんな生活がいつまで続けられるかねえ」
冷えたカンビールを一口飲んでから、林がいった。
「今日の林さんは、ばかに悲観的ですね」

本山が、首をかしげた。
主に機械の開発や製造を担当していた本山は、エレクトロニクスの専門家である林とはそれほど深いつきあいはない。しかし、評判によると彼はかなりの楽天家で、だからこそストレスの多い海外での仕事をうまくこなせるのだということだった。
それだけに、今日の林の口ぶりがあまり明るくないのが気になった。
「悲観的なわけじゃない。ただ、現状を正確に認識しているだけさ。社内にいればはっきりわからないけれど、プラトン社へ行って外から見れば、われわれのおかれている状況がよくわかるよ。
ぼくも、自分で行くのは二年ぶりだけれど、今度副社長になったあちらの担当重役と親しくて、しょっちゅう電話で話したり電子メールをやり取りしたりしているから、雰囲気はよくわかっているつもりだ」
「ああ、リムさんですね」
本山は、うなずいた。リム氏は、たびたびアラン工業の現場を見に来ているから、何度か顔を合わせたことがある。
「そう。例のリムさんだ。
リムというのは、M国人としての名前なんだけれど、彼は中国系で、中国人としての名前は林だから、漢字で書けばぼくと同じ名前だ。僕の方が年上なもので、同族のお兄さんだと

いっていろいろ気を使ってくれる。

しかも、知っていると思うけれど、彼は日本の国立大学の工学部を卒業していて、日本語はもちろん上手だし、日本人の発想もよくわかってくれる。リムさんがいなければ、うちとプラトンの提携がこれほどうまくいったかどうかわからないよ。

それはともかく、ぼくは、彼としょっちゅう電話で話しているから、あちらの様子がかなりよくわかるんだ」

「ぼくも、日本の産業が落ち目だってことはよくわかっているつもりですが……」

「落ち目なんてものじゃない。これまでの慣性でようやくもっているだけさ。

今のプラトン社は、本山君が入社した当時の最盛期のアラン工業なみか、それ以上に活気がある。新製品の開発能力だってうちと同じぐらいだし、製品の仕上がりに到っては、うち以上だ。しかも、平均賃金はわが社の三分の一だからね。うちのオリジナル商品でさえ、プラトンに作らせて売る方が、客に喜ばれてこちらももうかる。

だから、今のところは、提携先の製品を自分のブランドで売っていさえすれば、そこそこ利益も出るし、シェアも確保できる。でも、それは、今いったように慣性みたいなもので、過去の蓄積を食いつぶしているだけのことなんだ。

商社のまねだけで、メーカーが長続きするはずがないだろう」

「じゃ、林さんは、プラトン社に出向されるおつもりなんですね」

「できれば、そうしたい。ぼくは、あちらの生活にいくらかなじみがあるし、家内も一年半ぐらい暮らした経験があるから、喜んで行くといっている。

でも、うちの会社が、ぼくを外へ出したいと思っても、プラトン側が今さら高い給料を払って、こんな古手の技術者をほしがるかどうかはわからない。むしろ、本山君の方に来てほしいというかもしれないな。

電子装置は、良い部品さえあれば誰が組み立てても同じような製品ができる。しかし、複雑な機械は、どこかで売っている部品を組み立てて売り物が作れるわけじゃない。だから、ベテランの機械技術者は電気屋より貴重なんだ。彼らも、そのことは充分承知しているよ」

「それはそうですけれど、本当の高性能の機械は、ぼくみたいな技術屋だけじゃ作れません。われわれは、コンピューターを使って理論計算をしたり、図面を引いたりすることはできるけれど、腕のいい職人さんがいなければ試作もできないし、製造現場と相談しなければ図面も引けませんからね」

「その点は、まったく心配することはないんだ」

林は、自信たっぷりにいった。

「アラン工業に遠慮があるから、あまり話題にしたがらないけれど、プラトン社は、腕のいい熟練工たちを日本から大勢引き抜いている。日本で、せっせと町工場つぶしをやって職人たちを失業させている間に、あちらは、そういう隠れた名工たちをピックアップして、若手

に技術を教えさせているんだ。

名人を一人見つければ、そのコネで、腕のいい男が次から次へ見つかるからね」

「本当ですか」

本山は、ビールを飲み干しながら唸った。思い当たる点が多かったのだ。

アラン工業に入社した当時は、まだ東京には小さな町工場がたくさんあった。工場というより、むしろ工房という方がふさわしい所が多く、腕の良い熟練工が方々にいて、金曜日に図面を持って行って注文すれば、月曜の昼前には試作品ができているぐらいのことは、ごく普通だった。

しかも、下請けといってもこちらのいいなりになるのではなく、設計に無理があれば的確に指摘してくれたから、駆け出し技術者だった頃の本山は、下職の熟練工、名人級の人に教えられ鍛えられたことも多かったのである。

しかし、日本の社会は、実際には産業の土台を支えていたそういう地道な企業や職人たちをけっして優遇しなかった。ちょっと不景気になれば、大企業は、真っ先に下請けの町工場に無理のしわ寄せを押しつける。また、工場のそばに家を建てた人が、工場の音がやかましいといって工場の追い出し運動を始めれば、先住者である工場の方が、邪魔者として追い立てられるのが普通だった。

それやこれやで、嫌気がさして廃業する工場が続出した。住宅が増えると地価が高くなって、土地を売り払えば出て行けるのだが、その跡地にはマンションが建つのが普通だったから、住民が増えればますます工場の経営がむずかしくなる。

かつてはさまざまな業種が集まっていた京浜地区の万能工房地帯は、こうしてなし崩しに消え失せていった。当然、工房の後継者も、技術を習得しようという若者もいなくなるから、熟練工たちは職を失ってしまう。そういう人々が海外に新天地を開いているという噂はこれまでもたびたび聞いて、何となくほっとする思いでいたが、プラトン社でも、アラン工業以外から日本の技術者を招いているというのは初耳だった。

本山は、和夫が、百姓だといって同級生にいじめられていることをふと思い出した。国民の大部分が中流階級を通り越して上流階級や貴族になった社会では、農業であろうと工業であろうと、手を汚してものを作る仕事など軽蔑の対象にしかならないだろう。

国民がこぞって白い手をした貴族となり、いい大学に入って四年間のんびりと遊び、卒業してからは、希望通りに官庁や銀行、証券会社、商社などに勤めるホワイトカラーになること自体は、まことに結構だ。手を汚す仕事などしなくてすめば、それに越したことはない。

しかし、国民の上に君臨して管理したり、金利や売買のさや稼ぎをする白い手の人間ばかり大勢いても、日本のように人口の多い国が成り立つはずはないのである。

——貴族国家……か——

本山は、故郷の父の節くれ立った手を思い出しながら、口の中でつぶやいた。

「本山君。搭乗開始だぞ。そろそろ行かないか」
林に声をかけられて、本山は我に返った。満席にはほど遠い客数だったが、もう、乗客たちが搭乗口の前に列を作りかけていた。
本山は、慌てて立ち上がった。

三つの病気

「覚えていらっしゃるかどうかわかりませんが、本山と申します」
名刺を差し出すと、リムも自分の名刺を出しながら流暢な日本語で答えた。
「もちろん、よく覚えてますよ。こちらへ来て下さったことも一度ありましたし」
渡された名刺の肩書は、Vice President となっていた。
「この前来ていただいた時、わが社はとても困った状態にいたのですが、本山さんがトラブルを解決して下さったもので、今でもあの時のことを覚えている者が大勢います」
「リムさんは、副社長になられたのですね。ご昇進おめでとうございます」
本山は、一礼してからまずお祝いをいった。
「どうも有難うございます。おかげさまで、先月から技術方面の最高責任者になりました。日本の皆さんのご協力のたまものです」
浅黒い丸顔のリムは、穏やかにほほえみながらいった。
「日本の会社との提携で大きくなった会社ですから、私のように日本の大学を出た者は有利

です。しかも、私の場合は、同じ一族の林さんのお兄さんがアラン工業のプラトン担当を長く務めておられるから、お互いに力を合わせられてとても得をしました」

「頼りにならない兄貴で、まことに申しわけない」

林は、座ったままふざけて最敬礼をした。このやり取りを見ながら、本山は、二人の間がどれほど強い信頼関係で結ばれているかを想像することができた。

「それでは、まず、工場を見ていただきましょうか。もう、御社に負けないほどの規模になりましたよ」

リムは、そういいながら気軽に立ち上がった。

「私たちは、すべての面で、欧米の会社ではなく日本のアラン工業をお手本にしました。役員室を質素にして、工場の設備を最新式にしたのも、日本のまねです」

本山は、リムと林のあとについて副社長室を出ると、事務所と同じビルの中にある工場に入って行ったが、十分もたたないうちに次第に気が滅入ってきた。

ほんの五年ほど前に来た時は、この会社が一人前になるまでには、まだかなり時間がかかるだろうと思って、優越感を味わうゆとりがあったのだが、今では、状況がまったく変わっていた。プラトンの工場で稼働している生産装置の多くは、アラン工業から導入した原型に改良を加えた最新式ばかりで、以前来た時とはまるで別の工場のようになっていたからである。

しかも、新しい機械が並んだ生産ラインはただの流れ作業ではなく、熟練者の能力を充分発揮できるように上手に工程が配置してあり、整然と動いていた。生産現場で働き続けてきた本山の目で見ると、この工場の運営方法はすでにアラン工業のコピーではなく、しかも、本当に利益を上げていることはすぐにわかった。

リムは、林と話しながら少し先を歩いていたが、やがて足を止めて振り向いた。

「本山さん。どうです。なかなか、いいでしょう」

本山は、黙ってうなずいた。日本を発つ前に、林が「外から見れば、われわれのおかれている状況がよくわかる」といった意味がようやく具体的に理解できたと思った。

アラン工業が長い年月をかけて作り上げてきた生産システムが、ここではさらに洗練された形で動いていた。自分たちは、すでに完全に追い抜かれていると、本山は直感した。まさに、都落ちどころではなく、林のいう通り、本山は、自分の方が都へのぼって来たような気分だった。

若者たちがきびきびした動作で働いているのも、気持が良かった。鉛筆をナイフで削ったりマッチを擦ったりすることさえできないほど不器用になってしまった日本の青年と違って、手仕事を多く残している社会に育っただけに、工作機械の扱いも上手だった。

しかも、ここで見る工作機械の中には、ヨーロッパ製の最新式……というより、本山がはじめて実物を見るような自動化された機械があった。かつては、日本の自動工作機械が世界

を席巻したものだったが、本家のヨーロッパもアメリカも居眠りをしていたわけではないらしい。追い越しをかけられているうちはひっそりしていたが、日本人が息切れするのを待って、元祖としての独創性を発揮し始めたのだ。

かつて、日本の産業にまだ成長力があった頃、手先の器用さや熟練などは、コンピューター化が進めば不必要になる、という考えが圧倒的になった。機械科の学生にさえ、古典的な製図法よりコンピューター製図だけを教えた方がすぐ役に立つというので、新しい機械の操作ばかり教え込んだものだ。

だが、プラトンの工場を見た本山は、そういう方針が間違っていたのではないかという気がしてならなかった。

確かに、人間の熟練工の手仕事は、機械に置き換えられる。これは、いわば産業の歴史そのものといっていいほど自明のことで、たとえば、自動織機を使えば、機織りの名人が手で織るよりはるかに均一な布をはるかに早く織ることができる。

ところが、そういう機械が自分の国にしかないのならともかく、同じ機械さえあれば、いずれどこでも同じものが作れるようになるのが、機械の特長なのだ。特に、電子装置は、部品さえ手に入れば比較的簡単に組み立てられるから、コンピューターでできる程度の作業なら、同じような水準の工場が方々にできるのは時間の問題にすぎない。

「わかったろ」

黙って先を歩いていた林が、しばらくたって本山の横に並ぶようにしながら、ポツンといった。

「ええ」

本山も、短くいってうなずいた。

「これじゃ、少々円安になったところで、日本製品の競争力がないはずですね」

「ない」

林は、リムが少し先を歩いているのを横目で見て、小声でいった。

「上昇気流に乗っていた五十年足らずの間に、われわれは、日本人は特別な能力があるかのようにうぬぼれてしまった。日本人独特の神経のこまやかさ、とか、日本人だけにある手先の器用さ、とかいって、まるでわれわれが工業生産のため神に選ばれた民族みたいないい方をする人さえいた。

でも、二十世紀の中頃までは、欧米でメイド・イン・ジャパンといえばイミテーションの安物だという定評になっていたんだ。うちの母親なんて、上等舶来という言葉をずっと使っていたものだ。上等の品物は舶来品、つまり外国から船に積んで来たものだというのが、遣唐使の頃から敗戦後までずっと日本の常識だったんだよ。

日本は、ここ三十年ほどの間に世界市場で大きな地位を占めるようになったというだけの新興工業国で、考えるまでもなく、世界の中で日本人だけが特別に優れた人種であるはずが

ないんだ。

自分でまったく新しい道を開くのは大変なことだが、よその国のあとをぴったりつけて相手が疲れるのを待って一気に追い抜くぐらいは、そのノウハウさえ知ってしまえば、遅かれ早かれどの民族だってできることが、ここを見ていればよくわかるじゃないか」

「うちの父も、よく上等舶来っていってましたよ。そういえば、ついこの間まで、日本製品なんて三流だったんですね」

本山は、そういってあたりを見廻した。さまざまな人種が一体となって働いている。

「日本はまとまりやすい国だけれど、国中が同じ価値観でまとまっているから、世界が大きく変わるような時には、みんないっしょに転んでしまいかねない。こういう多民族国家は多様性に富んでいてまとまりにくいけれど、激しい変化が起きても、いろいろなタイプがいるから、適応して引っ張って行ってくれる人が出やすいそうだ」

「良いことばかりはでないんだ」

本山がそういうと、リムが、後戻りして来て得意そうにいった。

「新しい設備が増えたでしょう」

本山は、正直に答えた。

「すごいですね。この前に来た時とは、別の会社になってしまったみたいです」

「私が、日本の大学に留学していた頃、学校では方々の工場へ見学に連れて行ってくれまし

た。その頃の日本の会社は、どこへ行ってもちょうど今のわが社のように前向きで、どんどん新しい機械を入れて、生産性が飛躍的に伸びていました。

私は、日本の最新式の工場を見るたびに、いつになったらわが国がこういう進んだ工業国になれるかと思って、絶望的になったものでした。でも、夢中でアラン工業のあとを追いかけているうちに、二十年たたないうちに、ここまできてしまいましたよ」

「ご立派です」

と、林がいった。

「アラン工業さんのおかげ、お兄さんのおかげですよ」

リムは、しんみりとした口調でいった。

工場を一通り見て廻ると、三人はまた副社長室に戻った。

「さて、と」

リムは、いかにも日本での生活の中で覚えた日本語らしい調子でいった。

「それでは、今日はお二人とも午後から市内見物にでも行って下さい。車は、林さん用にカンパニー・カーを一台出しておきます。日豊自動車の現地生産車ですから、自由に使って下さい。本山さんも、今度は国際免許証を取っていらっしゃい。ここは、香港やシンガポールと同じで、昔のイギリス領だから、車は左側通行です。交通のルールはほとんど同じですから、日本の方でも気楽に運転できます。

さて、夕方には、私が林さんの宿舎へお迎えに行きますから、久しぶりにゆっくりお話しましょう」

そういってから、リムは電話をとって秘書に何かいいつけた。

二人は間もなく会社の玄関へ出て、用意してあった車に乗り、林が運転して町へ向かった。車が広い通りへ出ると、林がいった。

「プラトンは、えらい変わりようだろう」

「ええ。びっくりしました」

「われわれも、かつてはああいう勢いで外国に追いつき、追い越した。だから、今度は追いつかれ、追い越される番なんだろうなあ。諸行無常だ。仕方がない」

「ねえ、林さん。うちの幹部は、もちろんこういう状況を認識しているんでしょうね」

立場上、国際問題について会社の幹部と話したことが一度もない本山は、運転している林の顔を見ながら尋ねた。

「いやというほど知っているさ。でも、こういう大きな流れには、逆らいようもないことも充分承知してるから、頭が痛いだろう。こんな時代に、経営者なんてやりたくない」

「事態が、ここまで進行しているとは思いませんでした」

「あと十年ぐらい早く生まれていれば、高度成長のおいしい部分だけを味わって、無事停年退職していられたんだがなあ」

「でも、林さんは、まだこちらへ逃げて来る手があるから救いがありますよ」

「その点は、本山君だって同じだ」

「ぼくなんか、ここで役に立つでしょうか」

「立ちそうだから、出向のお声がかかったんだろう」

「でも、アラン工業はこれからどうなるんでしょう」

「さあ」

かつてこの地に二年も住んでいただけあって地理にくわしい林は、慣れた様子で運転しながらのんびりした口調でいった。

「ぼくは、先のことは考えないようにしているんだ。ここへ来られれば、給料が半分になったって、東京よりずっと楽に暮らせるし、ぼくだって、あと五年ぐらいは使いものになるだろう。その先は、野となれ山となれさ」

「はあ」

本山は、事態をどう考えれば良いのかわからなかったので、あいまいに答えて窓の外を流れる熱帯地方の景色を眺めた。

そのまま宿舎に帰ると、本山は、自分にあてがわれた部屋に引きこもってベッドで横になった。かつて林が駐在員として妻とともに住んでいた社宅がたまたま空き家になっているというので、二人が臨時に住み込むことになったのだ。このあたりは中級の住宅街で、プラト

ン社が社宅に使っている家も何軒かあり、本山が以前に来た時もこの家の近くにある宿舎に泊まったから、なじみのある地域だった。

林がかつて住んでいたというこの家は、広い居間のほかにゆったりした部屋が五室もある立派な一戸建ての家だった。年配の中国系の夫婦者が住み込んでいて、食事の世話などをしてくれる。

――こういう家で暮らせるのなら、礼子もいっしょに来るだろうか――

3LDKとはいっても、せせこましいマンションのわが家を思い出しながら、本山は考えた。

――両親が行くといえば、和夫もついて来るだろう。あるいは、あの子のことだから、桃園村へ行くというかもしれない――

そう思うと同時に、本山の目の前に懐かしい桃園村の実家の光景が浮かんだ。

――あそこで、百姓と鍛冶屋をしながら一生暮らせれば、それが一番良かったのかもしれない。両親にも、今みたいなさびしい思いをさせずに済んだろう。

一生の間、他人と競争し、他社と競争し、最後に外国と競争するような生活は、おれのような人間には向いていないんだ。多分、和夫にも……だ。しかし、現金収入がないと生きていけない現代社会では、こうするほかなかったし、和夫もいずれは都会でサラリーマンになるほかない現実に目覚めるだろう――

そんなことを考えながら、本山はいつとはなしに眠ってしまった。

「おーい。本山君。リムさんのお迎えだぞ」

ドアを叩く音で目を覚ました本山は、林の声を聞いて慌てて起き上がった。

「はあい。すぐ参りまーす」

熱帯地方の軽装だから、外出の支度も簡単で、本山は五分もしないうちに、家の外へ出た。もう夕方だが、まだかなり暑い。リムは、運転手つきの大型車の前に立って林としゃべっていたが、本山を見るとすぐに声をかけた。

「中華料理でいいですね。友人の経営している特別おいしい店に案内します」

「ええ。中華料理は大好きです。お願いします」

「さあ、乗って下さい」

三人が後ろの座席に座ると、車はすぐに走りだした。

「本山さん。ここは、食べ物がうまいし、物価も安いし、暮らしやすい土地ですよ。いつまでも東京にしがみついていないで、早く奥さんも連れていらっしゃい。ぜーったいに後悔しません」

「そんな気がしてきました」

「今のプラトンは、管理能力のある優秀な技術者なら、十人でも二十人でも来ていただきた

い。みんな、大歓迎します。専門の話なら英語で全部通じるし、M国語は日本人にも覚えやすいから、半年もいれば話せます。

食べ物だって、日本料理の材料がいくらでも手に入りますからね。奥さんが料理すれば、好きなものが食べられますよ」

「そうですか」

本山は、自分の心がゆれているのを感じていた。もし、礼子が来るのを断れば、単身赴任で来てもかまわないと思うようになりかけていた。

車でほんの十分ほど走ったところにある中華レストランの二階は、なかなか見晴らしが良かった。広いテラスの向こうに夕焼け空が広がって、椰子の木のシルエットが夕風にゆれている。

「急に涼しくなったようですね」

本山がそういうと、リムは笑った。

「そう。日本や中国には春夏秋冬の四季があるけれど、熱帯には三つの季節しかありません。朝が春で昼が夏、夜になると秋。冬だけは一年中ないのです。今日は、もうそろそろ秋になりました」

「なるほど」

うまいことをいうものだと思っていると、リムは気軽な口調で、

「じゃ、料理は、日本人好みのを適当に見つくろいで注文しますよ」

といった。いかにも日本人くさい表現なので、本山は思わずいった。

「リムさんの日本語は、本当に日本人みたいですね」

「だって、高校を出たての若い頃に五年も日本にいて、大学卒業後も大勢の日本人とつき合ってますからね。忘れるひまもない。日本は、私にとって第二の故郷です。日本人に親切にしていただいたご恩は、絶対に忘れません」

冷たいビールで乾杯し、次から次へと出てくるうまい料理を味わっているうちに、本山は久しく味わったことのない解放感を感じた。

「いい気分だろう」

と、林がいった。

「ええ」

「仕事が順調にいっていないと、アフター・ファイブに解放されてもこういう気分にはなれないものさ。最近の日本じゃ、ついぞ味わえない」

「本当ですね。特に、外国にいる解放感もあります」

「そう。東京にいれば、上がいて、その上がいて、またその上がいるから、何かやろうとしても、面倒くさくてかなわない。ここなら、リムさんを説得すればおしまいだから、気楽なものさ」

リムは、それを聞いて、

「私は、それほど気楽じゃない」

と、笑いながらいったが、すぐ表情を改めて本山の方を見た。

「ねえ、本山さん。正直いって、今日の印象はいかがでした」

「とても、驚きました。五年ほど前に来た時は、プラトン社はまだ遅れていると思ったけれど、今日は、アラン工業よりかなり進んでいると感じました。たった五年の間に、ここまできたのは、大変なことだと思います」

「みなさんのおかげです。でも、これからの日本は大変だと思いますよ」

「そうですか。なぜ、そう思われるのです」

「何度もいうように、私にとって、日本は第二の故郷です。自分の国のことの次に、日本のことが気になります。だから、長所もよく見えるし、日本人には見えない短所も、外国人としてよく見えます。

本山さんは、なぜ日本が成功したかわかりますか」

「簡単には説明できないけれど、要するに、良い製品を安く大量に作る方法を考えたからだと思いますが……」

「その通りです。でも、その、良い製品というのは、日本人が自分で新しく原理から考えて作ったものでしたか」

「うーん。そういうものもあります」

「もちろん、ないとはいいません。でも、われわれの仕事に関係のあるところでいえば、自動車は日本の発明ではありません。日本が大量生産に乗り出した時、アメリカやヨーロッパでは、すでに大量生産に成功して確実なマーケットができていました。

冷蔵庫や洗濯機、テレビなどの家電製品も同じです。大型コンピューターやパソコンも、外国で作って成功するのを見てから、アメリカやヨーロッパ以上に能率のいい生産方式を考えて、高い品質の製品を大量生産しました。

あれは、目ざましいことでしたよ。西洋人……白人にしかできないと思われていた近代工業がアジアで大成功したばかりじゃなくて、西洋を追い越して彼らをあっぷあっぷさせたのですからね。

だから、アジア人はびっくりして、それまで西洋、ヨーロッパやアメリカばかりを見ていたのに、急に日本の方を見てから、自分を振り返りました。

私の父も、私の兄はイギリスへ留学させたのに、弟の私は日本の国立大学へ留学させました。言葉という点では、イギリスへ行くのに比べて大きなハンディキャップでしたが、それでも、中国系の私は、漢字をおぼえる苦労がなかったので、何とかなりました。

私は、発展期の日本で勉強して、アジアの国が西洋に追いつくためのやり方を教えてもらいました。そして、その通りにまねをして、日本に追いつきました」

リムは、そこまで一気にしゃべると、ビールの入ったグラスを上げて、

「乾杯」

と、いった。林がすぐに調子を合わせてグラスを上げたので、本山も仕方なくまねをしてビールを飲んだ。

「さて、問題は、追いついてからです」

少し赤い顔になったリムは、滑らかにしゃべり続けた。

「日本が、西洋に追いついて追い越すまでには、三十年以上かかりました。とても苦労したけれど、大成功しました。だから、その経験がすべてだと思っているし、それ以外の方法を経験した人はいないのです。

ところが、われわれが日本人に学んで日本に追いつくのには、二十年もかかりませんでした。できることを知っていて習うのは、できるかどうかわからなくて習うのよりずっと楽だからです。でも、はっきりいって、最近の日本は、もうお手本になりません。二十年前の日本は、未来を見ているのと同じでした。日本で一ヵ月滞在して帰って来れば、半年か一年の間、まるで予言者のようにわが国の未来が見えました。

でも、今は、お手本になるとしても、反面教師です。ぼやぼやしてると、われわれも日本みたいになってしまうぞ、という意味で……あ、すみません。ひどいことをいってしまいました」

酒が入ったので、つい本音が出てしまったのだろう。リムは、丸い額を軽く叩いて笑った。

「いや。まったくその通りです」

と、林がいった。

「もはや外国に学ぶものはない、なんていっていた時が、日本の頂点だったし、同時に没落の始まりだったのでしょうね」

「技術的なことは、まだいいのです。日本には頭のいい人が多いから、いずれ何とかなるでしょう。私が何より心配しているのは、日本の国そのものが、けっして外国に評判が良くないことです。日本に留学した経験のある者でさえ、必ずしも愉快に思っていない人が多いのですよ」

「やはり、外国人として差別を受けたからですか」

本山が尋ねた。

「そういうこともあるでしょう。でも、それは個人的な問題ですから、人によって違います。たとえば、私は個人的に差別を受けた記憶はありません。ところが、日本の国自体のやり方に問題がある場合は、すべての人が不愉快な思いをします」

「具体的にいうと、どういうことですか」

「私の従弟の中国人が日本に留学した時のことをお話ししましょう。

彼は、私が日本へ留学して成功したことを知っていて、ぜひ自分も日本の大学で勉強したいと思いました。お金は、何とかなるといいます。そこで、知り合いの日本人に頼んで身元保証人になって貰いました。ところが、その日本人が日本の政府から要求された書類は、七種類だったそうです。

ちょっと待って下さい」

リムは、手帳を出して読み上げた。

「法務大臣あての身元保証書。身元引受経緯説明書、これには、なぜ引き受けるか、滞在費はどうやって支払うか、本人の卒業後はどうするか、生活指導はどのように行うか、などを書かなくてはならないから、作るのにかなり手間がかかったということでした。

次が、身元保証人自身の誓約書と職業証明書、つまり、保証人が失業者ではなくて、保証能力があることの証明です。それから、保証人の家族全員の住民票、印鑑証明。

しかも、従弟がその書類を貰って日本へ行ってから、入国管理局へ九回行って、やっと在留資格を貰えたそうです。いくら中国人が我慢強くてもうんざりしたといってました。みんなが、アメリカへ留学するわけがわかったといってました。

これでは、外国人の留学生なんて邪魔だから、できるだけ来ないでくれといっているのと同じじゃありませんか。友達に身元保証人なんて頼めませんよ」

「うーん」

本山は、思わず唸ったが、自分の心の中にも、外国人が増えることを喜んでいない部分があることを認めざるをえなかった。

江戸時代、徳川幕府は、次第に外国に対して閉鎖的な態度をとるようになり、ついには正式国交があるのは朝鮮だけ、中国、オランダとは政経分離の形で接触するだけになった。これがいわゆる鎖国で、封建政府の罪悪のようにいわれている。鎖国さえしなければ、日本人はもっと国際化して開けた民族になっていただろう、という人もいる。

だが、問題はけっしてそれほど簡単ではない。

あの時代の世界が、現在の国際化論者の考えるほど甘い情勢でなかったことは、歴史を振り返ればわかることだ。当時の西洋では、おとなしい民族を侵略して奴隷にしたり、植民地を経営したりするのは、キリスト教の教義にも反しなかったらしく、むしろ英雄的行為として称賛されていたのだ。

侵略だろうが占領だろうが、外国人が来て下されば無条件に有難いというのなら、議論の余地もないが、カリブ諸島から南北米あたりに昔から住んでいた人々の悲惨な結末を見ればわかるように、あの時代のヨーロッパ人は、たとえどんなきれいごとを並べたてようとも、実質的には宣教師を含めて侵略者だった。それを防いだ徳川幕府や先祖たちの勇気と知性に感謝するどころか、まるで人類始まって以来の愚行のようにいい立てるのは大間違いである。

開国してから百何十年もたち、これほど長い期間にわたって外国人が身近にいる生活をしていても、ごく一部の国際人と自称する開明的な人以外の日本人は、外国人と溶け合って暮らせないのだ。それをすべて大昔に終わってしまった鎖国のせいにするのは、責任のがれ以外のなにものでもあるまい。

今となっては、もっと国際化するべきかどうか、などというむなしい論議を繰り返すよりも、どうせ国際化などできない民族なのだという実情を腹にすえた上で、改めて外国人とどのように接触するべきかを考え直すほかないのではなかろうか。

「身元のわからない外国人がいると、犯罪が増えて、アメリカみたいになるのを恐れているんですよ」

本山は、正直にいった。

「そうでしょう。でもそれだけじゃないですね」

リムはうなずいた。

「留学生は、自分から日本へ行きたがっているのだから、いやなら留学をやめるだけのことだけれど、日本の大学へ外国から教授を招く場合でも、同じように不審人物扱いらしいですよ。できることなら、学者でも外国人なん来てほしくないというのが本音なんでしょうね。日本の母校の教授をしている日本人の同級生がいってました。一度だけ外国の若手の学者に来てもらったけれど、相手に対してあまり失礼なことばかりしなくてはならないもので、

もう二度と外国の学者を招聘（しょうへい）したくないそうです」

「これも、うんと書類がいるのですか」

「もちろんです。その先生の場合も、本国での高校、大学、大学院の卒業証明、日本での在任中は本国で仕事をしない証明書だか誓約書、本国でいつ助教授になり教授になったかを証明する書類、本国の住民票に相当する書類、健康診断書、何とかの証明、かんとかの証明。必要な証明書を全部集めるのに、半月かかって、うんざりしたそうです。

つまり、相手がニセモノではなく、これだけの証明書を集めるだけの熱意があれば、世界一立派な国である日本で雇ってやらないでもない、といわんばかりの態度ですよ。

これじゃ、よほど親切な人か、特別な親日家でもない限り、まともな人間はよりつかなくなって、当然でしょう」

「ふーん」

今度は、林が唸った。

「なるほどねえ。そこまでやらせるんですか！

ぼくの日本人の友人で、アメリカの大学の教授になったのがいるけれど、研究者としての業績表をつけた履歴書を自分で作って、推薦してくれた人の推薦状をつけて提出しただけだったとかいってたな」

「そう。そんなものでしょう。アメリカなら留学しても、保証人なんていりません」

「要するに、日本人のホンネは、観光に来る金持の外国人以外に来てほしくないんだ」

「でも、日本にとってだけつごうの良い国際化なんてできるはずがないのです。商品とお金が出入りすれば、いやでも人間がついて来ます。人間には、日本にとってつごうの良い人も悪い人もいます。国際化というのは、そういうことなんですよ。

だから、日本は、外国のマネーにも嫌われています。日本に支店を出した外国の銀行は、もうほとんど全部が引き揚げてしまいました。日本の政府は、昔の社会主義国よりもこまかくてうるさい。歴史上、これほど役所がうるさく箸の上げ下げにまで干渉する国は、日本以外にはなかった、という人もいるぐらいだから、お金のある外国人は、よりつかなくなります」

「外国人じゃなくても、こんな話があるんだ」

林が、リムと本山の顔を等分に見ながら話し始めた。

「ぼくの大学の同期の男が、スキーリフトを作る会社をやっている。だいぶ前のことだが、その会社で、屋内スキー場にリフトをつけたのだそうだ。それで認可を取りに役所に行ったら、風速計をつけろといわれたそうだ」

「屋内スキー場って、風も吹くようになっているんですか」

本山が尋ねた。

「まさか。だれがわざわざ建物の中で風を吹かせるものか。

だから、風速計はまったく無意味な設備なんだ。ところが、規則だか法律だか知らないが、とにかくそう決まっているから、つけなければ認可しない、もしつけなければ、改めて審査するのに半年はかかる、っていわれた。ほとんど恐喝だよね。こうやって民間人を困らせて権力を楽しむことを、役人言葉で〈焼き鳥〉というんだそうだ。本音は、賄賂がほしいのかもしれないが、その会社ではかなりの費用をかけて風速計をつけたそうだ。風がないからぜんぜん動いてないといっていたがね」

「誰がそんな規則だか法律だかを作ったんでしょうね」

「ところが、これが、役人が勝手に作ったのでもないらしい。昔、どこかのスキー場で、風の強い時にリフトで人身事故があった時、新聞が、そういうことは、国がきちんとした規制をするべきだ、とか何とか書き立てたもので、風速計をつけて風速を観測しながら記録を取り、風が強くなったら運転を停める規則ができた。もともとは、民間の要請にしたがって、常にか弱き被害者である国民の権利を守るために作った規制なんだな。

つまり、規制には、官僚が自分の仕事を増やすためにでっち上げる作品も多いけれど、こんなふうに、民間というか無責任なジャーナリズムの要請によって始まる方が多いらしい。本来なら、人間は自分で自分の身を守る努力をするべきなのに、それを避けようとして、何でもかでも国に守って貰おうと注文をつけるもので、どんどん規制が増える。

それはいいとしても、今のスキーリフトみたいに、一度規制ができてしまえば、今度は、

それが本来の目的からはずれて一人歩きして、焼き鳥のたねにまで発展するから困るんだ」

リムがうなずいた。

「日本人は、社会主義国に憧れていた時代があって、中国の文化大革命でさえ、地上に天国ができたように思い込んだ人が大勢いたと、父がいってました。だから、何でも社会主義国のように国がやるべきだ、国がやるのが進歩だといっているうちに行政がやたらと肥大化して複雑になり、規制だらけになって、身動きが取れなくなってしまったのです。

私は、留学生時代にも、そのことを、日本国の重い病気、クニガ病だといって、日本人の同級生をからかったものです。

日本には、クニガ病のほかに、アチラ病、カネガ病という三つの大きな病気があって、そのために、日本人の優れた性質が発揮できなくなってしまったのですよ」

「クニガ病はわかったけれど、アチラ病、カネガ病というのは、初耳だな。それ、何のことですか」

林が、目を丸くして尋ねた。リムは、笑いながらいった。

「アチラ病は、自分に自信がなくなると、見境いなしに外国崇拝をして、外国の欠点までが長所に見えるようになる病気です。

病状は、いろいろありますが、一つの例が、日本語軽蔑症です。私は、こうやって、ほとんど不自由なしに日本語が話せるし、日本の新聞も毎日読んでいます。でも、最近は、変な

カタカナの言葉が増えて、わからなくて困ります。

水質と書けばいいのに、〈水のクォリティ〉と書く。私は、英語も日常的に使っていますが、カタカナで書かれるとなかなかわからない。総合計画でわかるものを、〈グランドデザイン〉、自然な音を〈ナチュラルなサウンド〉と書く。

以前、東京へ行った時、地下鉄に乗ったら、駅の広告に〈オフピーク通勤〉という言葉が出てました。わからないので、アラン工業で誰かにきいたら、時差出勤のこと。混雑する時間、つまりピークを避けて電車に乗れという意味だそうです。

成田空港へ行くのに東京から電車に乗ろうとしたら、〈成田への三つのアクセス〉と書いてある。これも首をひねりました。〈成田への三種類の行き方〉という意味らしいけれど、外国人が日本語を習う時は、カタカナ英語の正しい意味なんて教わらないから、本当に困ってしまう。国際化に逆行してますよ。

産婦人科医院が、マタニティークリニック、市民運動が、ニューシティー・ネットワーク。老人がシニアで、防衛庁の広報誌が『セキュリタリアン』。日本語辞典にも、どこの英語辞書にも出てない新語ですよ。日本人にもアメリカ人にもわからない。

最近の日本人って、なぜここまで自分の言葉を捨てようとするんでしょうね。

自分の母国語が劣った言葉だとでも思っているのですか。それほど英語が好きなら、まともな英語でちゃんと書いてくれればわれわれ外国人にもわかるのに、間違いだらけのカタカ

ナ英語を使って、いったい何かいいことがあるのでしょうか。
こうなれば、もう心が病んでいるといった方がいいでしょう。だから、私は、アチラ病と名づけました」
「確かにそういう傾向が強いですね」
と、本山はうなずいた。
「ぼく自身、ろくに英会話もできないからひがんでいるのかもしれないけれど、自分の母国語さえちゃんと話せない人間が、外国語をまともに話せるはずはないと思います」
「その通りです」
リムが、大きくうなずいた。
「中国の『荘子』という本に、〈寿陵の人〉という話があります。
寿陵という田舎から都へ出た人が、一生懸命になって都の人の身振りや言葉を覚えたつもりになって帰ったところ、都の風習もまだ身についていないし、田舎の風習も忘れかけた中途半端な状態になっていて、みんなにばかにされたという話です。
日本人が寿陵の人になれば、われわれ元日本留学生も心細い思いをしなくてはなりません。どうか、あまりひどいアチラ病にかからないで下さい」
「でもねえ」
林が、首をかしげた。

「大昔に先祖たちが、遣唐使になって中国へ命がけで渡ったころから、日本人は、アチラ病にかかりっぱなしなんですよ。
いくらかアチラ病の気がうすくなっていたのが、鎖国していた江戸時代の二、三百年ぐらいの期間だけで、最近でも、アメリカやイギリスやドイツやスウェーデンをまるで神様の国みたいに思っている人が多いからなあ。ソ連があった頃は、ソ連ばかりか東ドイツや、あのルーマニアまでが天国だといいふらしていた進歩的文化人が大勢いらっしゃったし。
でも、なまじ自信がないおかげで、中国からイギリス、ドイツ、アメリカと、いつも世界の最新の技術に乗り換えることができたのです」
リムは、それを聞いてにやりと笑った。
「今の日本には、もう乗り換える目標もないでしょう」
林は、うなずいた。
「まさにその通り。全面的に乗り換えるほど圧倒的な先進国がなくなりましたからね。
ところで、三番目のカネガ病というのは、どんな病気ですか」
「あはは」
リムは、今度は愉快そうに笑った。
「金さえもうかれば、どんなことでもする、という病気ですよ。
でも、これは、事業をやってれば、多かれ少なかれ誰でもかかる病気だから、あまり人の

ことはいえない。私だって、きっとかなりひどくかかってます。

ただし、カネガ病だけなら、昔から世界中どこにでも患者が大勢いたから、対策がわかっているけれど、クニガ病やアチラ病といっしょにかかった重症の前例はほとんどないから、これは難病じゃないでしょうか。

たとえば、われわれ漢民族にとって、親孝行は絶対です。もちろん、誰でもちゃんと親孝行ができるとは限らないけれど、その場合は自責の気持が強いし、少なくとも、誰かに親孝行の肩代わりをさせるのが良いことだとは思えません。

ところが、アチラ病とクニガ病を併発すれば、親孝行は封建的で愚かな行為だ。子供は親にお願いして産んでいただいたわけではないから、権利義務の関係はなく、ら、老人の面倒は国がみるべきだ、スウェーデンではああだ、フランスではこうだといい始めます。

ところが、国家事業の経済効率はむちゃくちゃに悪いから、子供が親孝行をする代わりに、国が老人の世話をするようになると、底なし沼に落ちたように、際限なしに国家予算が膨張します。いずれは……」

と、いいながら、リムは、右手を握って空中に突き出し、上に向けてぱっと開いた。

「クニガ病がひどくなって、こんなふうに、ポーンとはじけてしまうでしょう」

親孝行と聞いて、本山は、最近急に弱ってきた母の顔をふと思い出した。

「クニガ病と、アチラ病と、カネガ病か」

林が、溜息まじりにいった。

「しかし、日本ももうそろそろ、そんなことをいっている余裕がなくなりかけているんじゃないかな」

「楽しい席なのに、つまらないことをいってごめんなさい」

リムが、頭をかきながら謝った。

「でも、これは、けっして日本だけの問題じゃありません。わが国も、豊かになればなったで、今に必ず似たような病気にかかるでしょうからね。

ただ、日本の場合は、もうはっきり三つの重病に感染してしまっているから、今後どうなるか、後輩としては、行く末に関心があるし参考にもしたいところです。できることなら、工業化へのお手本を見せて下さったように、日本人がその次の段階のお手本も見せて下されば、後輩のわれわれとしては大いに助かります。

われわれも、いずれは似たような道をたどることになるのは、ほぼ確実でしょうからね」

なし崩し

「お米が買えないんだけれど、桃園村の家に少しないかしら」
礼子が、深刻な表情でいった。
「米がないのか」
本山は、驚いて妻の顔を見た。
「お米屋さんが、あと十日ぐらいは入らないっていうのよ。ここのところ、急に食べるものが手に入りにくくなって困ってしまう。お米だって、二年前の倍近い値段になっているのに、頼んでもなかなか持って来てくれないし、パンは、小麦が輸入品だから、なおのこと買いにくくなってしまったし。誰かが、お米や麦を買い占めているんじゃないかしら」
「そうかもしれない。政府は、米の量は充分にあると繰り返して発表しているけれど、とにかく、不足気味なのは確かだから、買い占めるやつがいても不思議はない。ところで、うちの食べ物のストックは、あと何日分ぐらいあるんだ」

「このまま何も買えないとしても、まだ、何やかやで、四、五日分はあるけれど……」
礼子は、不安そうにいった。
「この間まで、食べ物なんていくらでも売っていたのに、どうなるんでしょうねえ」
「親父の所へ電話してみようか」
「ええ。お願い」
本山は、すぐに短縮番号のボタンを押した。
「本山でーす」
すぐに和夫の朗らかな声が聞こえた。
「和夫か。お父さんだ。元気そうだな」
「うん。みんな元気だよ。おばあさんも最近は具合が良くて、毎日畑に出ている。おじいさんに代わろうか」
「ああ。代わってくれ」
「どうした。何かあったのか」
父はすぐそばにいたらしく、すぐに電話に出たが、こちらも元気そうだった。
「いやね、東京では、食べ物が手に入りにくくなってしまったもので、そちらの状況はどうかと思って」
「こちら……というより、うちには、少しはあるよ。和夫が熱心にやってくれるもので、今年はじゃがいもが豊作だった。少し送ってやろうか」
「米はどうですか」
「米は、あまりない。でも、もし今年が平年作になれば、一俵ぐらいはあまりそうだ。和夫は、よほど百姓仕事が性に合うらしくて、せっせとやってくれるから、助かるよ」
「お父さんのお仕込みがいいからでしょう」
「いくらわしが仕込んでも、当人がいやいやながらじゃどうにもならんだろう。でも、和夫は、畑仕事が大好きらしい。先が楽しみだよ。
ところで、そっちは、米も足りないのか」
「米屋に頼んでも、なかなか持って来てくれないんですよ」
「じゃ、急場のしのぎに、十キロも送ろうか」
「お願いします」
「いよいよとなったら、お前もこっちへ帰って来い。お前がいれば、一家五人や六人の食料ぐらい、楽に作れるんだからな。
今年の収穫が終わったら、休耕田を手入れして、来年は田植えができるようにしておこうか。まだ、今ならそれほど荒れてないから、七俵ぐらいは取れるかもしれん」
国産米の不作による米不足は、近年になってからも何度かあったが、今度の食料不足はちょっとばかり事情が違うように感じていたので、本山はいった。

「そうですね。休暇が取れたら、ぼくが行って手伝います」
「本当か」
父は、嬉しそうな声を出した。
「お前がやってくれれば、田圃の二反ぐらいどうってことはないし、天候さえよければ、一反当たり八俵や九俵ぐらいはとれるから、あと二人分の食い扶持ぐらいに困ることはないだろう。
とにかく、いくら偉そうにいっても、人間は食うものがなくなれば、死ぬほかないのだからな」
こんなやり取りがあって、数日後には、米とじゃがいもが届いた。石油がふんだんに使えた時代と違って、翌日配達の宅配便サービスはなくなっていた。荷物を出しても届くのに一週間ぐらいかかることさえ珍しくなくなっていたから、腐りやすい生ものは送れないのだ。
「和夫を桃園村へやっておいたおかげだ」
その夜、本山は、故郷のじゃがいもを食べながらいった。礼子は、田舎暮らしをしている息子が作ったといういもを複雑な面持ちで食べていた。
「あいつも、すっかり桃園村の土になじんだようだ。やっぱり、親父の所へやったのは正解だったらしいな」
和夫が祖父母のもとへ行ってから、もう三年近くの年月がたっていた。月に一、二回は夫

婦で訪ねて行くようにしていたが、中学生になった和夫は、東京にいた頃とは見違えるほど健康そうになって、祖母といっしょに立派な野菜を育てたり、祖父の鍛冶屋の仕事を手伝ったりして元気に暮らしていた。
最初は、息子を桃園村へやることにかなり抵抗していた礼子も、行ってからの和夫の変わりようを見て納得していたが、近頃では夫が思い切って故郷へやってくれたことを積極的に評価するようになっていた。
思い詰めたような目をした和夫が、
「お父さん。一晩中考えたけれど、ぼく、やっぱりおじいさんの所へ行きたいから、許して下さい」
と、本山にいったのは、彼が出張先のプラトン社から帰った日の夜、会社へ寄って報告してから久しぶりに帰宅した直後のことだった。父親の不在中、さんざん悩んで思い詰めたあげくに結論を出したらしく、その真剣な表情を見た時、本山は、もう息子のいうようにするほかないと決心した。
「どうしても、東京にいるのはいやだっていうのよ」
礼子が、説得に疲れたような顔でいった。
「田舎の家は、夏休みに遊びに行くのは楽しくても、そこにずっと住んで暮らすのは大変な

んだ、っていいきかせるんだけれど、どうしてもきかなくって……。おまけに、桃園村のお父様までが、和夫が来たければこちらへよこしなさい、なんておっしゃるから、この子はますますその気になってしまうし、もう、どうしようもないわ」

「そうか」

本山は、腕組みをして大きく息をつくと、息子の顔を見詰めていった。

「そこまで決心したのなら、お前の思うようにするほかないだろう。そうと決まれば、早いほうがいい。転校の手続きは、お父さんが明日学校へ行ってして来るから、あちへ持って行くものをまとめておきなさい。

今度の日曜にでも、桃園村へ連れていってやる」

「本当？」

それまで、まるで引きつっているようだった和夫の顔が、父の言葉を聞くと同時にぱっと輝いたように見えた。

「本当に行っていいんだね。うわあ、嬉しい。お父さん、有難う。すぐ、おじいさんに電話するから」

和夫は、人が変わったようにはしゃいで、部屋を飛び出して行った。

「こうなったら、もう成り行きにまかせるほかないわ」

礼子が肩を落とすようにしていったので、本山は慰めた。

「別に親子が生き別れになるわけじゃないんだ。そうがっかりすることはなかろう。いずれ、遅かれ早かれ、子供は親の元を離れて行くんだから」

本山とても、子供を手放すのがさびしくないはずはなかったが、礼子と違って、心のどこかでは、一人息子を桃園村の父母のもとへやるのを喜んでもいた。

今の東京の生活、特に学校での生活が、和夫のような性格の子供に向いていないことは、礼子ももうはっきり認めていたし、かつてののどかな農村ではないにせよ、過疎ぎみになっている桃園村の穏やかな風土で、全校生徒が二十数人しかいない大家族のような学校へ通う方が和夫のためになると信じていたからだ。

プラトン社で過ごした一ヵ月の間に、本山の考え方はかなり変わった。

最初のうちは、いかにも仕事一筋で生きてきた技術者らしく、新しい計画に腕を振るえそうな若い企業で働くことに強い魅力を感じたし、妻を説得して、本気で日本から移住しようとさえ思った。

活気に満ちた新興工業国での仕事は、あらゆる面で新鮮だった。本山にとって、自分の知識と経験によって彼らの経験不足を補い、重要な局面ですぐに効果が上がるような指導ができるのは非常に愉快だったし、知識欲あふれる若い技術者たちの尊敬を一身に集めて仕事ができるのもすこぶる良い気分だった。

プラトン社で働きながら、本山は、産業にも人間と同じように年齢があるという説をもっ

ともだと思うようになっていた。青年期の真っ盛りのようなプラトン社に比べれば、外から眺めた日本の産業は、一部の例外はあるにせよ、全体的には老年期に入ってジリ貧状態に陥っているようにしか見えなかったからだ。

日本の産業と経済は、半世紀もの長い期間にわたって成長を続けた。そのため、一時は世界を席巻したその成功の経験が、産業界ばかりか教育から社会保障に到る国民の生活全般はもちろん、政治から行政にまで深くしみ込んでいた。

それはそれで良い点もあったが、同時に既得権でがんじがらめになった独特の社会構造ができてしまって、変化に対応するための身動きさえできなくなっていた。プラトン社のリム副社長が、クニガ病といってからかった症状もその一つの現れなのだ。

なまじ、成功の経験が長かっただけに、今となってはこの独特の社会構造ばかりか、産業の構造さえ容易に変えられなくなっているのに、どうやら、世界の産業界は、もうまったく別の方向に向いて動き始めているらしかった。

かつては日本のお家芸だった、造船、鉄鋼、自動車、家庭電器などの大量生産は、すでに新興工業国の手に渡っていて、日本は二流国にすぎない。エレクトロニクスでさえ、日本は部品生産も機器生産も第一線からほとんど脱落していた。産業は、数多くの輪をつないだ鎖のような構造になっていて、もっとも弱い輪の強度で全体の強さが決まる。日本の産業には、今にも切れそうな輪がいくつもできていた。

そして、今では最先端の産業になっている新しいビッグビジネス、通信、放送、ゲーム、金融、販売などを一体化した世界的な巨大情報システム、〈メガパック〉には、完全に乗り遅れていた。

先端を行くアメリカは、主な分野で特許などの知的所有権や、独創的なソフトウェアを確立し、日本を切り離し寄せつけない態勢を固めている。ヨーロッパも、かつて、自分たちが切り開いた道を、あとから走って来て追い抜いた日本に対する警戒心が異常なまでに強く、今度こそ、切り開いた道をやすやすと歩かせないように、アメリカと協力して障害物をばらまきながら進んでいるように見えた。

後ろからは、プラトン社のような新興勢力に追い上げられ、前には、欧米連合の分厚い壁が立ちふさがっている。あとは、押しつぶされるか、自分で新しい道を開くほかないのである。

新しい道、つまり独創的な技術を切り開くためには、何よりも思い切った想像力が必要だが、半世紀かけて構築した独特の社会構造の内部では、学校教育の段階から、日本独特の社会や産業の構造に適しない人物を確実にはじき出すための巧妙なシステムができ上がっていた。

想像力の発達した人間が社会で活躍できる機会は非常に少ない……どころか、そういう厄介な人間は、入学試験のためのペーパーテスト用学問に向いていないから、まともな職にも

ありつけない場合が多かった。

外から見ていれば、日本のおかれたこういう状況がかなりはっきりわかるが、だからといって、今後の日本がどうなるのか。平凡な技術者の一人にすぎない本山には、見当もつかなかった。しかも、本山にとって今のところ何より重要なのは、日本の今後の動向などという大それた問題ではなくて、自分自身の今後の身の振り方だった。

リムは、最初から、本山がプラトン社に来ると決めているらしく、小さいながら個室をあてがってくれたり、将来の宿舎の候補をいくつか決めてくれたりしていた。しかし、相手の期待と好意は充分にわかるものの、本山の気持は、次第に帰国する方向へ傾いていったのである。

そのきっかけは、母が倒れて入院したことを知らせる妻からの電話だった。

「くわしいことはよくわからないけれど、とにかく、このままにはしておけないから、わたしがすぐに行ってみて、また電話するわ」

礼子の緊張した口ぶりを聞いて、本山も思わず全身を固くした。

「きみは、会社を休めるのか」

「有給休暇が残っているから、二日や三日ぐらいはどうにでもなるけれど、そういう問題じゃないでしょう。場合によっては、和夫も連れて行きます」

ほとんど母の死を想定したような緊張したやり取りだったが、その翌日にかかってきた電話によれば、母が倒れた理由は、一過性の貧血にすぎず、もう一晩入院して検査するだけで退院できるということだった。

だが、この電話で、本山の気持はかなり変わった。外国で生活することが、たとえ表面的には快適に見えるとしても、こうやって親のことをいつも心配していなくてはならないのなら、心が休まる時はないだろうと思った。

また、今はまだ元気だが、次第に年老いていく両親にとっては、たった一人の息子が東京に住んでいるのさえ心細いはずなのに、遠い外国へ行ってしまうのはどれほど不安だろうと思えば、プラトン社に長期出向する決心がにぶるのだった。

それでも、今の世の中で、子が親のそばで暮らせないのは普通なのだから、両親にもあきらめて貰うほかないという気持がどこかにあったが、もう一つ、ほんのちょっとしたことがきっかけで、本山の心はさらに大きくゆらぐようになった。

プラトン社に来てから三週間目の日曜日の朝、本山は、一人で宿舎の近所へ散歩に出かけた。五年前に十日間滞在した時、一キロほど先にあった野原のはずれに流れていたきれいな小川が気に入って、その付近へ何度も散歩に行ったのを思い出したからである。

だが、歩いても歩いても、川は見つからなかった。何度も同じ場所を行き来して、記憶を確かめているうちにわかったのは、小川そのものが消え失せてしまったらしいということだった。

次第によみがえる記憶をたどってその周辺を歩いているうちに、かつて小川が流れていたあたり一帯が工場になって、川は埋め立てられてしまったらしいことがわかってきた。さらに川筋の跡を探して歩いた本山は、細長い池のようになって残っている、あの小川の上流だったらしい部分にたどりついたのである。そこは、今では汚水の溜まりになっていて、灰色とも黄色ともつかない汚らしい色の水がよどみ、水面の大部分は、よれよれになった水垢のような固まりで覆われていた。

息を呑んでかつての清流のみじめな痕跡を見詰めているうちに、本山は、ふと、この国も、遠からず日本の二の舞になるのではないか、と、思った。

日本が四十年かかってたどった道を、半分の二十年で追い越そうとしている国である。行き詰まりになるのも、半分の期間しかかからないかもしれないのだ。日本程度の技術の蓄積がある国でさえ、いったん下向きになれば復活するのは容易ではない。今でこそ活気のある新興工業国だが、いったん落ち目になった時、はたしてどうなるだろうか。

なまじ余計な過去の蓄積がなかったことが、これまで通りにプラスであり続ければ良いが、お手本を失ってから、自分で自分の道を切り開いていくのは、日本の場合よりもっとむずかしいかもしれない。

今からそのつもりで努力すれば、繁栄が長く続くかもしれないし、そのために協力するのが自分の義務なのかもしれないとは思ったが、みじめな汚水溜めになってしまったかつての

清流の跡を見ているうちに、新しい仕事を前にして張り詰めていた本山の気持は少しずつ萎えてきた。

本山が、プラトン社への出向を断念したのは、帰国する一週間前だった。

リムは非常に驚いた様子だったが、田舎にいる年老いた両親のことを話すと、黙ってペンを取り、メモ用紙の真ん中に達筆の漢字でさらさらと何か書いてから、本山の方へ向けて見せた。〈父母在、子不遠遊、遊必有方〉と書いてあった。

「これは、中国の古典、『論語』の中の一節です。日本では、〈父母いませば、子遠くに遊ばず。遊ぶこと必ず方あり〉と読むそうです。意味は、お父さんやお母さんがおられる間は、遠くへ旅をしないように。もし旅をしても、必ずでたらめをしないように、という意味です。

本山さんが、ご両親のために帰国されたいのなら、私としても残念ながらお引き止めはできません」

と、いってくれた。

帰国後の本山が、社内で冷遇されたことはいうまでもない。優秀な技術者といっても、アラン工業自体が、もうすでにそれほど多くの技術者を必要としなくなっていた。仕事は、ジリ貧の一途をたどっていて、三年も新入社員の採用さえ停止していたほどだから、会社には、期待通りの動き方をしない社員を養っておく余力さえなくなりかけていたのだ。それで

も、現役の技術者である本山には、まだかなりの仕事があったため、昇給停止にはなったものの、解雇されなかっただけましだった。

プラトン社から戻って一年ぐらいは、まだ会社としての仕事が、細々ながら途切れることなくあった。しかし、日本の社会は、その間にもますます方々に破れ目が目立つようになっていた。

ある日、本山は、退社しようとして会社の玄関まで来た時、かつての上司、川上部長とばったり会った。M国に行っている間に子会社へ出向させられてしまい、以後一度も会っていなかったが、川上ぐらいの年齢の管理職技術者は、今では、五人のうち三人ぐらいまでが関連企業へ出向させられていた。

「あ、部長、お久しぶりです」

先に見つけた本山が声をかけた。

「やあ。本山君か。元気かい」

「体は丈夫ですが、さっぱり意気が上がりませんよ」

「それはお互いさまだ。もう帰るのか」

「ええ。残業なんて、一年近くもやったことありませんからね」

「じゃ、また、例のあの店へ寄らないか」

「いいですね。でも、あそこはまだ営業しているのですか」

最近は、サラリーマンの客がいなくなったため、経営が成り立たずに店を畳む酒場が多かったので、本山は念のために尋ねた。

「少なくとも一ヵ月ほど前までは、開店していたよ。けっこう繁盛しているみたいだったから大丈夫だろう」

行ってみると、川上のいう通り店は開いていた。さすがに、ひところほどの活気はなかったが、安上がりの大衆酒場だけあって、まだかなりの客が入っていた。

「もう、日本じゃ何を作っても売れないな」

席につくと、電車の中でずっと続けていたぐちの結論を出すように川上がいった。本山は、うなずいた。

「前から、日本製品の品質がじりじりと悪くなっているのは感じていたけれど、うちでも、新しい図面はよほど注意して見ないと、とんでもない設計ミスがあって、油断もすきもない感じですよ。若い連中には、機械そのものの感覚がわからなくなっているんです。

でも、こういう問題は、基本的には他社だって同じだろうから、もう日本の工業製品の大部分は、どうしようもないと思います。結局、技術者向きの人間が減ってしまったのに、無理に工業国を続けるからこういうことになるのでしょうね」

「先月あたり、工業製品の輸出は、最盛期の一パーセントぐらいだっていうんだろう。新興工業国の製品の方がはるかに良くて安いんだから、よほど値段を安くしても売れないらし

い。

でも、こうなっても、誰にもどうにもできないっていうのはつくづく情けないな。基本的には、政治が悪いのだろうけれど、民主主義なんだから、やはり国民に責任があるというべきかな」

「大臣は昔ながらの派閥の割ふりで決まり、その中に、人気のある芸能人やスポーツ選手を散りばめるという相変わらずの内閣なんだから、成り行きまかせのその場しのぎしかできないでしょう。

お役人さんだって、ペーパーテストの大秀才からキャリアとかいう世間知らずを選びだしているだけだから、過去のことは丸暗記していても、先の見通しはまるできかない連中ばかりだし」

「これだけ円安になっても、ほとんど輸出ができないのだから、もうどうしようもない。国の税収も、二年連続で減って、国家予算で固定費をまかなうのがやっとだそうじゃないか、どんな政治家も、もう政策らしい政策なんて出せるはずがない。自称世界一優秀な日本の官僚諸君だって、こうなっちゃ、お得意の強大な権限の振るいようもないだろう」

二人は、しばらくの間、黙って酒を飲んだ。酒の値段はかつての倍ぐらいになっていたが、まだ金さえ払えばいくらでも飲めた。しかし、壁に掲示してあるつまみの種類は、かつての良き時代の三分の一ぐらいしかなかった。

「やれやれ。ろくなものがないな。かつては、世界中から食料をかき集めていた栄光あるわが日本国も、この円安じゃどこも何も売ってくれやしない。どうやら、太りすぎる心配をしなくてもいい時代になりそうだぞ」

川上は、自嘲気味にいって笑ったが、急に声を低めて尋ねた。

「ところで、きみは、なぜ、人の羨むプラトン社への出向を断ったんだ。本当の理由を聞かせてくれないか」

「とにかく、ぼくは一人息子ですからね、急に弱ってきた両親を故郷においたまま、海外へ生活を移すことが無理だと悟ったのが表向きの理由ですが、本当は、あの国も遠からず日本の二の舞になるような気がしたからです。

あと十年そこそこでおかしくなるとすれば、ぼくはもう停年まで何年という年になっています。そんな時に、日本にはもう足がかりがなくなっているのに、外国でもやって行けなくなれば、どうにもならないでしょう。

どうせ貧乏するのなら、自分の国にいたいですよ。老いさらばえた身で遠く異境をさまよう、なんていうのは、詩人や小説家なら美談になっても、技術屋のやることじゃないと思いますけれど」

「そういえばそうだが……しかし、あと十年でも楽ができれば、できないよりずっとましだと思うんだが」

川上は、いかにももったいないといわんばかりの口調でいった。

「それはそうですがねえ」

本山は、急にむずかしい顔になっていった。

「ぼくは、自分の生まれた村が衰えていくのを長い間かけて見てきたせいか、よその国で同じことのお手伝いをしたくないというような気持もあります」

「ぼくみたいな都会生まれの俗物には、よくわからない心境だ」

「そうかもしれません。ぼくだって、必ずしも理論的に納得して見切りをつけたわけじゃありませんからね。何というのかな、一種の農民のカンみたいなものです」

「そんなものかね」

どうにも理解できないというように、川上は首をかしげた。

この頃を境に、食料事情はますます悪くなり始めた。といっても、食料以外の物資は、国内に膨大なストックがあるため、これまで通り店頭に豊富に並んでいた。保存のできる金属、繊維品、プラスチックなどは、今でも国内にだぶついているからだ。

円安のため、新しい品物は輸入できなくなっていたが、今の日本には膨大な資源があった。最盛期には一年間に七億トンもの物資を輸入していたのに、輸出していたのは一億トン以下だったのだから、たとえ、その大部分が石油や石炭のように燃やせば消えるものだったとしても、少なく見積もって毎年二億トンぐらいのモノが国土に残っていた。日本はいつの間にか大資源国になっていたから、桃園村の涸谷に積み上げてある古自動車のように廃棄物として方々に眠っている物資まで使うなら、当分の間さまざまな物資に不自由はないはずだった。

しかし、食料だけはすぐに足りなくなった。米以外は、国内の備蓄などたかが知れていたし、冷凍保存してあった生鮮食料品はすぐに底をついたからだ。国民の大部分が白い手をした貴族国家の弱点を直撃されたのである。

二十世紀の末、日本人が一〇〇キロカロリー分の食べ物を食べれば、そのうち国産の原料はわずか四六キロカロリー。しかも、その原料である農作物を作るためには、食品熱量の何倍あるいは何十倍もに相当する石油を使わなくてはならないのだから、本当の自給率は、限りなく低い。

「会社をやめて、桃園村へ帰ろうかと思うんだ」

本山が、はじめて妻の前で決心を口に出したのは、会社が退職者の募集を始めたその日だった。かつての優良企業だったアラン工業も、週に三日働くだけの仕事しかなくなっていて、今の半分の社員でも人員過剰になっていたのだ。本山は、まだ肩叩きの対象にはなっていなかったが、もう自分の方から会社に見切りをつけていた。

「でも、わたしは、とても田舎に住めないから東京に残るわ」

礼子は、はっきりといった。

「うちの会社の仕事は、今は、日本以外の二国間取引の仲介が主だから、当分はつぶれそうにないし、わたしも、ここまで積み上げたキャリアを捨てたくないもの」

「もちろん、それがいい。ぼくも、東京のこの家があれば、また世の中が変わった時の拠点にできるからね。それに、ぼくが故郷へ帰れば、来年からは食料をある程度確保できるようになるから、きみも安心して働ける」

こうして、本山は、長年勤め上げた会社を退職した。退職金の一部で、工場の倉庫で見つけた手頃な旋盤やボール盤、フライス盤などの工作機械を買い取りたいと申し入れたところ、どうせ帳簿価格はゼロに近いから、運賃さえ負担するなら無料で無期限に貸与してくれるということになった。

本山は、今に鍛冶屋の仕事がもっと忙しくなるはずだと見越していたのである。

工と農

本山悟一郎は、涸谷の上へ行く道をゆっくり登って行った。

二十一世紀に入って、もう十年以上の年月がたっているが、かつては、ずいぶんトラックが行き来した道だけに、頑丈な舗装はまだかろうじて残っていた。しかし、今日はまだ一台の車にも会わなかった。

「ここへ来るのも久しぶりだ」

本山はつぶやいた。故郷へは年に一、二回帰っていたが、用もない涸谷へ来たことはここ二十年近くの間、一度もなかったからだ。まだ紅葉には少し間がある季節なので、少し汗をかきながら坂道を登って行くと、やがて自動車解体用の工場らしい建物が見えた。さらに登って行くと、左側が崖になっていて、その下が涸谷である。

「おおぅ」

久しぶりに谷を見下ろした本山は、動物じみた唸り声を上げた。話には聞いていたが、信じられないような光景だった。何千……いや、万の単位なのだろうか。深い涸谷の三分の二

ぐらいが、古自動車で埋め尽くされていたのだ。まさに死屍累々（ししるいるい）といった感じで、自動車の墓場のようだった。本山には、アラン工業が作った部品を取りつけてある車の残骸は簡単に見分けられたから、その数の多さに複雑な気持になった。

「本山さん。久しぶりですねえ」

崖の上に立って見下ろしながら呆然と立っていると、後ろから声がかかった。振り向くと、村役場の大峰三平（おおみねさんぺい）だった。

「今度は、村へ帰って来なさるそうですが、本当ですか」

「ええ」

本山は、うなずいた。

「さっき、役場で転入の手続きをして来たところです」

「それは、有難い。とにかく、村民が一人でも増えんことには、村が立ち行かなくなってしまいますからねえ。

でも、最近は、ぽつぽつ村へ戻る人がいて、今年になってから本山さんで三人目だ。ただ、中年の男ばっかりで、女性や若い衆が帰ってこんのが残念だが」

大峰は、そういって笑った。

「本山さんも、奥さんは東京に残留だそうですね」

「そう。ぼくの会社は、せっせと人減らしをやっているから、割増の退職金を貰ってやめてしまったけれど、家内の勤め先はそんなこともないし、女性だからといって差別したりしない会社だから、停年まで勤めたいといってます」

「それはそれは……じゃ、当分こちらへは来られんわけだ」

本山の年齢を知っている大峰は、彼の妻の年齢を想像して、停年までの年月を暗算してから、同情するようにいった。だが、たとえ単身でも旧村民が桃園村へ帰って来たことを内心では喜んでいる様子で、声に嬉しそうな響きがあるのを本山は聞き逃さなかった。

「大峰さんは、今、ぼくで三人目だといったけれど、あとの二人は、帰って来て何をしているんですか」

「二人とも、勤めながら米と野菜を少し作ってます。兼業農家ですよ」

「それは、いいことだ。最近の東京じゃ、食べ物が以前ほど自由に買えなくなってしまったから、せめて、田畑のある土地に住んでいるものぐらいは、自分で食べるものを自分で作るようにしなくちゃ」

「じゃ、本山さんも、どこかへ勤めて兼業農家をなさるつもりかね」

「いや。ぼくは、そんな中途半端なことをせずに、鍛冶屋をやりながら本格的に農業をやるつもりで戻って来たんです」

「農業の方は、かなりの経験がおありなさるから大丈夫だろうが、鍛冶屋の仕事があるでしょうか」

大峰は驚いたようにいったが、本山は取り合わずに尋ねた。
「ところで、坂下の敏郎君が、当番でこちらへ来ているそうですが」
「ええ。いますよ」
大峰は、工場の方を向いて、
「敏郎さーん。本山さんだよう」
と、大声で呼んだ。坂下の敏郎は、すぐに顔を出した。
「やあ、悟一郎さんか。お久しぶりですね。すっかり御無沙汰してしまって……去年のお盆以来かな。
お父さんがいっとられたけれど、今度、奥さんだけを東京に残して帰って来られるそうですね」
「そう。さっき、役場で転入の手続きをして来たところだよ」
「それで、こちらでは、どこかへお勤めなさるのかね」
「いや。退職金があるから、ここでならしばらく働かなくてもやっていける。だから、また百姓に戻るつもりなんだ。実は、そのことで敏郎君に相談しようと思って、役場へ行ってからお宅へ寄ったら、今日は涸谷の当番だというもので、久しぶりにぶらぶら歩いて上がって来た」
「ぼくで、悟一郎さんの相談に乗れることなんてあるかねえ」

がっしりした体つきだが背の低い敏郎は、本山を見上げるようにしていった。ずっと農業一筋に生きてきた敏郎には、都会へ出て成功した男に対するいい知れぬ引け目があるのだ。
「実は、休耕していたうちの田を二反ほど復田したいもので、指導をお願いしたいと思って」
本山は、丁寧にいった。年齢は自分の方が十何歳も上だから、もともと家柄よりも年齢の上下がものをいう社会だった桃園村では、序列は本山の方が上である。しかし、親の代から村一番の篤農家である敏郎に比べれば、農民としての経験も知識もはるかに劣っている。借り手がなくなってから五年も放置しておいた水田でまた米を作るとなれば、プロの智恵を借りるほかないのである。
「ええっ」
敏郎は、びっくりしたようにいった。
「悟一郎さんは、また百姓をなさるのかね」
「鍛冶屋をやりながら、せめて自分たちの飯米ぐらいは作りたいと思って……」
「じゃ、勤めはなさらんのですか」
「サラリーマンは、もう卒業した。貧乏でもいいから、百姓に戻るつもりだ」
「そいつはいい」
敏郎は、目を輝かせた。

「復田なら、ぼくは、何度かやったことがあります。はじめの二、三年は、残っている草の根から水が抜けて収量も上がらんが、それでも、雨さえ順調に降ってくれれば、平年作の八割ぐらいはとれますよ。悪くても、半分はとれる。四年たてばもとに戻る」

「ぜひ、指導して下さい」

本山は、ぺこりと頭を下げた。

「悟一郎さんに、頭を下げて頼まれるほどのこっちゃないですよ。人手でやれば大ごとだけど、機械を入れれば大した作業じゃない。それに、最近は建設業者がひまで手が空いているもので、喜んでパワーシャベルをよこしてくれます。ほかにも頼まれている所があるから、来月に入ったらまとめて作業をやりましょう。

でも、どうせなら、全部復田したらどうですか。手間は、二反も四反も同じようなものですからね」

敏郎は、積極的だった。

「そう。じゃ、二、三日考えてみる」

本山は、うなずいた。

「それにしても、悟一郎さんが村へ帰って来るなんて、最初誰かに聞いた時は、信じられなかったなあ」

「へえ。なぜ?」

「だって、ぼくは、親父にずいぶんいわれたものですよ。本山さんは、村始まって以来の秀才で、東京の大学の工学部を出て立派な会社に勤めているのに、根が孝行者だから、実家には村で最初に新しい電気器具を入れる。お前も少し見習えなんてね。

あまりぱっとしない連中は、もう何人か戻って来たけれど、悟一郎さんが、村へ帰ってまた百姓になるなんて、夢みたいだ」

「ぼくは、それほどの秀才じゃないよ」

本山は、少し照れて頭をかいた。

「二流大学を出て、サラリーマンをやっていただけさ。勤務先の会社が優良企業だったから、まあまあの暮らしをさせて貰えたけれど、敏郎君みたいに親元を離れずにいて、親の仕事を継いで働いている方が、ずっと本当の親孝行だ。ぼくも、やっとそのことに気づいて帰って来たんだから。

それより、ぼくが涸谷の上へ来たのは十何年ぶりだけれど、すごいことになっちまったなあ。びっくりしたよ」

本山が、また自動車の墓場の方へ目をやりながらいうと、敏郎も谷を見下ろした。

「そう。久しぶりに見れば、びっくりするでしょうね。

でも、いきなりこうなったわけじゃなくて、少しずつ溜まっていったのだし、ぼくらは、見慣れているからあまり感じなくなってしまいました。それに、最近はリサイクルとかがさ

かんになって、捨てに来る業者がすっかり減ってしまったもんで、来月あたりから当番制度をやめて役場の人にまかせようということになりかけているんですよ。

ここの当番は、最初は、業者に勝手なことをさせないために村民が一人立ち会って監視するのが目的だったのに、いつの間にか、なるべく早く沢山の車を放り込むために能率良く分解する工場のアルバイトみたいになってしまいました。

最盛期には、当番といっても義務じゃなくて権利になって、毎日五、六人でここへ来ては、ガラスを外したりタイヤを取ったりしたものだ。しまいにはわれわれがエンジン外しまで請け負って、けっこう、みんな自動車の構造にくわしくなってしまってね。

この解体工場のおかげでずいぶん助かったものです。農業がどん底に近かった頃には、この収入だけで暮らしていた時期もあるほどで、涸谷がなければ、桃園村は廃村になっていたかも知れない、なんていう人もいたほどです。

でも、なんでこんなに捨てるほど自動車を作ったのかねえ。もったいないこった」

本山は、うなずいていった。

「何しろ、一時は、日本の勤労者の十人に一人が自動車関連の仕事をしているというほどだったし、世界一の自動車生産国だった頃は、作っても作っても売れて、生産量が増えれば増えるほど単価が安くなるから、工場をどんどん増設して作りまくった。最盛期には、日本だけで、一年間に千三百万台もの生産力があったんだからね」

「へえ。千三百万台か」

敏郎は、驚いたようにいって本山の顔を見上げたが、またすぐ不審そうな表情になって尋ねた。

「でも、どうせ作るのなら、こういう自動車の鉄やアルミをまた溶かして使えば材料費が安くなって、もっと儲かりそうなものだけれど……」

「安くて良い車を世界中に売りまくったから、外国からお金がどんどん入って来る。そうすれば、ますます日本円が強くなるから、外国のものが安く買えるようになって、古い自動車を解体して部品別に分けてから再利用するよりは、原料を輸入して新しく鉄やアルミを作る方が安上がりになってしまったからなんだ。それに、再生した材料は、どうしても原料から作った新しい材料より品質が落ちるし」

「へえ。それじゃ、最近になってあまり捨てに来なくなったのは、リサイクルのせいじゃないんだ」

「それもあるけれど最近では、外国車の方が良くなって、日本の自動車の生産量が、うんと減ってしまったから、捨てるほどの量がないんだ。ぼくの勤めていた会社も、自動車の部品を作っていたけれど、生産量が一時の三分の一以下に減ってしまった。

今の日本じゃ、車は貴重品になりかけている。もう、捨てるほど作れやしない」

「それで、悟一郎さんも帰って来たんですか」

「会社が規模縮小になったせいもあるけれど、両親がだいぶ弱ってきたし、せがれも大分前からこちらへ来ているから、放ってはおけない。

それに、百姓に戻るのなら、まだ体力のある四十代のうちだと思ったものでね」

「そうですか。でも、農業でやっていけると本気で思ってなさるのですか」

「もちろん」

本山は、自信ありげにいった。

「今すぐは無理としても、二、三年のうちには食っていけるようになると思っているよ。もう、農業の不振も大底を打ったんじゃないか。外から見ていれば、かなり上向きになっているような気がするけれど」

それを聞いて、敏郎は嬉しそうにうなずいた。

「確かに、最近は、都会から食料を買いに来る人が多くて、自宅で野菜なんぞの直売をやっている家が増えましたね。良い値段で売れるから、みんな喜んでます。うちでも、米を売ることが時々ありますよ。この間まで、米を作るやつは悪人みたいにいわれていたけれど、近頃は、少し風向きが変わったみたいです」

「そう。一時は、金を出せば何でも買えたけれど、今の日本の経済力じゃ、もうありあまるほどの食料品は買えない。世界的に見て人口の増えている国が多いから、十年前までみたいな経済力があったとしても、もう輸出できるほどの生産量がある国は減っていて、充分に買

いつけることはできないらしいよ」

「じゃ、食料不足になるのかな」

「幸か不幸か、日本は人口がずいぶん減ってしまったから、何とかしのいでいられるんだ。これだけ産業が衰えて会社がばたばたと閉鎖になっても、あまり失業者が出ないのと同じ理由で、食料事情が悪くなるスピードと人口が減るスピードが見合っているもので、差し当たりは、飢えるほどは不足しないだろう。

でも、いずれにせよ、もう今までのようにはいかなくなるさ。だから、遠からず、また百姓だけやっても暮らしていけるようになる」

「人口が減っているのは、実感がありますね。だって、知り合いの中年だけでも、ずいぶん亡くなっているもの。

あの世代は、半分ぐらいが子供の頃から成人病にかかっていたそうだから、もともとの体の造作がヤワで、五十になれば、もういっぱしの老人だそうですからね。最近になってばたばた死んでも驚くことはないし、その下の年代の連中はもともと人数が少ないのに、結婚もあまりしないし、もちろん子供も産まないときてるから、これじゃ、増えるはずがない」

「人口が少なくなって助かっているんだ。もし、今の日本に、以前みたいに一億二千万人もいたら、どうなると思う？

今頃は失業者がぞろぞろ出て、暴動ぐらい起きていたかもしれないし、本格的な食料不足

になって餓死者が出たかもしれないよ。食料ってのは、一割不足すれば餓死する人が出るっていうからね。人口が一億を割ってしまったから、収支とんとんで何とかやっていられるのさ」

「へえ。一割減なら、かえってダイエットになるぐらいだと思うけれど……」

敏郎は、本山の顔を見ながら笑った。

「分配が平等にできればその通りだけれど、不足すれば、必ず貯め込もうとするだろう。ぼくだって、きっとそうする。みんなが少しずつ取り込めば、すぐに絶対量が足りなくなって、どうしても食料にありつけない人が出るのだそうだ」

「なるほど、そんなものかねえ。こっちは、百姓のことしかわからないし、世間のことをあまり知らないけれど、日本はもう、食料の輸入ができないほど力がなくなっているのですか」

「今のところは、まだ稼ぎまくった頃の蓄積が残ってるから、余力がある。海外投資からの収入もあるし、円も実力以上に買われているから、しばらくは大丈夫だそうだ。でも、生産量が減ってる石油も買わなくちゃならないし、日本製品はますます売れなくなっているし、このままじり貧になりそうだな。

ぼくは技術屋で経済のことはまるでわからないけれど、工業生産は、新興国に追い上げられてがた落ちだし、新しい産業は生まれないから、先行きはあまり明るくないみたいだよ。

しかも、こういうふうになると、まず従業員を減らすことを考える消極的な企業が多いんだが、そうなると、優秀な技術者は嫌気がさして逃げてしまう。残るのは、人員整理に腕を振るった社内官僚みたいな連中だけだから、社員は減らせたものの、会社もそのまま空中分解してしまうケースが多いみたいだな。

ぼくの会社は、まだそこまで行っていなかったけれど、優秀な上司が、系列の会社へ出向とかいって追い出されるのを見ていて、これはもう先がないと思った。

人間は、調子の良い時は、何をやっても良い方へ良い方へ向くけれど、落ち目になると、何をやっても悪い方へいくということがあるだろう。今の日本は、もしかするとそうなりかけているのかもしれない」

「日本製品は、もう売れないんですか」

「競争力のある特殊な製品は売れている。でも、日本企業が得意としていた金づるの量産品は、完全にアジアのほかの国々に追い抜かれてしまった。とにかく、品質が良くないものね。

うちのテレビだって、いきなり妙な故障が起きて、サービスの人に来てもらうと、その時は直っていたりする。またしばらくすると別の所の具合が悪くなる。また修理を頼むとサービスの人が来た時には直っている……というような繰り返しで面倒くさいから、輸入品に換えちまったらもう故障しない。

最近は、テレビに限らず、国産品は何を買ってもこういうことが多いんだな。でも、ずっと前に亡くなったうちの祖父なんて、口癖のように〈上等舶来〉といっていたものだ。つまり、外国から船で運んで来た品物が上等だ、という意味だろう。日本が一流工業国だった時代のはかない夢が覚めて、また、上等舶来の時代に戻りかけているんだ」

「この間まで、日本製品が世界一だといっていたのに、なぜそんなに落ちぶれてしまったのですか」

「良い機械を作るためには、独特のカンが働かないとうまくいかないものなんだ。天才的な人ならともかく、普通の人間は、経験を重ねているうちに少しずつ身につくものだ。だから、言葉で表現できないようなそういう感覚の発達した熟練者が大勢いれば、基本的な設計ミスも、製造上の幼稚な失敗も見落とさない。

ところが、その伝承が絶えてしまうと、表向きにはわからない微妙な失敗が重なって、使い勝手の悪い製品ができちまう」

「でも、コンピューターが発達したから、人間の熟練なんてそれほど重要じゃなくなったという話を、何かで読みましたが」

「そう。その通り。でも、コンピューターにできることなら誰にでもできるから、世界中がドングリの背比べになっちまう。放っておいてもよそより優秀な製品を作ってくれるコンピューターは、まだないんだよ。

ものを作る人間をばかにしていると、いつかは、まともなものができなくなる時がくると思った方がいい」

「そうかあ」

敏郎は、感心したようにうなずいていたが、すぐに思いついたように、

「でも、農業だって、似たようなものじゃないですか」

と、いった。

「農業をあれこれいじくり廻しているのは、田圃や畑で実際に農業をやっている連中じゃなくて、空調のきいたビルの中にいて、土に触るどころか、ここ十年は土を踏んだこともないお偉方ばかりですからね。日本の農業を心配するより、自分の権限を拡張することばかりに熱心なそんな人たちにいじくり廻されているうち、農業はじわじわ弱ってしまいました。

食料自給率が何パーセントとかいっても、昔みたいに人間の力で作っているのじゃなくて、石油がなければ何もできないのだから、本当に国内で自給できている率は、うんと低いんでしょう。

桃園村だって、この間までは大きなハウスで石油をどんどん焚いて、冬でもキュウリやトマトを作っていたけれど、石油の値段が安値の頃の三倍以上になった頃から、動力に使うのがやっとになって、ハウスは、もとの十分の一もなくなりました。このまま石油価格の高値が続けば、もうすぐハウス栽培は完全におしまいになるし、季節の野菜しか食べられなくな

るのは時間の問題です。

ただ、今の農業は、百姓の立場からいえば悪いことばかりじゃありません。

今までは、パソコンで相場を見ながら共同出荷していたけれど、最近は直接買いに来てくれる消費者が増えているから、小売り価格に近い値段で庭先で売れるぶんが増えたし、この間までと違って、長さを揃えろの、太さを揃えろのとうるさくないから、手間もかからず包装代もいらず、ずいぶん楽になりました。

市場がいつも品不足気味だから、できるだけ共同出荷しろって圧力もかかるけれど、百姓ももう前みたいにいいなりになってませんよ。市場に出すより何割も高い現金が日銭で入るんだから、その残りしか共同出荷に廻しやしません」

「それが、自然の成り行きだろうな」

「だから、悟一郎さんが、農業をやろうというのは、正解かもしれません」

「ぼくは、そう信じたから、東京に見切りをつけて帰って来たんだ」

「でも、悟一郎さんが真っ先に桃園村へ帰って来るようじゃ、日本は、これからどうなるんでしょうね」

敏郎は真剣な表情になっていった。本山は、笑った。

「われわれみたいなしもじもが、日本の将来を心配したって、どうにもなりゃしない。でも、東京の生活に見切りをつけた時、ぼくは、どんな世の中になっても、とにかく、自

分の食べるものさえ作っておけば、あとのことは何とかなるだろうと思った。だから、こうやって桃園村へ帰って来たんだ。

金を出せば何でも買える時は、金が何より強いから、現金収入が何よりだ。でも、金が役に立たなくなれば、食うものを持っているやつが一番強い。石油なんかなくたって、米さえあれば死にやしない」

本山は、自信たっぷりにいった。

「米を作ることだけは自信があるから、その点は安心だけれど……」

敏郎は、いくらかほっとした様子だった。

都落ち

本山が桃園村に帰ってから一年近い時が流れて、復田した水田もようやく実りの季節を迎えていた。

収穫の近づいた田の見廻りをすませた本山が家に帰ると、電話に向かって嬉しそうな様子でしゃべっていた和夫が、右手を上げて振った。

「お母さんからだよ」

今日は土曜日だったと思いながら急いで受話器を受け取ると、すぐに礼子の声が聞こえた。

「まとまった休暇が取れて、しばらくそちらへ行けそうなの」

「そりゃ、良かった」

和夫が嬉しさを包みきれないように、畳の上でごろごろ転がりをして見せていた。もう中学生だが、母親がたまに会いに来てくれるのが嬉しくてたまらないのである。息子のはしゃぎように比べて、妻の声が少し沈んでいるのが気になったが、本山は、感情の起伏を表さずに尋ねた。

「いつから来られるんだ」
「少なくとも来週一杯は休めることになったから、本当なら明日からでも行けるんだけれど、支度があるから、月曜に行くわ」
「園田まで、車で迎えに行くよ」
「でも、ガソリンがすごく高いでしょう。バスで行くから、桃園村のバス停まで迎えに来て下さればいいわ」
「その程度のガソリンは買えるから、心配しなさんな」
「ねえ、あなた……」
礼子は、急に小声になっていった。
「もうすぐ、一般用のガソリンが配給制度になるかもしれないっていう噂だから、いざという時のために、百リットルぐらいは買っておいたらどう。今、車に入っているのだって、大事に使った方がいいわよ」
「本当か」
「あと半年ぐらいはお金さえ出せば買えそうだけれど、生産量がどんどん減っていて……」
「わかった。とにかく、園田まで迎えに行く」
本山がそういうと、和夫がそばへ来ていった。
「もう一度、お母さんと話させて」

母子の会話のためにまた受話器を息子に渡してから、本山は、車に燃料を補給するたびに三分の一ぐらいずつ抜いて溜めておいたガソリンが、もう二百リットルのドラムカン一杯になっているだろうと思った。桃園村へ帰ってすぐ、燃費のいい軽四輪のバンに買い換えたから、これだけの燃料があれば、遠出しない限りしばらくは車に乗っていられる。
円がじりじりと下落する影響は、あらゆる方面に現れていたが、円安がまた円安の原因になるのが最大の影響だった。輸入原料は高騰するのに、かつての工業大国だった時代と違って、今の日本の技術では、円安になっても輸出競争力がさっぱり回復しなかったからだ。
すべての物価がじりじりと値上がりし続けているが、国内にある膨大な物資の在庫のおかげで爆発的なインフレにはならなかった。使えば消える石油や、食べればなくなる食料は、誰の目にも不足が明らかだから値上がりも激しかったが、このことが必ずしも悪い結果になっていないのが、日本の社会の不思議なところだった。
まず、大量に出ていた残飯が激減して、最盛期の一パーセントにも満たなくなった。厚生省の統計によれば、食べすぎと肥満による病人が目に見えて減っているが、原因ははっきりしていた。
太って困るほど充分な食料はないし、百メートル先のポストへ郵便を出しに行くのまで自動車に乗るような文明生活は、したくてもできなくなっていたからだ。いわば、いやいやながら健康を取り戻す人が増えているのである。

日本の経済が低調になるのと歩調を合わせるように、本山の仕事は順調に伸びていた。一時はほとんど廃業に近い状態だった鍛冶屋に、古い農具の修理の注文が次から次へと舞い込むようになり、最近では毎日二、三時間はかかりきりになるほどの仕事があった。石油の値段が高騰して、機械まかせの農業ができなくなってしまい、昔ながらの農具を引っ張り出して使う人が増えているせいだった。

これまでなら、農業機械が使えなくなれば、農業などやめてしまえば済んだが、世の中がこの間までと様変わりしていた。町へ出ても仕事はないのに、農作物は作っただけかなり良い値段で売れる一方で、自分の食費はただ同然だから、農業が非常に率の良い仕事になりかけていたのである。

鍛冶屋の仕事は、久しぶりに腕を振るえる父が大張り切りなので、本山は、特に力のいる仕事を手伝うほかは、田畑の仕事に精を出すことができた。和夫は、畑仕事の方が好きらしかったが、祖父が元気なうちに鍛冶屋の仕事を習っておきたいというので、できるだけそちらの手伝いをさせるようにしていた。

礼子が来た日は、朝から秋晴れだった。和夫はまだ学校なので、本山は一人で園田駅へ行き、入場券を買ってホームで待っていると、列車は定刻に入って来た。礼子は、両手に大きな荷物をぶら下げ、背中にもリュックを背負って降りて来た。

結婚してから十五年の間、いつも元気に働き続けていた礼子だったが、今日は、少し疲れ

ているように見えた。

「大変な大荷物だな。引っ越しでもするつもりかい」

本山は、両手を出してずっしりと持ち重りのする荷物を受け取りながらからかったが、礼子は、大真面目に答えた。

「本当に、引っ越し覚悟で来たのよ。ほかにも荷物を送ったけれど、あまり運賃が高いから、持てるだけは手で持って来ちゃった」

駅前に駐車してあった軽自動車に荷物を積むと、本山は妻を乗せて走りだしたが、国道へ出るとすぐに尋ねた。

「会社をやめるのか」

礼子は、しばらく黙っていたが、やがて低い声でいった。

「やめたくはないけれど、本当のところ、もうあまり仕事がないの。できれば休職してほしいとはっきりいわれてしまったわ。家族を養う必要のない、恵まれた立場の女性から先にご退職願いますというわけね」

「じり貧の日本じゃ、もう、男女平等だの同権だのと、きれいごとはいっていられないから、つい本音が出ちゃったんだ」

「くやしいけれど、そうみたい」

といって、礼子は溜息をついた。

「最初は抵抗したけれど、だんだん戦う意欲がなくなってしまったわ。だって、もうどうしようもないのよ。わたしの会社の入っているビルは、エレベーターが十本あるのに、動いているのはたったの二本だけ。それでも大して混んでいないから、もうすぐ一本だけにするでしょう。

男の人たちだって、いつまであそこで働いていられるかわかったものじゃないわ。うちのビルは古くて家賃も安いから、働いている人数が減った割にはまだ空き部屋が少ないけれど、近所にある高層ビルなんて、入居者が三分の一もいないところがあって、暗くなってから近くを歩くと、まるで岩山の中を歩いているみたいで、不気味よ。

だって、ビルそのものが真っ暗なのに、外も街灯は五本に一本ぐらいしかついていないのだから、月のない晩なんて、こわいぐらい」

「月のない晩……か」

本山は、思わず笑ってしまった。

「本当よ。街灯から離れると真っ暗なんだから」

礼子は、夫の方を見て不平そうに口をとがらせた。

「わかってるよ。こっちだって、最近はほとんど街灯をつけないから夜は真っ暗で、事情は同じようなものだ。ただ、桃園村は廃村直前までいったことのある村だから、もともと街灯が少なくて、慣れているというだけのことさ。

でも、江戸時代ならともかく、文明の最先端を進んでいるはずの二十一世紀の東京の高層ビル街で、月のない晩がこわいというから、何となくおかしいじゃないか」

「そういえばそうね。でも、とにかく、月のない東京の夜はこわい。懐中電灯だって、電池が高いからあまり使いたくないし……。

日本がここまで落ちぶれるなんて、十年前には誰も考えもしなかったわね」

礼子が溜息まじりにいったので、本山も相槌を打った。

「月のある晩ばかりじゃないぞ、っていう古いおどし文句があるけれど、今の東京じゃ充分すごみがあるんだな。

うちの両親なんて、今でもまだ旧暦のついた家庭暦を使っていて、何かというと旧暦の日付を見ているけれど、このぶんじゃ、いずれ旧暦の方が便利になりかねないな」

明治五年までの千年もの間、先祖たちが正式に使っていた中国式の太陰太陽暦（旧暦）は、月の長さは月の運行で決め、年の長さは太陽の運行で決める複雑な暦で、毎月の一日（朔）が新月、十五日が満月になるように作ってあった。つまり、日付がそのまま月齢なので、今日が何日かを知っていれば夜の明るさを推定できた。盆踊りが七月十五日なのは満月の下で踊れるからだったのである。

西洋式がすべて正しく、東アジアの伝統はすべて封建的で野蛮で間違っているという明治以来の発想では、この便利さは理解できなかったが、電気料金が高騰して街灯の数が減れ

ば、それだけですぐに、旧暦の便利さがわかるようになってきた。

「日本は、これからどうなるのでしょうね」

礼子が、心配そうにいった。一年近く前に、敏郎が涸谷で同じようなことをいったのを思い出しながら、本山は同じような返事をした。

「こんな世の中で、先のことを予想したって無駄だよ。今となっては、自分の食べるものだけ確保しておくほかないだろう。幸い、今年は復田した田圃も七俵ずつぐらい取れそうだから、一家五人が一年間食べるだけの米は充分にある」

「有難う。それを聞いてほっとしたわ。

捨てるほど沢山の食べ物を輸入していた頃は、輸入量が少しぐらい減っても、よけいなものが入らなくなっただけで、実質的な影響はあまりなかったけれど、もうぎりぎりの線まで落ちているんだって。

東京では、まだお金を出せば量的には間に合うけれど、五年前と比べても売っている種類が半分以下、十年前と比べれば五分の一もないんじゃないかなあ。このまま不足勝ちの状態が続くのか、また持ち直すのかどうかわからないけれど、もう余力がなくなっているから、もし何かが起きれば、今度は本格的に足りなくなるでしょうね」

「配給制度になるのだろうか」

また、別の形で農村に対する官僚支配が始まるかもしれないと思って、本山は憂鬱になった。

「どうかしら」

礼子は首をかしげた。

「役所に勤めている友達が何人かいるけれど、もう、今の政府には、それだけの力がないといってるわ。だって、ここ何年か、現場のベテラン公務員がずいぶん退職したというし、公務員になる人もうんと減っているから、本当に食料不足になればもう政府がコントロールすることはできそうにないって。

官庁といっても、別に超能力があるわけじゃなくて、税金を集めて目的別にばらまく権限があるだけのことでしょう。ところが、十年も続けて税収がが落ちで、予算の縮小が続いているし、今の落ち目の貧乏国の日本じゃ、国債なんて発行しても引き受け手はどこにもいないし、お金のないところには権限もない。予算をつけられない官庁なんて、こわくも何ともないから、もう誰もいうことをきかないというわけよ。

それに、海外とのつながりの強い人は、十年ぐらい前からずいぶん外国へ移住してしまったでしょう。国内だと、がんじがらめの規制だらけだから、やり手のビジネスマンなんかは、いやになってしまうけれど、自由な国へ行けば、自分の能力がフルに発揮できるとかいって、女性でもずいぶん出て行った人がいるわ。実際に行ってみれば、あちらも天国じゃないことがわかってがっかりした人が多いらしいけれど……」

「ぼくの会社でも、ずいぶん大勢の技術屋たちが海外の提携先なんかへ出てしまったね。五十人近いかもしれない。いわゆる国際派で、外国の長所ばかりが目につく人は、日本にいて愚痴ばかりいっているより、その方が幸せだろう」

「そう思うわ。

でも、わたしも外国に憧れた時期があるからよくわかるけれど、日本以外はどこでも外国なんだから、そこでうまくいくかどうかは、運次第なのね。自分じゃ、いっぱしの国際人のつもりでも、会社から離れてしまえば自力で適応できない人は大勢いるし。わたしは、そういう人を大勢見ていたから、日本から離れようとは思わなかった。

ところで、東京都がなくなりそうだ、っていう話を聞いた？」

話題が突然変わったので、本山は驚いて妻の顔を振り向いた。

「いや。初耳だ」

「東京都は、ちょっとした国みたいな規模になってしまったけれど、最近は税収がどんどん減ってしまうもので、縮小しないとやっていけないんだって。都内の市には独立してもらって、東京は昔みたいに区部だけの小さな東京市に戻して、こぢんまりやる計画が進行中だそうよ」

「そうか。五十年間、膨張ばかりしてきた日本も、いよいよ収縮期に入ったのか」

この一年、復田した水田の作業と、化学肥料の代わりに大量に必要な堆肥（たいひ）の準備に夢中

で、体力も気力もそちらに使いはたしていた本山は、たまにラジオを聞くだけで新聞もろくに読んでいない。テレビ放送は時間が限られていて、忙しい本山はほとんど見る機会がなかったから、久しぶりに妻から聞く世間の裏話は新鮮だった。

「みんなでせっせと働いて、良い品物を売って世界中から金を集め、その金で石油を買って電気を起こし、世界中から資源や食べ物を買ってぬくぬくとやっていたのに、どこかの歯車が一つ狂えば、全部がたがたになってしまうんだな。

昔から、金持になるのは大変だが、貧乏になるのは簡単だというけれど本当だ。日本が金持になるまでには五十年もかかったのに、貧乏になるには、たったの十年しかかからなかったということか」

「そうなのよ。日本人は働きすぎだから、どこかの国と同じに、一年間に何時間以上は働かないようにしろ、なんていっていたけれど、日本は天然資源らしい資源が何もなくて、最大の資源が我慢強くて働き者の人間だったのね。今考えると、本当は働きすぎるほど働いてやっと何とかなっていた程度の国だったのに、そのことを忘れてしまっていたから、こんなになってしまった。

でも、世界第二の工業大国だった日本の土台がこんなにもろいとは、夢にも思わなかったわ」

「あんなにせっせと働いていたのが、今となっては夢の世界みたいだ。今じゃ、働きたくて

も工場もオフィスもなくなりかけている」

「ホント……」

礼子は、憂鬱そうな表情で窓の外に目をやったが、車が国道から桃園村への道に入ると、ほっとしたようにいった。

「あなたみたいに、いざとなれば逃げて帰れる桃園村みたいな場所のある人と結婚して良かったわ。わたしなんて、都会へ出て何代も過ごしてしまった家に生まれたから、こんな時はどうしようもないもの」

車が田園地帯に入ると、礼子はしばらく黙ってあたりを見廻していたが、やがて何かに気づいたようにいった。

「この間までと違って、畑に出ている人がばかに目につくわね」

「ああ。桃園村でも、今年になってから村へ戻った人がずいぶん多いからな。ぼくが三番目だったけれど、今じゃもう五十人以上帰って来ただろう。家族も連れて来るから、村の人口は二百人以上増えて、子供の数も昔に近づいてるから、来年は、村の分教場を再開できるらしい。小学校も空いていた教室がいくつか埋まったそうだ。

そのぶんだけ、都会の人口が減って、高層ビルもがらがらになってしまったんだな」

「帰る先のない人は、どうするのかしら」

「総人口が減ってるから、まだ日本中に過疎地はいくらでもある、といっても、放置してあった空き地で簡単に作物ができるようにはならないけれど、ほかに生きる道がなければ、そこに入植するほかないんじゃないか。

この間までは、農地をつぶして工場にすることばかり考えていたけれど、今度は、工場をつぶして農地にする番か」

そんなことを話しているうちに、車は家に着いた。礼子は、まるで自分の実家に帰ったようにほっとした表情になって、古い建物を見上げた。

本山が桃園村に戻ってから四年、礼子が来てから三年の歳月が流れた。

礼子は、結局、会社の仕事へ復帰することなく、桃園村に居ついてしまった。一度だけ夫婦で東京へ行き、家財道具を桃園村へ送り出したが、運賃はびっくりするほど高くなっていた。それ以後、東京のマンションは買い手もなく閉めたままで、二人とも二度と東京へは帰らなかった……というより、もう帰れる状態ではなくなっていた。

水道は時間給水になり、送電も一日十時間だけになっている。マンションの住民も半分以下に減っているが、貯水タンクに水があるうちに自分の家の水槽を満たそうとするので、ちょっと油断すれば水が使えなくなるのだ。隣人の顔も知らずに暮らせる自由な都会生活のおかげで、立派なコンクリートの建物の中の生活は砂漠のようになりかけていた。

それに、日本の外貨準備が底をつきかけているため、食料事情はますます悪くなったばか

りか、生産量そのものが激減している石油が圧倒的に不足していて、トラック便はかつての十分の一も動いていない。東京では新鮮な野菜を買うことさえむずかしくなっていた。

いや、農村でさえも、畑では換金作物だけ作って自家用の野菜はスーパーマーケットへ買いに行くような近代的経営に切り換えていた農家は、慌てて野菜や芋を植えつけたり、知り合いに頭を下げて米や麦を借りたりし始めていた。

そこへ、まさに弱り目に祟り目、だめ押しのように世界的な異常気象が二年続き、食料を輸出する余力のある国はほとんどなくなった。いや、たとえ充分な生産力があっても、今後も続くかもしれない異常気象にそなえて国内の備蓄に廻すから、外国には出廻らなくなってしまうのだ。

贅沢品の新型電気器具が消えてなくなっても人間は生きていられるが、食料なしには生きていけない。いざとなれば、国単位では自分の国のことを第一に考えるし、地方単位では自分の地方、町村単位では自分の町村、そして、個人は自分の家族を優先するのが自然の姿である。おかげで、耳ざわりの良い進歩思想にもとづいたきれいごとは見事に吹っ飛び、地球規模のエゴイズムがむき出しになった。

もともと、前世紀末のウルグアイ・ラウンド農業交渉では、農産物輸入国は市場を解放する義務がある一方で、輸出国には輸出義務がない。広大な農地のある輸出国の安値攻勢によって日本の農業は絶滅寸前まで追い込まれていたのに、異常気象で大幅な減産になれば、今

度は大生産国が平気で輸出を停止する。国際社会は、けっして美しいヒューマニズムに裏打ちされた助け合いの世界ではなかったのだ。

石油をふんだんに使って、ようやく食料自給率四十パーセント台を維持していた日本の農業生産は、ほとんど息の根を止められそうになった。

江戸時代の日本では、一キロカロリーの人力を使えば、十キロカロリーから二十キロカロリー相当の米が取れた。化石燃料をふんだんに使える社会と違って、昔は人力が動力の大部分を占めていたが、伝統的な農法なら、太陽エネルギーだけで本当の自給自足ができた。

ところが、高度に発達して機械化した農業では、二〜三キロカロリーのエネルギーを使っても、わずか一キロカロリー分の米しか取れなくなっている。石油輸入量を大幅に減らさざるを得なくなった日本が、窮地に追い込まれたのは当然だった。

しかも、国内の農地が五百万ヘクタールしかないのに、日本が輸入する食料の生産のために使っている海外の農地は、最盛期で何と千二百万ヘクタールもあった。その農地で取れた作物をまた膨大なエネルギーを使って輸入しながら、そんなことも知らない国民が贅沢な暮らしをしていたのである。一億二千万人を越す人口がありながら、自分の生命のもとをここまで外国にあずけて平然としていたおめでたい国は、人類の歴史上かつてなかったのではなかろうか。

第二次大戦後も、深刻な食料難が起きたが、あの頃の日本の農業人口は五十パーセントに

近かった。都会でサラリーマンをやっていて、統計上は農業人口のうちに入らない人でも、農村出身の農業経験者が大勢いたし、農地の手入れも良かった。

世界の先進国の大部分を敵に廻して戦争をするなどという空前の愚行をしたために、食料生産ができなくなっただけだから、基本的には、完全に食料が自給できる条件が整っていた。ところが、平和な工業国に変身した日本は、膨大な国家資金を注ぎ込んで農民の意欲を失わせ、実質的に国内農業を放棄する政策をとり続けた。

そして、ほぼそれに成功したところへ、世界規模の食料不足が襲ってきたのだった。わずかに残った農民でさえ、石油なしでの農業の経験がない人が過半数になり、農業機械のオペレーターはできても、自分の力で土を耕す伝統的な農業のできる人は、ほんの少ししか残っていなかった。

今や経済大国でも工業大国でもなくなった日本では、石油の国家備蓄もほとんど尽きはてていたが、同情して石油や食料を無償で援助してくれる国があるはずもなかった。どこの国にも余裕がなくなっていたし、かつては膨大な経済援助をした国々でさえ、自分の身を削ってまで日本を助けたい、と思ってはくれなかった。たとえ、いささかの余裕があったとしても、日本は、身を削ってまで助けたいほどの〈愛される国〉ではなかった。

こうなれば、残された道は、飢え死にするか、以前のように泥にまみれて働くか、二つに一つしか道はなくなっていた。

終わり疑わしきことは……

ここまで話すと、本山は目を閉じて言葉を切り、大きく息をついた。

しおりが、机の上に置いてあった眼鏡をかけながら、ちょっと心配そうに長老の顔色を見た。

「おじい様。具合がお悪いのじゃありませんか」

本山は、頭を横に振った。

「いや。どこも何ともないから、心配しなくてもいい。ただ、今になって食料不足になっていたあの頃のことを思い出すと、何ともいえず懐かしいのだよ」

桃園学舎の部屋を二つつなげた会場の外にまであふれている聴衆の間から、軽いどよめきの声が上がった。

「とても辛い時期ではなかったのですか」

しおりが、みんなの気持を代表するように質問した。

「辛いといえば辛かった。しかし、あの頃は、誰にも納得できるはっきりした目的をもって

働いていたし、働いた結果が目に見えていた。人間、ああいう時は、辛さより先に張り合いを感じるものらしい。

あの当時の日本は、まるで急な坂道をずるずると滑り落ちるような状態だった。弱体化した政府は、それなりにいろいろな手を打ったらしいが、すべて裏目に出てしまった。

民主主義社会では、昔の封建社会などと違って、優れた人材を選挙で選ぶのだから、どんな状況にも適応できる、というたてまえなのだが、実際は、選ぶ方も選ばれる方も、目先のことしか考えられないわれわれのような凡人ばかりなのだ。それに、緊急の事態になった場合、本当にものごとの本質がわかっている人物なら、責任の重さに恐れをなして選挙になど立候補しない。結局は、責任感に乏しくて口の達者な人物や、名の知られた芸能人やスポーツ選手ばかりがしゃしゃり出て選び出される。

というより、日本の民主主義では、そんな人物だけを政治家として選びだすような仕組みができ上がっていたから、世の中が激しく変わる時には何の役にも立たない才能の持ち主しか、政権の座につけなかったのだ。

そのうちに、桃園村にも、腹を減らした流民のような人があとからあとから来るようになった。最初のうちは、われわれも芋や米などを売ったり交換したりしていたが、こちらもそれほど手持ちが豊富ではないから、しまいには断るようになった。

そのうちに、暴徒が食料を奪いに来るという噂が流れたりして、駐在所の警官一人だけではどうにもならないから、こちらも猟銃を持っている人から銃を借りて、自警組織を作ったりしたものだ。

桃園村では、幸い大きな騒動は起きなかったが、それでも、五十人ぐらいの流民らしいグループが押しかけて来てにらみ合いになったことはある。こちらも、若い村民が増えていて威勢がよかったし、銃も何挺か揃っていたから、空へ向けて派手に空砲で威嚇射撃をやると、相手の方がおじけづいて逃げて行った。

しかし、この地方でもそうだが、暴力団と組んだ暴徒に襲われて、銃撃戦になった土地は方々にあると聞いている。ただ、そういう騒ぎは、どこでも農民側の一方的な勝利に終わったらしい。不意打ちならともかく、準備して待ち構えているところへ攻めて来たのでは、軍隊ならともかく、烏合の衆の暴徒が地理にくわしい地元民に勝てるはずがないからだ」

「そんな物騒な期間は、どれぐらい続いたのですか」

と、しおりが尋ねた。

「二年足らず……そう、一年ちょっとぐらいだったろうか。桃園村でも、二年ぐらいは警戒態勢を取っていたけれど、いつの間にか銃を持ち主に返して、もとの平穏な状態に戻った。駐在所の警官も、時どき自転車でパトロールするほかは、付属の畑で自家用の芋や野菜を作ってばかりいるようになった」

「それほどの食料不足で、飢え死にした人はいなかったのですか」

と、誰かが質問した。長老は、ゆっくりと首を横に振って答えた。

「はっきりしたことはわからない。

今では、餓死者はいなかったというのが公式見解になっているが、この時期に人口がかなり減っているところから判断すれば、実質的な餓死者はかなりあったはずで、公式見解は、政府のいい逃れにすぎないだろう。

たとえば、風邪を引いたぐらいでも、栄養不良で体力がなくなっていれば、簡単に肺炎になって死んでしまうから、普通なら死なずにすんだ人がかなり亡くなったことは確かだ。この村でも、冬の朝なんか、がりがりにやせこけて街道筋で行き倒れになっていた人が何人もいたものだ。仕方がないから村で葬ってあげたが、その人数は、公式には餓死者ではなく、統計上は行路病者となっているのかもしれない。

とにかく、あの頃の日本では、みんな自分の家族が食べるものを作ることだけに熱中していて、それ以上のゆとりはなかった。私にしても、税金も年貢も払った覚えがないから、政府はほとんど何の役にも立たなくなっていたし、国民、特に農民は、大部分の局面では、政府などなくても……というより、政府などない方が、ものごとがうまく行くことを知りはじめていた。

日本というか、日本人が変わり始めたのは、あの頃からだったように思う。強いて大刷新が始まった時期といえば、この食料騒動の頃かもしれない。今にして思えば、あの二年ぐらいの間に、日本人は、ツキモノが落ちたように、ケロっと変わってしまったのだ」

「ツキモノが落ちる、とはどういう状態をいうのですか」

今日は、前の方でメモを取りながら熱心に聞いている原田医師が尋ねた。

「先生に、そう真面目な顔で質問されると困りますが……」

長老は、笑いながら原田医師の方を向いて答えた。

「人間の精神がキツネみたいな妖怪に乗っ取られて、その人が別の人間のように変わる状態を、何かにツかれるといいました。人に取りつくそういう妖怪をツキモノというのですが、おまじないやご祈禱などをしてツキモノが落ちると、人格がまた急変します。私の父に聞いたところでは、太平洋戦争で負けた時の日本人も、まるでツキモノが落ちたようだったということです。

負けるまでは、日本の男は天皇陛下のために死ぬのが目的で生まれてきたのだ、などと口走って目を吊り上げていた連中が、ほんの数日のうちに別人のようにケロッと変わり、天皇制反対、民主主義万歳などといい始めるのは珍しくもなかったそうですからね。

似たような現象が、二十一世紀にまた起きました。今後の世界はボーダーレスつまり国境のない情報化社会になり、生産業の地位は低下するだろうなんていっていた人たちがケロッと変わって、食料を制するものが世界を制する、米を作ることをすべてに優先させよ、なんて平気な顔でいい始めた」

そういってから、本山はまた聴衆全体を見廻した。

「考えてみると、あの食料不足の時期に、日本人は、太平洋戦争後にアメリカから学んだというか押しつけられた生き方が、基本的には自分たちに適していなかったことを腹の底から知ったのだと思う。

あちらは、面積が日本の二十何倍もあり、世界的にも資源の豊富な大国なのに、人口は日本の二倍ぐらいしかないのだから、お話にならないほど豊かだ。ところが、その土地は、ヨーロッパ人が原住民を追い払ったり虐殺したりして奪い取り、そこへまた黒人奴隷を酷使したりして豊かになった社会だった。

しかも、昭和敗戦の当時からみてアメリカは南北戦争後わずか百年にもならない間にでき上がったほやほやの社会にすぎなかった。アメリカ文明は、世界の歴史上でもかなり異常な成り立ちなのだが、それを人類にとって普遍的な理想社会と勘違いしたのが、当時の日本人の大失敗だった。

たとえていうなら、こんなことになるだろうか。

何代か前の先祖が強盗で、村の豊かな家の家族を殺したり追い出したりして、その家を膨大な財産や田畑とともに乗っ取って大金持になった家があるとしよう。子孫たちは裕福だから、高い教養を身につけて、ヒューマニズムだの民主主義だのと立派なことをいって悠々と暮らしている。

それに憧れてまねをしたのが、狭い家に住んでいる子沢山の貧しい農民で、五十年もの間、田畑を放り出してサラリーマンをやりながら必死になって現金をかせぎ、月収だけは辛うじて追いついた。しかし、大邸宅や広大な農場を買うほどの金はとうてい溜まらない。仕方がないから、家族が力を合わせて夢中で働き、給料を貯め込んでは高級乗用車を買ったり、大勢の子供に大学教育を受けさせて、ホワイトカラーのサラリーマンに育て上げたりした。

こうやって、見かけだけは都会人と変わらないような暮らしができるようになったものだから、次第に金持気分になり、なまけぐせがついてしまった。ところが、ある時、国中が大凶作になって、金を出しても食べ物が買えなくなった。もともとは農民だったのだから、自分の食料ぐらいは作り続けているべきだったのに、汚れ仕事をきらって土になど手を触れない。食料がなくなったのであわてて畑へ出て見たが、草ぼうぼうの荒れ放題。農業のやり方さえほとんど忘れている。

貯め込んだ金だけはあるものの、食料の絶対量が足りなければ紙切れ同然だ。このまま飢え死にすれば一巻の終わりだが、遅まきながらはっと目が覚めた。

この、はっと目が覚めた時が、今でいう大刷新の始まりではなかったか、というのが、今度いろいろ考えてみたあげくの私の結論なのだ。もちろん、その当時は大刷新なんていう言葉はなくて、ただみんな必死で働いていただけだがね」

本山長老は、そういって言葉を切ったが、聴衆が息を呑むようにして聞き入っている様子を見て続けた。

「しかし、あの当時の桃園村の明るさは、今思い出すと何とも懐かしい。

太平洋戦争の敗戦の時と同じで、いざとなれば信じられないほど変わり身の早いのがわれわれ日本人の特徴だから、あの時も、ツキモノが落ちると同時に、国中揃っていっせいに反省したのだな。

明治維新の『富国強兵』、昭和敗戦の時の『平和な民主国家』のようにはっきりした目標やスローガンこそなかったが、強いていうなら、大刷新の目標は『自給自足』だったのではないかと思う。

あの当時の政府はほとんど無力で、スローガンを作って宣伝する能力も意欲もなかったが、今度という今度は、上からのお達しや外国のまねではなく、若い人々が自分から先に立って、「けっして、あやまちは繰り返しません」という反省の言葉を掲げて、工業社会から農業社会への転換が始まったのだ。

太平洋戦争の後では、日本式の農業が古くさくてアメリカ式の工業が新しかったのかもしれないが、大刷新では、その反対だった。工業のおかげで飢え死に直前のひどい目にあった若者たちは、自分の土地で自分の食べ物を作り、生活の基盤を自分の目ではっきり見ながら生活することこそが、もっとも新しい生き方だと感じたのだ。

とにかく、石油が貴重だから、稲刈りの時に、広い水田でコンバインを動かす時ぐらいしか農業機械は使えない。もちろん、冬にトマトやきゅうりを作るための燃料になどはとてももったいなくて使えなくなっていた。やむを得ず、昔ながらの農具を物置から引っ張り出して使い始める人も増えた。

父は、晩年になってまた鍛冶屋ができる嬉しさで若返ったようになり、孫を相手にせっせと農具を作ったり修理したりの生活を始めた。もちろん、二人ではすぐに手不足になって、若い人が一人弟子入りした。

私はもともとが機械技術者だから、会社を退職した時に譲ってもらった工作機械を使って機械の部品を作ったりして、その技術を息子や弟子たちに教えた。電力は、電灯用が主力になっていたから、昼間は余っていて動力用にも使えた。この点は、地域ごとの水力発電になった今もあまり変わりがない。

その頃になると、化学肥料も農薬もほとんど手に入らなくなっていたから、村の農業生産力を増やそうとして、われわれは、堆肥や下肥の使い方の研究に熱中した。毎日、夕食のあとはどこかで農業技術の研究会をやっていたものだ。坂下の敏郎さんのお父さんのような古くからの篤農家も、われわれのように中年で帰農した組も、村で生まれ育った生え抜きも、親に連れられて村へ帰ってから成人した若者も、つてを頼って桃園村へ入植した家族も、村でできる作物だけでたっぷり食べられるようにしようと、年齢を越えて協力し合っていた。

あとで知ったのだが、同じような現象が日本中で起きていたらしい。

この頃に起きた変化をまとめて、後には大刷新と呼ぶようになったのだが、何度もいうように、けっして政府が旗を振ったわけではない。大部分の政治家や官僚は、税収も政治資金も集まらなくなるような社会に反対だったから、日本をもとのような経済大国、工業大国へ戻そうと虚しい努力をしていた。いわば、国民と反対の方を向いていたのだ。

こういう政策も少しは効果があって、もともと圧倒的に競争力のあったごく一部の製造業だけは、辛うじて国内産業として生き残ることができたが、かけた費用からいえば微々たるものだ。

だが、大部分の国民は、もう工業に見向きもしなかった。表向きは餓死者が出なかったことになっているものの、都会の住民たちは、身近な者が実質的には飢え死に同然の死に方をするのを見たし、農村では、飢えた都会人が流民になってさまよい、行き倒れになるみじめな様子を見せつけられた。

自分の身は自分で守らなくてはならないことを、身に沁みて知った日本人は、昭和敗戦の時と同じように、あっという間に大反省して方向転換をしてしまったのだ。まさに、ツキモノが落ちたようだったよ。

こうして、かつてはあれほど憧れの対象だった都会の生活も、大刷新に入った頃には、まるで麻薬扱いになっていた。目先だけ快適だが、いずれは社会全体を破滅させる危険な生活

というわけだ」

「私ぐらいの年齢だと、その頃のことをうろ覚えに覚えていますよ。こんな七五調の囃子言葉がありましたね」

原田医師は、節をつけていった。

「便利な生活いのち取り……田畑を耕して生き残れ」

「そうそう」

長老が、懐かしそうにうなずいた。

「確か、あの頃は、分教場が桃園村小学校に昇格してしばらくたってからで、当時の校長先生が作ったスローガンですよ。子供たちは毎朝それを唱えてから授業を始めたということでしたな」

「その通りです。水田や畑で実習をする時は、そのスローガンをみんなで唱えながら外へ出て行ったのを覚えています」

「田畑の実習は、今でもやっていますが、そのスローガンははじめて聞きました」

しおりがそういいながら、ノートに書きつけた。本山は、うなずいて続けた。

「とにかく、あの頃の村は、一つにまとまって燃えているような感じだったな。

耕地を少しでも増やしながら、村のどの家でも自分の家の井戸で水を汲み、自分の家の落ち葉や村の入会地の草で堆肥を作り、自分の家の雑木林で燃料をとり、自分の田畑で作った

作物で生活できるようにしよう、という目標を掲げて必死に働いたものだ。そういう作業を続けているうちに、すぐはっきりわかるようになったのは、古い生活スタイルを残していた農家ほど、簡単に自給自足の生活に戻れるということだった。

そのことがはっきりわかるにつれて、若い人々は、真剣に村の伝統的な生活方法を学び始めた。幸いなことに、大刷新の頃はまだ太平洋戦争以前のことを覚えている人が生き残っていたから、物置や蔵から古い道具などを見つけ出して、使い方を習ったりしたものだよ。

私の父は、その当時の青年たちの動きを見て、面白いことをいっていた。東京時代の人が古いやり方を批判して破壊した時の十倍ぐらいの熱心さで、古いものを復元しようとしている、というのだ。

とにかく、桃園村始まって以来、村民があれほど心を一つにして必死に働いた時期はなかっただろうな。いや、桃園村に限らない。本当に苦しい最中だったが、日本中が新しい生活への希望に燃えているような感じがした。

私の父は、昭和敗戦の時に二十代だったから、あの当時のことをよく知っていた。戦争に負けて国中がめちゃくちゃになって、どん底の生活をしていたのに、みんな妙に明るかったそうだ。ところが、その昭和敗戦の時と比べても、大刷新の頃の方がみんなずっといきいきして楽しそうにしているというのが、父の感想だった。

しかし、今になって考えてみれば、これは当然だと思う。人類が長い期間を生き延びてこられたのは、近代科学技術のおかげではなく、伝統的な生活をきちんと守ってきたせいであることは明らかだ。それに、人類は近代工業を発達させる目的で生存しているわけでもない。

もちろん、伝統的な生活は、近代的な生活よりずっと不便だが、その不便さのおかげで、人類は種族としての生命力を維持しながら、何百万年もの間生きてこられたのではないだろうか」

「その通りです。賛成、賛成」

と、原田医師が拍手しながらいった。

「動物の体は、不足に耐えるようにできています。人間でも、膵臓がインシュリンを分泌して糖分の過剰に対抗するぐらいしか、過剰に対する防御はできません。だから、東京時代の日本人みたいに、体も動かさずに食べたいだけ食べるような生活をすれば、体がおかしくなって、子供のうちから成人病にかかったりするのですよ。

あまり極端に労働量が多くて食べる量が少なければ、衰弱して病気になりやすいのが当然ですが、今ぐらいの労働量なら、田畑で一日中せっせと働く生活の方が、部屋の中でコンピューターをいじったり文書を作ったりしているのより、ずっと人間に適した生活なのです。

東京時代に、日本が平均寿命世界一だった時代があったことをご存じでしょう。

ところが、実際に平均寿命をのばしていた主役は、生まれつき便利な生活をしていた世代

ではなく、若いうちは江戸時代と大差のない生活をしていた世代の人々でした。不思議なようですが、私が医大の学生時代に定年を迎えられた教授が、こんなことをいっておられました。

その先生が医大の学生だったのは、東京時代の最盛期が始まった一九六〇年代だったそうですが、老人特有の症候群を〈老人病〉と呼んでいたそうです。ところが、卒業してしばらくたつと、同じような状態がずっと若い中年世代にまで広がって、〈成人病〉というようになりました。

さらに、それから二十年もたって先生が教授になられた頃には、まったく同じ症状が十歳前後の子供にも普通にみられるようになり、〈小児成人病〉と呼ぶようになりました。東京時代がもっとも栄えた頃には、都会の小中学生の半数以上に、肥満、高血圧、糖尿など、何らかの形でかつての老人病の徴候があった、というのですから、物質的に豊かになって、経済指数さえ右上がりになればあとはどうなってもかまわないというタイプの文明が、人間の心身に及ぼす影響の恐ろしさがわかります。

こんな状況では、伝統的な食事をしてよく歩いた古い世代の人の方が健康だったのは当然ですから、抗生物質ができて細菌による感染症で死なくなると、どんどん長生きしました。日本人の平均寿命が短くなった理由は、豊かになってから生まれ育った世代、つまり子供の頃から小児成人病にかかっていた世代が五十代ぐらいでばたばた亡くなるようになって

からだということは、私ぐらいの年齢の医者の間では常識になっています。

しかし、前にもお話ししたように、私が医大で教育を受けた偉い先生方は、次々に現れる新しい病気を相手に苦労しておられたのに、私の世代の医者がそういう病気の患者さんを診る機会があったのは、駆け出し医者だった頃だけで、最近では次から次へと新種の病気が現れることもありません。今は、病気の種類がかなり減少傾向にあって単純化しています。

大刷新以後に育った世代は、東京時代に比べると身長が低く足が短くなり、ずんぐりした体型になる傾向ですが、とにかく体力があり健康な人が多いのです。少なくとも、今の桃園村小学校の生徒には、小児成人病の患者は一人もいません。虫歯のある子もめっきり減りました。人間は、ただ見かけだけが西洋人のようになって、ひょうろひょろと背が高ければいいというものではないのです。われわれは、民族的にもっとも自然な状態に戻っているのかもしれないし、このままの状態が続けば、二十一世紀後半の日本がまた世界一の長寿国になることを私は信じています。

まさに、長老のおっしゃる通りなのです」

本山長老は、原田医師の方を見てちょっと頭を下げてからいった。

「そういう医学的根拠は知らなかったが、私個人の経験だけからいっても、東京時代の大都会の生活が健全だったとはとても思えないのだ。結果論かもしれないが、大刷新は、見当違いの方向へずれてしまったわれわれの生活を人類本来の道へ戻す壮大な試みだったのかもし

れない。

その努力を神仏が認めて下さったのか、幸いなことに、大刷新の頃から三年ばかり順調な天候が続いたおかげで、食料の余裕もできてわれわれの生活は年々良くなった。足りなかった食料が何とか足りるようになり、やがてわずかながら備蓄ができるようになったあの頃の充実した感じは、今思い出しても本当に懐かしい。人間は、目に見えて努力がむくいられるのなら、普通では考えられないほどの能力を発揮できるものだと、つくづく思ったものだよ。

その頃、私は、桃園村の雰囲気が、私の入社して間もない頃のアラン工業によく似ているように感じることがしばしばあった。

私の家は作業場が広くて若い弟子がいたし、家内も私も若い人の相手をするのが好きな方で、おまけに、父がドブロク作りが上手だったもので、夜になると村の青年の溜まり場のようになってしまった。

そこで、毎晩のように彼らが話すことを聞いていたのだが、自分が楽をしようというよりも、どうすれば、今の荒れた田畑を良くすることができるか、米を一俵でもよけいに取るにはどうすればいいか、最小限の肥料で良い品質の野菜を作るためには、どういう時期に施肥すればいいか、というような議論ばかり真剣にやっていたものだ。

東京時代の最盛期の工場でも、われわれ若手の技術者たちは、同じような熱っぽさで工業

製品の品質管理や生産性の向上について議論した。会社を出てからも、近所のバーへ繰り込んでまで、延々と機械の話ばかりしていたものだが、その雰囲気と実によく似ているんだな。

桃園村の青年たちが、農業生産について議論するのを聞きながらいろいろ考えているうちに、私は、ふと気づいたことがあった。日本が驚異的な成長を遂げて一流工業国になったのは、日本人が工業に向いていたせいではなく、骨の髄までの農民だったからではないか、ということだ。

東京時代がもっとも華やかだった頃の日本の大量生産技術は、欧米の先進工業国の発想とかなり違っていて、彼らが手も足も出せないほど整然としていた。かつて世界の最先端をいく工場に勤務していた頃の私は、しばしば外国人を案内して工場を見せたものだが、一九八〇年当時の日本は、まさに世界のお手本だった。

西洋人にしてみれば、当時の工業製品の基本的な原理はすべて自分たちが考え出したという自負があるのに、なぜほとんど独創性のない日本人が、量産技術に関してだけ、あれほど優れた才能を発揮できるのか不思議でならなかったようだ。

しかし、うちの作業場での青年たちの議論を毎晩のように聞いているうち、私には少しずつ事情がわかってきた。日本人に近代工業の特別な才能があるというのは、ただのうぬぼれにすぎず、たまたま、日本の農村の伝統的な稲作システムをそのまま工業に応用したら成功

してしまった、だけではなかったかということに気づいたのだ。

どこの農村でも似たような状況だったろうが、桃園村でも、昔から村中できちんと時期を合わせて助け合い、いっせいに田植えをし、いっせいに収穫し、いっせいに出荷した。出荷が終われば、今度はみんなで集まって村祭りをやる。あの終始一貫した整然たる生産システムは、そのまま自動車にでもテレビにでも応用できる。日本の農業の心は東京時代の大量生産システムそのものだったんだよ。

一人の強力なリーダーが命令して村人を動かすのではなくて、全員が自主的に動くのだが、だからといって、一人一人が自分の流儀にこだわって個性を発揮していたのでは、稲作の能率は上がらない。この点は工場での大量生産と同じで、一人だけが特別に優秀な製品を作ろうとすれば、工場が混乱するだけだ。

だから、欧米諸国という追いつき追い越すべきお手本があった間、つまり、何をどうやって作れば良いのかがわかっていた間は、欧米のやり方を稲作式に改良して世界中が目をむくほどどうまく機能した。

ところが、お手本を追い越してしまって、自分でまったく新しい道を切り開かなくてはならなくなると、この方式は急に力を失った。つまり、われわれは二千年もかけて稲作文化を洗練させることばかり考えてきたから、そのパターン以外のことはできなくなっている……のじゃなかろうか」

そういって言葉を切ると、本山は、そばにいた晴彦の顔を見ながら尋ねた。

「三田村君。きみは、どう思う?」

「そ、そうですねえ。うーん」

長老にいきなり名指しで質問された晴彦は、宿題を忘れたのに当てられてしまった小学生のようにもじもじしながら口ごもったが、すぐにいった。

「学校の講義で聞いたのですが、東京時代の日本へ家庭用電気器具のデザインの研究に来たヨーロッパの家電専門の工業デザイナーが、どこのメーカーもほとんど同じデザインのを作っているので参考にならないといって、がっかりして帰ったそうです。

日本では、あまり突出したデザインの製品を作っても売れないから、せいぜい米の品種の違いぐらいの差別化をしたと考えられないでしょうか。普通の人が米粒を見ただけでは、品種や産地はなかなかわかりませんから」

「なるほど、うまいことをいう。私も同感だよ」

本山長老は感心したようにいってくれた。

「それも、一つの例になるだろうと思うが、東京時代の日本は、見かけは近代工業国だったが、中身は弥生時代から築き上げた稲作農業国家そのものだったのだよ。

私は、青年たちの議論を聞きながら、われわれが近代工業で成功したのは、たまたま工業の発展段階が日本人の得意技、稲作の段取りにぴったり合ったからなので、五十年も続いた

のは単に幸運だったのにすぎないのではないかと思った。しかも、私の若い頃にアラン工業で働いていた若手の技術者たちよりも、桃園村の青年たちの方がずっといきいきしていて楽しそうだった。

工業社会では、いくら働いたところで会社は他人のもので、退職すればおしまいだ。何年かたてば名前を覚えている人さえいなくなる。大刷新後の農業社会では、大刷新の嵐の中で、東京時代のような西洋式の社会保障はけし飛んでしまったが、税金を払うために働いていた時代と違って、桃園村なら収穫の九十パーセント以上が自分のものになる。しかも、自分の田畑をせっせと手入れして土を肥やせば、結果として来年から収穫が増えるから、張り合いがまるで違う。

つまり、東京時代の工業社会は、われわれ日本人にとってかなり無理な状況を我慢することでようやく成り立っていたような気がしてならない。同じ能力で機械の生産をするよりも、米を作る方がはるかに日本人向きで無理がないのではないかと思ったのだ。

今になって考えると、その時の私の予測は、かなり正しかったようだ。実際、桃園村が昔のような農村に戻っていくにしたがって、みんなの顔色が良くなった。その理由は、原田先生がいわれた通りだと思う。

最初のうちこそ、都会で生まれ育った若者たちの中には、土に触れるのさえいやがる者も大勢いたが、ほかに生きる道がないことがわかると、すぐに慣れてしまった。人類は、もと

もとがコンクリートの箱の中で発生して進化したのではなく、土の上で生まれたのだから、そうなる方が自然なのだろうね。

こうして、本当に苦しかった三年ぐらいが過ぎてからは、年ごとに変化がはっきりわかるほど生活が楽になったが、いくら食料の備蓄が増えても、われわれは、もう二度と経済効率第一の生活に戻りたいとは思わなくなっていた。

今の村長の父上、先代の村長が、桃園村の古い掟を見つけたのはその頃だった。明治維新の時に、当時の名主だったご先祖が、内容があまり保守的なのを恥じて隠しておいたらしいのだが、土蔵を片づけていたら出てきたといって公開して下さった。

その頃は、もう、村議会も廃止してしまって、江戸時代さながらに長老の寄り合いで村のことを決めるようになっていたが、当時の長老たちは、昔の掟の第一条を、改めて村の基本的な掟に採用した。

村長によると、桃園村では江戸時代から、名主と村方三役は〈入れ札〉つまり選挙で選んでいたそうだ。これは、そう珍しいことではなくて、江戸時代の後期になると日本中どこでもやっていたらしいが、幕府は入れ札に対しては消極的で、禁止令もたびたび出ているそうだ。しかし、禁止令がたびたび出るというのは、みんながやっていた証拠だから、昔も昔なりの民主主義みたいな制度が、自然発生的にできていたのだな。

上から天下ってきた民主主義と昔ながらの民主主義のどちらが優れているのかわからない

が、とにかく、わが桃園村では、政府の締めつけがゆるむと、いつの間にか古いやり方に戻ってしまった。どうやら、日本の農業は、その土地土地で好きなようにやらせておく方が、上からごちゃごちゃ指図するよりよっぽどうまくいくようだ。

ところで、長老の寄り合いが改めて決めた桃園村の掟は、最近では、大刷新の精神そのものだとして高い評価を受け、あちこちの村で基本的な掟として採用するようになって有名になったから、皆さんはもちろんご存じだな」

長老が、そういって会場を見廻すと、聴衆は声を揃えて、小学生の頃から何かにつけて唱えた掟を斉唱した。

「終わり疑わしきことは、けっして着手すべからず」

「その通りだ。たとえどんなに便利で儲かることだと思っても、長い目で見て少しでも怪しげなことは、けっして始めてはならない。〈終わり疑わしきこと〉は、破滅への第一歩なのだ。

目先の便利さにつられて科学技術を乱用し、水や空気までも汚してしまった世代の生き残りである私としては、そのことを何百回でも繰り返して、若い世代の皆さんにくれぐれも伝えておきたい。

さて……」

そこまでいうと、長老は、机の上においてあったコップの水を飲んでから、また会場を見廻した。

「とりとめのない話だったが、大刷新前後の情勢について私が話せるのは、この程度だ。あれほど強い権限を振り回して国民の上に君臨した民主政府が、どういう過程を経て今のようなただの調整役になってしまったかについては、今の中年の世代なら私以上によくご存じのはずだから、これ以上話す必要はないだろう。

とにかく、政府の実態はまるで変わってしまった。江戸時代の各藩が裁判権まで持っていたほどではないにせよ、食料生産力のある市町村の力があまりに強くなってしまったから、憲法も法律ももとのままなのに、東京時代と大刷新以後の日本が別の国のようになってしまったことも、よくご存じだと思う。

日本では、実生活のためには法律などあまり重要ではない。外国人には不思議がられるようだが、軍備の保有を厳禁する憲法があっても平気で強大な軍備を持てたし、法律の定めなしに、官僚が平気で法律以上に拘束力のある行政指導をしたのだから、法律があってもなくても大した問題ではない。その時々の力関係だけですべてが決まるのが昔からの常識だ。

また、外国との関係については、私自身があまりよく知らないので、くわしく話せなかった。ただ、今では、国際的にほとんど重要でなくなった貧しい農業国の日本に強い関心を抱いてくれる国がないため、外国人がほとんど来なくなっていることは、よくご承知だと思う。石油資源が世界的に枯渇しかかっていて、飛行機は最盛期の千分の一も飛んでいないそ

うだから、島国の日本は、昔のように遠い極東の国に戻ってしまったのだ。

防衛は、アジア安保に加入しているが、これは中国が中心になった安全保障体制で、日本が攻められた場合はまず自衛をして、負けそうになったら同盟国が援軍を送ってくれることになっている。しかし、日本は同盟国の信用があまりないから、軍隊が領海から一歩でも出れば、同盟国軍からでも攻撃されるというような、かなりの不平等条約らしい。

今の日本は、けっして鎖国しているわけではないが、外貨不足のせいで、日本人はほとんど外国へ行けなくなった。外国人も、もし日本に来たとしても国内の交通があまりにも不便で身動きできないから、旅行者はほとんどいない。結果として、半分鎖国しているような状態になっている。外国との条約など、平等でも不平等でも大した問題ではないのだそうだ。

外国のことといえば、最後に一つ話しておきたいことがある。前に話したM国のリムさんが、大刷新の後で手紙をくれた。ちょっと古い手紙だが、最後の部分がとても印象的だったので読んでみよう」

本山長老は、胸のポケットから眼鏡を出してかけると、古い手紙を広げてぶつぶつと独り言をいった。

「さて、どこから読むかな。このあたりからが良かろう。

――M国も、最近では世界で有数の豊かな国になりましたが、同時に、かつての日本が直面したのと同じようなむずかしい問題を山のように抱えるようになりました。かつて、私があ

なたにいった、クニガ病、アチラ病、カネガ病など、すべての症状がすでに現れかけております。しかも、豊かな生活に慣れきったところで世界的な石油不足に直面し、経済の運営も次第にむずかしくなってきています。

今の私たちがもっとも重大な関心を払っているのは、先進諸国の社会保障の方法でも人権問題でもなく、農業を放棄しかけていた高度工業国家の日本が、自給自足のできる農業国へと見事に転換していったその過程です。

もともとが農業民族だった私の民族の社会は、今でも、基本的には何千年もの間に築き上げた農業社会の風習を色濃く残しています。そういう東アジア的な部分を通じて、日本の経験から何かを学べるのではないかという期待が大きいのです。

日本人が、農業社会へ大転換を遂げた経験と成功から普遍的な原理を発見して、われわれに教えていただけるなら、恐らくそれは、アメリカで生まれた自動車の大量生産技術などとは比べものにならないほど価値のある人類の宝になるでしょう。

間違いなく、日本人がアジア……いや、世界の文明に対してできる最大の貢献になるだろうと信じております――」

手紙は、これで終わりだ。

私の話も、ここまでだ」

本山長老は、そういって軽く頭を下げると、手紙を畳んでゆっくり封筒にしまった。しか

し、聴衆は拍手もせず、ただ黙ってその手元を見詰めているばかりだった。

自らのために給す

「晴彦ちゃん、いる?」
いつもながらの、のんびりしたしおりの声が聞こえた。
「ああ、いるよ」
作業場兼アトリエで藁草履を作っていた晴彦は、手を休めずに振り向いていった。開けっ放しの入口から、しおりの白い顔がのぞいた。
「これ見て……」
しおりが両手を広げるようにして入って来た。藍染めの衣装を着ている。
「いいでしょう。これ、昔の作業着だって。うちの古い箪笥(たんす)に入っていたのよ」
「きみの顔が、ますます白く見えるね」
「そう?」
嬉しそうな顔をガラス戸に映して見てから、しおりは改めていった。
「それで、ちょっと、相談があるんだけれど」

しおりは、中に入って戸を閉めると、晴彦が手作りした頑丈な腰かけに座った。
「どんなこと？」
「桃園学舎で新しい講座を始めたいんだけれど」
「今度は、何だい」
「着物の仕立て」
「着物の仕立て？」
晴彦は、しおりの顔を見詰めた。
「うん。習いたい人はいっぱいいるんだけれど、先生がいないの。晴彦ちゃんは、誰か適当な先生を知らないかしら」
「着物の仕立てか」
晴彦は、手を休めて首をかしげた。
「ちゃんと教えられる人は、あまりいないだろうなあ。しおりちゃんのお母さんにも、心当たりがないのかい」
「うちの母ぐらいの年の人だって、着物を着て暮らした経験なんてないでしょう。もちろん、大勢の人に仕立てを教えられるほどの人なんて思いつかないって」
「そうだろうと思う」
晴彦は、当然だと思ってうなずいた。

「でも、何で今さら着物の仕立てなのさ」
「ずっと前からあった話なんだけれど、最近は、織物が前よりも手に入りにくくなったのよ。三年ぐらい前までは、東京時代に捨てるほど作った布がまだ残っていたけれど、最近はそれもタネが尽きかけてきたから、みんな困っているの。晴彦ちゃんの草履講座が、靴がなくなりかけてから始まったのと同じで、今度は着物を作ろうというわけ」
「草履や草鞋は、藁さえあればできるけれど、着物も洋服も布が必要なことには変わりないだろう。なぜ、布が足りないと着物の仕立てを習いたくなるのかわからない」
「洋服は、それぞれの部分が複雑な形をしているから、大きな布から部分を切り取る時にどうしても無駄がでるでしょう。それに、太ったりやせたりすれば体に合わなくなるし、仕立て直しするのも面倒だから、前みたいに幅の広い布がいくらでも手に入った時代には便利なんだけれど、今の時世向きじゃなくなってるのね。
ところが、着物なら、長方形の一反の布から一ミリの無駄もなしにきっちり切り出せるし、太ってもやせても体に合わせて着られるし、仕立て直しも簡単だし、デザインは模様や柄だけで変えられるから、染め直せば新しい着物ができる。それに、着物用の布は幅が狭いから、いざとなれば自分で織れるし、とにかくいいことずくめでとっても合理的だから、これからの新しい時代向きだと思わない？
村野の芳江さんが、図書館の古い本を参考にして、実際に仕立ててみたらしいけれど、ど

うもよくわからないところがあるっていうから、こうやって古い作業着まで引っ張りだして研究しているんだけど、基礎知識がないもので、わからないことだらけ。結局、正式に教えてくれる専門家はいないだろうか、ってことになっちゃった」

「そうか。着物の方が合理的なのか」

「芳江さんは、これからは着物の時代になる、っていってるわ」

「へえ」

自分の着るものにさえほとんど関心のない晴彦は、お座なりにうなずいた。

「ねえ。晴彦ちゃんの行った美術大学に、そういう専門家はいなかった？」

「服飾美術学科というのがあったから、専門の先生もいたかもしれないけれど、まるで関心がなかったから、寄りついたこともない」

「ふうん」

しおりは、不満そうにいった。

「晴彦ちゃんなら、顔が広いから、知り合いがいそうだと思ってあてにして来たんだけどなあ」

「そんなこといわれても困るよ……でも、ちょっと待って」

晴彦は、記憶を呼び覚まそうとするように、顔をしかめた。

「そうそう」

しばらくたって、晴彦はいった。

「そういえば、うちの叔母の友達で、昔、東京で和裁の学校へ通った人がいたっていう話を聞いたことがある。確か、木田文子さんといったっけ。文子さんは時代おくれだとかいって笑っていたのを思い出した。何度かうちに来たこともあるし、顔も覚えてる。あの人なら、教えられるかもしれないな。

叔母は、今、母屋にいるから、ちょっと行って聞いてごらん。その人はまだ隣の樫木村に元気でいるはずだから、今でも元気なら紹介してくれるかもしれない」

「そう。じゃ、ちょっと行ってみる」

しおりは腰を浮かしたが、急ににこにこしながらいった。

「わたしが仕立てられるようになったら、真っ先に晴彦ちゃんの着物を縫ってあげる。どんな柄が似合うかな」

「きみは、本当に極楽トンボだなあ」

晴彦は、あきれたような声を出した。

「まだ先生も見つかっていないのに、もう着物ができるような顔をしてるんだから。長生きするよ」

「あはは」

陽気に笑いながら、しおりは立ち上がった。晴彦は、彼女の上背のある姿を見ながらいっ

た。

「草鞋から、今度は着物か。何でも昔に戻っていくみたいだな」

「何でも戻るわけじゃないわ」

しおりは、ちょっと頬をふくらませるようにしていった。

「戻る部分もあるけれど、絶対に戻らない部分もあるでしょ。身に着けるものなんかは戻っているけれど、田圃の草取りなんて、昔はしゃがんで作業して大変だったそうだけど、今は手押し式の除草機を立ったまま押して歩けば、簡単に取れるじゃない。わざわざ、またしゃがんで除草するように戻るはずは絶対にないわ。

どんなに便利でも、終わりが疑わしきことはやってはいけないけれど、疑わしくなければ、戻る必要がないのよ」

しおりは、村の掟を引用して晴彦を軽くやりこめた。

「そりゃそうだ」

「じゃ、叔母様の所へ行ってみるわ」

しおりが立ち上がった時、作業場の外で男の声が聞こえた。

「三田村さん。おいでかな」

「はあい。どうぞ」

しおりは、そのまま入口へ行って戸を開けた。

「しおりさんが見えていたのか。これは、お邪魔だったか」

そういいながら入って来たのは、堀江だった。風呂敷包みを抱えている。

「あの絵を仕上げたもので、見て下さらんか」

「もうできたのですか」

晴彦は立ち上がって、窓際に据えてある古いデスクの方へ行った。堀江は、その上に風呂敷包みを置いて結び目を解き、画面を保護する板をはずして絵を立てた。窓越しの明るい光を受けた花の絵は、小品だが素人離れした色づかいで、なかなかの傑作だった。

「まあ、きれい」

しおりは、胸のポケットから眼鏡を取り出してかけ、しげしげと絵を眺めた。晴彦も、二、三歩後へさがってしばらく見てからほめた。

「いい色が出てますねえ」

「思ったよりうまく色が乗ったもので、三田村さんの批評を聞きに来たのですよ」

「堀江さんって、まるで本職の絵描きさんみたいにお上手なんですね」

しおりは、本当に感心したようにいった。

「それほどでもないですよ」

うまく描けたので、我慢できなくなってわざわざ見せに来たらしいが、堀江は嬉しさをこらえて謙遜しながら、しおりの方を振り向いた。

「これ、昨日いただいた織田さんのお宅の花を描いたのです」
「あまりきれいで、うちの花とは思えません」
「織田さんのお宅の花は、いつ見ても見事ですからね」
しおりはうなずいた。
「お天気が順調なせいか、今年は、特に花の色が良いようです」
「確かに、今年は冬が寒くて春になってからはぽかぽか暖かい日が続いて、不順だった去年に比べると、良い年だな。これで、梅雨によく降って、夏がかーっと照ってくれれば、いうことはない。とにかく、夏は暑くなくちゃいけない」
農民の話題は、いつも天候のことへ行き着く。
「夏は日照り気味の方がいいですね」
「日照りに不作なし、っていうぐらいだからな」
「本山長老におととい聞いたのだけれど、昔の東京の夏は恐ろしく暑くて、夜中になっても三十度なんてことがあったそうですね」
「そうとも」
堀江は、昔の話になると急に元気になって大きくうなずいた。
「今になって考えると、あの頃は、いつも夏だったような気がするよ。空にはいつでも入道雲が光っていて、ジェット機が白い航跡を残して飛び交っていた。東

京時代は、本当に輝かしい時代だった。
日本が世界の頂点に立っていたあの頃は、夏休みになると、東京時代のOL……会社などで働いている女性のことを昔はそういったのだが、若いOLさんたちは、どんどん外国へ遊びに行ったものだった。今では想像もできないことだが、何万人という人が大型ジェット機に乗って、ヨーロッパだアメリカだ、グアムだハワイだといって元気に出かけて行ったのだからな。
そして、休みが終わると、みんな真っ黒に日焼けして、外国のおみやげをどっさり買って帰って来た。国際空港は、本当に人が押し合いするほど混み合っていたものさ。夏になっても、小物川で水浴びするぐらいが精一杯の今のきみたちは、本当に気の毒だ」
堀江は、それから十分ばかり、いつものように東京時代を賛美する話をしてから、絵を大事そうに抱えて帰って行った。
「晴彦ちゃんは、堀江さんにいつもあんな話を聞かされているのね」
外へ出て堀江を見送ったしおりは、作業場に戻って尋ねた。
「うん。いっしょに絵を描いている間、ずっとああいう調子だよ」
「あんなにきれいな絵を描ける人が、どうしてあんなことを考えるんでしょ。だって、いくら昔でも、いつも夏だったはずないじゃないの。それに、押し合いをしながら外国へ行って、日に焼けて帰って来るのが、なぜそんなにいいことなのかもわからない

わ。わたし、押しあいも日焼けもきらい」
「あんなことを大まじめにいっていられるから、あんな絵が描ける。堀江さんは芸術家なのさ」
「ふうん」
しおりは、納得しかねるように首をかしげたが、
「そうそう、叔母様の所へ行かなくちゃ」
といいながら作業場を出ると、足早に母屋へ向かった。

「はあい。先生のおつきだよう」
桃園学舎の前で、男の大声が聞こえた。教室の準備をしていたしおりは、急いで出て行った。教室の模様替えを手伝っていた晴彦も、すぐに外へ出た。
体中に刺青をしたたくましい男が、人力車から七十歳ぐらいの女性を助け下ろしていた。
木田文子だった。
「木田先生。ご苦労さまです」
しおりが駆け寄って地面に降り立った文子の手を取った。晴彦も飛び出して行った。
「晴彦ちゃんか。お迎えまでよこしてくれて有難う。わたしも、十年前なら桃園村ぐらいまで平気で歩いて来たものだが、最近、足を痛めてしまったもので、長道を歩けなくなって、

不自由でしょうがない。
そこに荷物があるから、持って来て下さい」
きちんと着物を着た小柄な文子は、はきはきした口調でそういった。晴彦は、人力車に積んであった大きな風呂敷包みを取った。
「これだけですか」
「はい。それに全部入っています」
文子は、しおりに手を取られてゆっくり歩き始めた。晴彦は、約束通りの量の米が入った袋を車夫に手渡した。
「ご苦労さまでした」
「毎度……」
車夫は、それを受け取ってちょっと押し頂くようにしてから、車の後ろの方にしまいながらいった。
「旦那。すみませんが、水を一杯頂けませんかね」
「ちょっと待って下さい」
旦那と呼ばれてちょっと照れながら、晴彦は桃園学舎の中へ駆け込んで、大きなコップに水を満たして戻った。
「この頃は、繁盛しているんですか」

男が水を飲み干したのを見て、晴彦が尋ねた。
「まあ、ぼちぼちだけれど、自分の食い扶持の米だけは作って、あとはこっちで稼がせて貰ってます。とにかく、走るのが大好きなもんでね、これは、おれにぴったりのいい仕事だよ」
「その、刺青は、見事ですね。ぼくは、絵が好きなんだけれど、人の体にそれだけこまかい図柄の絵をうまく描く自信はないなあ」
「うふっ」
男は、自慢そうに自分の体を見た。
「六代目彫よしという名人に彫って貰ったんですよ。いいでしょう。『水滸伝』の九紋龍史進の図柄でね、三年がかりだった。
なあにね、同業者で、車をペンキで塗りたくっているやつがいたもので、おれは張り合うつもりで、園田市に住んでいる彫よし師匠の所へ駆け込んだ。園田市は、近くにこの桃園村みたいに食い物のたっぷりとれる村が多いから、師匠みたいな芸術家の人がけっこう集まっているんだ。
何たって、この稼業は、あまり地味じゃぱっとしねえし、だからといって、大事な車に安ピカのペンキ塗りなんかしたくねえ。やっぱり、車は黒漆仕上げにしたのを丁寧に拭き込んで、こういうふうに艶がないと粋じゃないから仲間うちで幅がきかねえし。でも、それだけじゃちょっとさびしい……となると、てめえの肌を染めなくちゃかっこがつかねえ。そう思って彫って貰ったのが、この九紋龍。
どうです」
男は、自慢そうに両腕を拡げて見せた。胸から腹にかけては、紺色の腹がけをしているが、あとは上半身を全部見せているので、見事な図柄がよく見えた。
「やっぱり、これで走るとまわりの人が振り向いてくれるし、お客さんも喜んで乗って下さるからね。おかげで、実入りは五割増しぐらいになりましたよ。
最近じゃ仲間うちでもちょっと流行り始めたけれど、このおれが元祖みたいなものだからね。彫よしの師匠にも、おかげで客が増えたって感謝されるし、これを彫ってからというもの、悪いことあ一つもないね」
「でも、それ、痛いんでしょう」
臆病な晴彦は、恐る恐る尋ねた。
「もちろん、生身の体ですからね。痛くないはずはない。でも、旦那。誰にでもできることじゃないからこそ、こうやって肌を染めると、仲間うちで幅がきくんですよ。
楽をして、いい思いをしていれば、必ずどこかで無理がくる。おれは、子供の頃からそういって親にきびしくいわれてきたからね。こうやって、いちばん派手だけれど、彫るのがいちばん辛い図柄を選んだんだ」

妙なりくつだと思って、晴彦はちょっとおかしくなったが、笑っては悪いので真面目な顔で聞いていると、

「車屋さーん」

と、呼ぶ声が聞こえた。

「ちょうどいい。うちの年寄りを大崎村まで乗せてやって下さい」

振り返ると、近所の主婦が小走りにやって来るのが見えた。

「へえーい」

男は、そちらへ向かって返事をすると、

「じゃ、旦那。またあとで、さっきのお客さんをお迎えに上がりやすからね」

といって晴彦におじぎをしてから、車の梶棒を握って威勢良く駆けだした。背中の九紋龍が躍動するようで、なかなかさまになっていた。車を見送ってから桃園学舎の中に入ると、うすべり（縁をつけたござ）を敷いた教室では、もう授業が始まっていて、三十人ばかりの女性たちが熱心に説明を聞いていた。

かなり好奇心の強い晴彦も、着物の仕立ては、しおりにまかせておいた方が良さそうだと思って、そっと外へ出た。

今日は曇っているが、晴れていれば暑いほどの季節になっていた。晴彦は、差し当たりすることもないので、役場の方へぶらぶらと歩いて行った。現代の農民は、まったくの自由業

なので、作物さえ順調に育っていれば、あとは何をしていても勝手なのだ。

役場の前にさしかかると、向こうから自転車に乗って来る人がいた。役場の大峰一郎だった。今では、自転車もかなりの贅沢品で、村では、役場と駐在所と桃園診療所のほかにはない。

「三田村さんじゃないか。ちょうどいいや。今ひまかい」

大峰は、そばまで来ると自転車を止めて尋ねた。

「ひまだよ」

「それじゃ、悪いけれど、ちょっとトラックを動かしてくれないかな」

「いいよ。でも、いったいどこへ行くんだい」

「涸谷へ古タイヤを取りに行きたいんだけれど、運転できる人がみんな出払っちまっているんだ」

「じゃ、行こう」

晴彦は、そのまま車庫へ向かった。

「上には、誰かいるの」

「タロちゃんが、手伝ってくれるといって、一時間ぐらい前に上がって行った」

「彼は、力持ちだからいい」

二人は、すぐにトラックに乗って出発した。

「今の季節に、タイヤを取りに行くなんて、何かあったのかい」
晴彦は、古いトラックをゆっくり走らせながら尋ねた。
「うん。県の方から、どうしても油がいるもので、譲ってほしいと頼まれてね。村長もまあ少しぐらいならいいだろうというので、出してやることにしたんだ」
「ふうん」
桃園村にある古タイヤは、今では貴重な石油の原料になっていた。秋の収穫期には、コンバインを動かすために、タイヤと引き換えに業者から石油を受け取るのだが、今ぐらいの消費量なら、あと百五十年分の在庫があるという話を晴彦は聞いていた。しかし、この季節にタイヤを出荷するのは珍しい。
「何に使うんだろう」
「この間の大雨で県道に崩れた所があって、そこの補修をするんだそうだ。だから、長老の寄り合いに相談せずに、村長の判断で出すことにしたんだ」
今の桃園村では、村長も職員も世襲のようになっている。大した権限も仕事量もないから、子供が親の手伝いをしながら見覚えれば充分に務まるのだ。大峰家も、三代続けて職員をやっているから、一郎はほとんどあらゆる仕事をこなせる。
「そんなにひどく崩れたのかい」
「うん。歩いて通れないほどだっていうから、仕方がない」

東京時代に作り上げた交通網や通信網は、今ではほとんど役に立っていなかった。建設した時は、一種の資産のつもりだったのかもしれないが、近代的な道路や橋、鉄道、電話などは、ただ維持するだけのためにも膨大な資材とエネルギーが必要なのである。今となっては、資産どころではない。実質的にはとんでもない負債を背負い込んでいるのと同じだった。
もちろん、大刷新後の日本には、その負債に対する利息を支払うだけの力も意欲もなかったから、必要のなくなった高速道路はすべて放棄した。まことに皮肉なことに、鉄道も毎日運行できるのはほそぼそとしたローカル線だけで、在来の幹線は週に一、二度ぐらい、線路を維持する目的もあって動かしているが、新幹線は放棄せざるを得なかった。
このあたりの県道は、鎌倉時代からの古道だけが、今でも充分役立っていた。
涸谷の上まで登ると、町田の太郎は、もう人力クレーンを使って必要な個数のタイヤを一ヵ所に積み上げていた。
「涸谷のおかげで、桃園村は、県にまで睨みがきくんだよ」
一郎は、得意そうにいった。かつては捨て場に困った厄介ものの古タイヤも、今では貴重品になっていた。大量に持っていればちょっとした財産で、個人でも村でも大きな顔ができるのだ。かつて、本山の目に自動車の墓場と映った涸谷は、今では桃園村の宝の山になっていた。

「ある時は邪魔者、ある時は宝物か」
晴彦は、トラックへの積み込みを手伝いながらつぶやいた。

その夜、晴彦は、しおりの家の隠居所に泊まった。着物の仕立ての講座が始まったので上機嫌な彼女は、寝床に入ってからも、今日習ったばかりの着物の理論についてひとしきり話してから、まだ小鳥がさえずるようにおしゃべりを続けていた。
「ねえ。晴彦ちゃん。素敵だと思わない。木田先生のお友達に機織りを続けている方がいらっしゃるんですって。来年になったら、桃園学舎で手織り木綿が織れるようにしようって、みんな大張り切りなのよ。
綿花も村で栽培するようになれば、着るものまで自給自足できるじゃない。そしたら、晴彦ちゃんの着るものは、全部わたしが作ってあげる。大変な進歩じゃないの」
「うん」
しおりのご機嫌が良いのは何よりなので、晴彦はうなずいた。
二十一世紀も半ばになった今、すべてを村の中で作れる……ほとんど江戸時代に戻ってしまったような自給自足の社会になることが、進歩なのか後退なのか、晴彦にはわからない。
聞くところによると、江戸時代の農村の女性たちも、やはりせっせと機織りをしたそうだが、その布の大部分は売り物で、自分の織った高級な布を自分の身にまとうことはめったになかったそうだ。しかし、今では、自分のため、家族や恋人のためだけに織って仕立てられるし、しおりは、その喜びで夢中になっている。現代の自給自足は、自らのために給するのだ。
晴彦は、幸福感で一杯になっているしおりの暖かく柔らかい体を抱き寄せながら、これ以上を求めるのは罪悪だと思った。そして、不必要なものまでを求めすぎた東京時代に生まれなかった幸せに感謝した。

了

あとがき

数年前から、黄成武先生について金聖歎評点本『水滸伝』を原典で読む勉強会を続けている。会の仲間といっしょに先生のご先祖の故郷である中国江蘇地方へはじめて旅行したのが、一九九三年二月だった。この物語の構想は、マイクロバスで中国を旅していた時の楽しいおしゃべりの中から生まれた。そして、神秘的な山霧が渦巻く道教茅山派の本山、茅山九霄宮に登った時は、友人たちが寺に寄進して、早く本になってたくさん売れますようにと祈ってくれた。翌年の七月から『小説歴史街道』に連載を始め、旅行後ほぼ二年後に一冊の本として出ることになったのは、その御利益だと思っている。

物語の中には、その時の友人たちの姿が散りばめてある。

一九九四年　師走

著者

文庫版のためのあとがき

本書のハードカバー本がPHP研究所から刊行後三年以上たち、今度は縁あって講談社文庫の一冊として刊行されることとなった。最初は大幅に加筆しようかとも思ったが、読み返してみると、一度完結させた物語は思ったよりすきがなく、部分的な加筆はできそうにない。結局、あいまいな文章を訂正したり説明をややていねいにする程度の加筆に終わり、担当の松本和彦氏にはほとんど原型に近いフロッピーディスクを渡す結果となった。

雑誌『小説歴史街道』連載開始以後の四年間、読者の皆さんからずいぶん多彩なご意見やご感想をいただいたので、ここで手短にご紹介しておこう。大きく分けると、その内容は三種類に分かれる。

私には意外だったが、もっとも多かったのは地元見直し型とでもいうのだろうか、都会にばかり目を向けずに、自分の住んでいる土地の長所を見直すことの重要さを感じたという感想だった。そういうテーマで講演を依頼されたことも五、六回ある。書いた当人にとっての桃園村は、まったく具体性のない未来の架空の農村だが、そこに故郷のあるべき姿を読み取

って下さった読者の郷土愛に感動した。

次に多かったのは、日本がこんなになってしまっては大変だ、あるいは、いっそこうなってしまった方が気楽でいいだろうというような、未来の日本がどうなるかをまじめに考えての感想だった。こういう読み方が普通だと思っていただけに、地元見直し型より少なかったのが、これまた意外だった。

三番目はごく少数ながらお叱りだった。たとえば、青少年に、日本の未来がこんな形になるという誤解を与えるから良くない、あるいは、農業がこんな甘いものだと誤解されては困る、といったご意見である。しかし、未来物語はSFの重要なテーマの一つなので、架空の未来の内容が気に入らないといって叱られても、作者としてはただ困るだけだ。SF作家は予言者ではないのである。また、国民のほとんど全部が自作農で、比較する職業さえほとんどない社会での農業が、はたして甘いか辛いかは誰にもわからないのだから、SFはSFとしてお楽しみ下さるようにお願いするほかない。

一九九八年　三月三十一日

著者

2050年は江戸時代 衝撃のシミュレーション

石川英輔

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

© Eisuke Ishikawa 1998

1998年6月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義
製版——信毎書籍印刷株式会社
印刷——信毎書籍印刷株式会社
製本——有限会社中澤製本所

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。
（庫）

ISBN4-06-263809-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一